

第24回 全国バス学習研究大会

平成元年11月10日(金)・11日(土)

研究紀要

泉西小学校

確かな足場をもって、ねりあげのできる子をめざして

泉中学校

共存のよろこびをもたせる集団づくり

—— 互いに高まり合う学習集団づくり ——



はじめに

バズ学習を導入して以来27年目を迎えております。その間、右往左往の試行錯誤をしながら、息長く教育活動の中にバズ学習を位置づけて歩いてきました。

バズ学習を支えてくれたのは、次のような基本的な原理でした。

- (1) 教育の基盤は人間関係にある。
- (2) 人間は個人的な存在であると同時に社会的存在である。
- (3) 教育は生徒の自己発見、自己総合、自己実現を援助する活動である。
- (4) 組織的な教育は通常集団状況でおこなわれる。
- (5) 生徒は教師から学ぶと同時に仲間からも多くのことを学ぶ。
- (6) 学習は学習者の自己活動の過程である。
- (7) 課題のないところに学習は存在しない。
- (8) 学習は、認知的、態度的、価値的な全体過程である。
- (9) 評価の本質は、目標達成活動におけるフィードバック機能である。

以上の基本的仮定と原理をどのように教育活動にしくんだらよいかの遅遅とした実践でした。調和と統合、共存の論理をふまえ、「よい個人はよい集団によってのみ育てられ、よい集団はよい個人によってのみつくられる」ことを信じながらバズ学習に正対しながら長い道程をたどりたいと決意しているところです。

時あたかも教育改革に向けての新学習指導要領が告示され、教育内容や教育方法も新しい方向に向けての移行の時期を迎えることになりました。21世紀に向けて、社会の変化に主体的に対応できる能力をもった心豊かな人間の育成ということを基本的な方針としつつ、4つのねらいが示されております。

- (1) 豊かな心とたくましさを育てる教育の充実。
- (2) 基礎基本の重視と個性教育の推進。
- (3) 自己教育力の育成。
- (4) 文化と伝統の尊重と国際理解の推進。

このような改善の趣旨を生かすためには、現場の教師の工夫や努力にかかっていると思います。自己教育力の育成や個性を生かす教育の充実については、かねて、その指導に意をそそいでいるところであります。主体的に学ぶ意志、態度、能力の育成を、本校では、バズ方式を取り入れ、集団活動のなかで、個と個の相互活動、自主的活動のからみ合いで社会性を育て、同時に、たくましい個性の伸長を図ろうとしているところです。

個性を「生かす」という手段と、個性を「育てる」という目的としての二面を個性重視ととらえ、今後の実践課題にしていきたいと考えております。

このたび、大会を開くにあたりまして、小、中の連携と一貫性ということで、泉西小学校と泉中学校とを会場にして、第24回全国バズ研究大会が開けますことは、誠にありがたいことと感謝いたしております。

遅遅たる歩みと未熟な実践ではありますが、格別なご指導と忌憚のないご叱正を賜わりますようお願い申し上げます。

岐阜県土岐市立泉中学校長

岡 田 脩

平成元年度

校内研究推進

土岐市立泉西小学校

目 次

泉西小学校 研究の歩み	小1
研究推進構想	小4
1. 主題設定の立場	小5
2. 研究主題の追求	小6
<仮説>	小6
<研究内容>	
・ 単元指導計画の作成と課題の設定	小7
・ 学習過程の創造と小集団学習の場面設定	小7
・ 小集団学習の形態	小8
・ 評価	小9
3. 研究を支え、研究を検証する実践	小12
4. 研究組織と授業研究の計画	小13
5. 三部の研究内容と実践例	小14
社会科	小15
音楽科	小27
学級会	小33
6. 研究のまとめ	小41

泉西小学校 研究の歩み

児童数の増加により昭和56年4月、土岐市立泉小学校より分離、土岐市立泉西小学校が新設された。〈みどりに囲まれた中で、歌が流れ、詩情に満ち、さまざまな作品が生み出されていく学校づくり〉これが分離時の標榜であった。

この標榜をもとに、

学校研究主題 「自ら学びとる力のある子を育てる学習指導」 を設定し、

- ・力を合わせて学習できる学習集団
- ・一人一人に学習の成立を図る授業
- ・意欲を起こさせる授業
- ・基礎的、基本的な力の明確化と定着 を研究内容とした。

これらはわが校の、現在に至るまでの研究のおおもとである。新設されたばかりで、施設的にも環境的にも不十分な条件の中ではあったが、一丸となって立ち向かった当時の教師の姿は、現在もなお我々の誇りであり、目標となっている。

そうした中で、昭和58・59年度の2年間、文部省教育課程（音楽科）の指定をいただいた。学校研究主題は同じであるが、研究テーマは以下のように設定した。

研究テーマ 「子ども一人一人が進んで音楽活動にとりくみ、

豊かな表現力を身につけるための指導はどうあったらよいか」

— 響きをつくり出す子どもをめざして —

音楽科を中心に、“子ども一人一人が自ら、楽しく・正しく・美しく表現できる”姿をめざして、次の研究を推進した。

- ・年間指導計画の作成と見直し
- ・心の響き（学習の過程、意欲、学習課題と見届け・援助）
- ・和声の響き（リズム、旋律、重なり、憧れ、感得）
- ・音楽の生活化（音楽集会、オペラ、生活の中で）

「音楽の生活化」とは研究実践の総合的な発表・確かめの場として、あるいは、音楽の生活化と伝統づくりをめざす場として、『やまびこ小集会（音楽集会）』『やまびこ大集会（音楽大集会）』と『オペラ』を実施上演してきた。この三つの実践は、本校の児童はもとより、教師も親も地域も期待するものとなり、現在では生活の一部として、確かな伝統として位置づいている。音楽性の追求のみならず、学級や学校として心と活動をそろえる、集団としての凝集性を高める、より高い文化を創造・獲得するといったメンタル的な部分も合わせて追求してきた成果だと考えられる。

現在までの実践を紹介すると次のようになる。

- ・やまびこ小集会…学期に二回程度、学級による歌声・器楽演奏の発表会
- ・やまびこ大集会…学期に一回、テーマをもとに、学年ごとの音楽発表、ナレーションが入り物語的な発表会
 - 「七夕」「泉の町めぐり」「ふるさと土岐市」「子どもたちの四季」
 - 「未来博」「やすお君の夢」「6年生とのお別れ」「半日村」 など
- ・オペラ …6年生全員と5年生の一部により上演、キャスト・合唱隊・器楽など児童と教師が一体となって創り出すものである。
 - S. 59-「安寿と逗子王」 S. 60-「泣いた赤おに」
 - S. 61-「走れメロス」 S. 62-「雪物語」
 - S. 63-「火童子幻想（土岐の昔話より）」

文部省の研究指定発表の昭和59年度は、土岐市地域課題研究指定の初年度でもあった。3年間の指定であり、昭和59・60・61年の間、それまでと同じ研究主題とテーマで、研究推進に臨んだ。

しかし、音楽科の研究を中心としながらも、更に幅広い学校教育活動の場面で児童の全人格を統合的に発達させたいと願い、研究と実践の場面を明確にすると同時に、相乗的な転移を期待し、教育活動は進められた。

研究を取りまく実践活動として、清掃・分団活動・朝の会と帰りの会・全校運動・給食・読書の指導に力を注いだ。研究のための研究という考え方ではなく、学校教育目標の具現をめざし、統合的に「美しい心」を育てようとしたのである。

美しい和声が響き、明るく活発な授業、基礎学力の向上、静かな清掃、下学年を思いやる心、暖かい人間関係がある学級、規律ある集団行動、体力の向上、楽しい給食など多くの面で、好ましい成果が表れてきた。特に、一人一人の児童が、どこかの場面で活躍する姿が見られるようになり、全人格とまではいかないにしても、それぞれに生きる場面が表れてきたことに大きな喜びをもった。

昭和63年度に入り、研究テーマを次のように設定した。

研究テーマ 「確かな足場をもった発言のできる子をめざして」

—資料を読み取り、活用できる子—

音楽については、授業はもとより集会やオペラも定着し、成果も十分表れてきたという判断のもとに、更に論理的な思考や発言のできる子をめざそうと、上記のテーマを設定し、社会科を中心にして研究実践を進めることになった。感覚や響きを大切にする音楽学習と論理性を大切にする社会科学学習のドッキングにより、より高い次元で子どもたちを育てようと考えたのである。

各学年の願う姿として、

低学年…体験を足場として、効果的に表現できる子

中学年…資料の読み取りを足場として、発言できる子

高学年…先行学習を足場として、ねり上げのできる子 を想定した。

研究内容は以下のようである。

- ・年間、単元指導計画の作成 (身につけたい力と課題の明確化)
- ・学習の過程のモデル化 (つかむ-しらべる-まとめる)
- ・資料研究と資料づくり (多様な発想、多様な解決、地域資料)
- ・資料等の蓄積 (活用できる)

また、西小五つの柱として、「読書・歌声・授業・清掃・全校運動」を明確にし、先年度までの実践を位置づけた。これら五つの実践の根本にあるねらいは、「心」を大切にして、学校教育全体の調和を図りたいということである。この中の授業は社会科の研究が中心になるわけである。「発言できる子」から、次第に「ねり上げのできる子」へと願いが拡がり、社会科においても人間関係に目を向ける必要性を強く感じた。

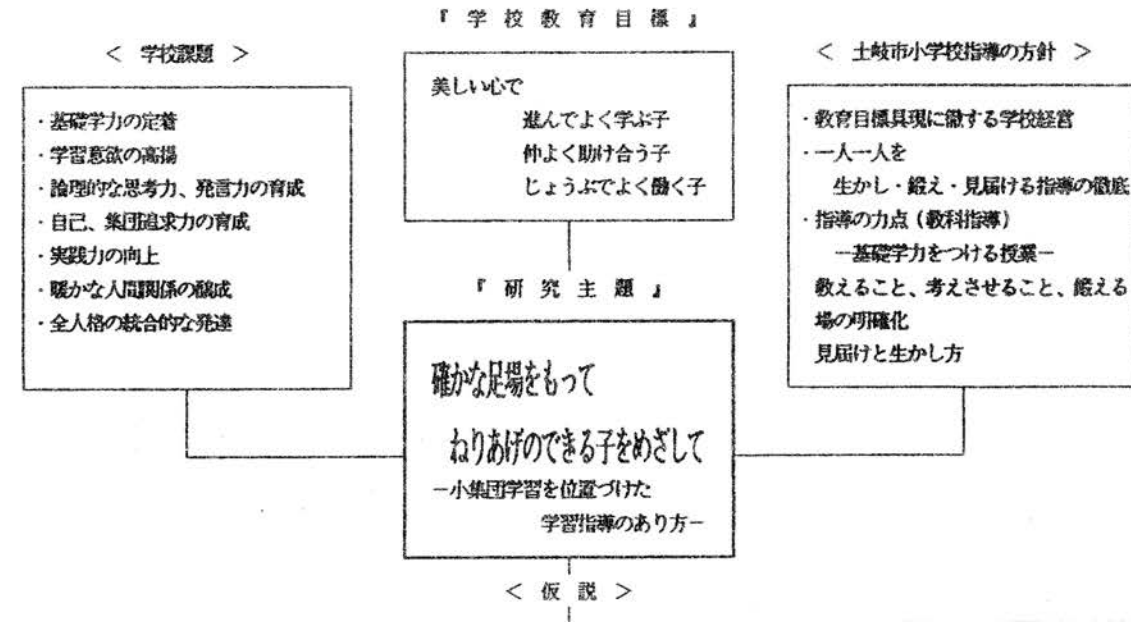
以上、遅々とした研究の歩みを紹介してきたが、研究の根底にあるのは、やはり新設当時の強い願いである。少し表現を変えると、今年度の願いとまったく同じである。

- ・力を合わせて学習できる集団づくり
- ・一人一人に学習の成立を図る授業づくり
- ・意欲の喚起

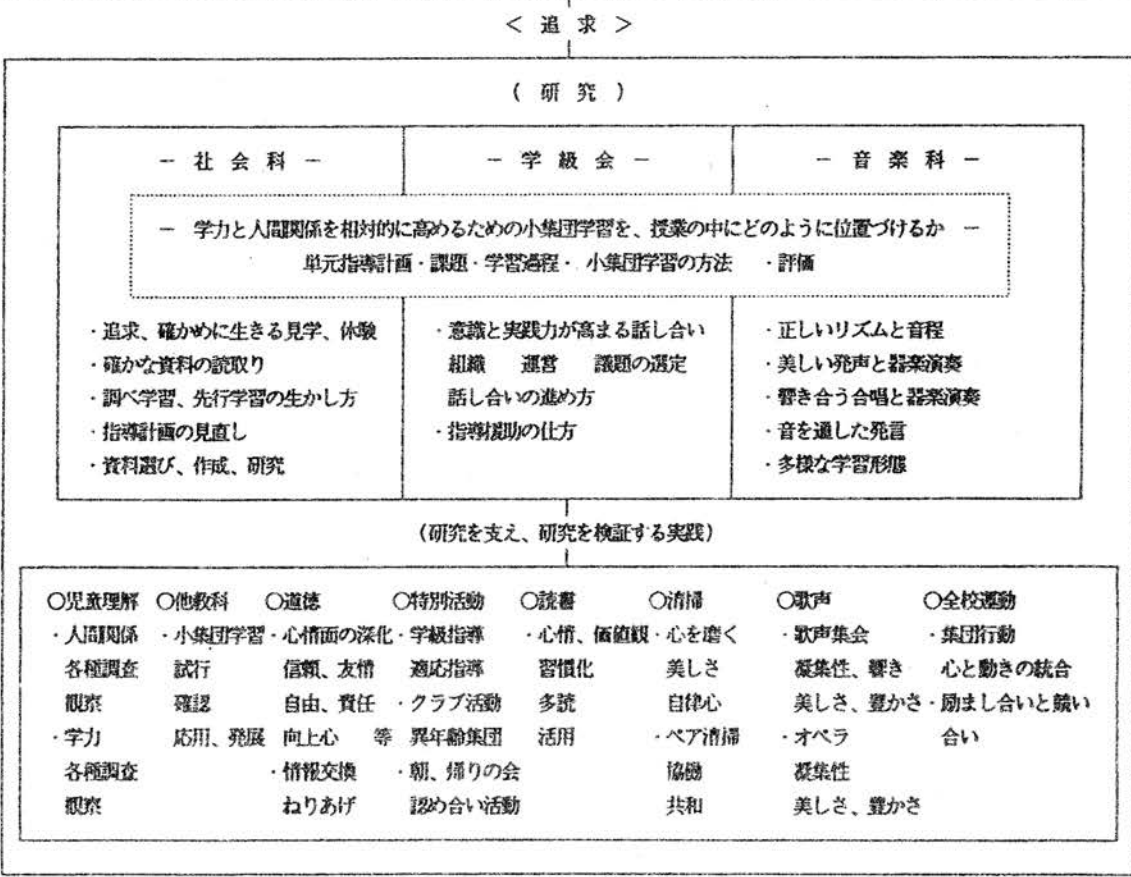
伝統に支えられ、伝統を受け継ぎ、伝統をさらに発展させていく。こうして本校の児童たちは、確かな学力と暖かな人間関係、そして豊かな文化と社会性を獲得していくのである。

そして、本年度は次から示すような研究を進めたいと考えている。子どもたちの合唱の姿や黙働で汗を流す姿、縦と横の列が真っ直ぐにそろった行進の姿など、本校の精神的状況を示しているととらえ、校訓として、「一心集中」を合言葉に全教育活動を押し進めていきたいと考えている。

研究推進構想



個人差のある児童たちが、小集団の中で学習課題に取り組むことは、個の存在と学習が増長され、話し合いや教え合いの場面も増加する。その結果、好ましい人間関係による集団追求が実現されると同時に、個々の学力の定着・拡大、意欲の向上、欲求の充足が図られる。



〈研究内容〉

○単元指導計画の作成と課題の設定

課題とは

共通に解決すべき問題
学習目標に近付けていくための媒体
学習意欲の原動力 授業の柱

その条件とは

適度抵抗
多様な発展性 多様な思考、解決が可能
討議を発展させていく膨らみを内在している

「課題のないところに授業（学習）は成立しない。」という前提に立ち、1単位時間授業の課題を設定すると同時に、全単元を見通した指導計画と課題を作成する。

単元指導計画の中には、「身につけたい力」として、認知的目標と態度的目標を設定し、学習内容・指導内容・展開・評価を明記する。

○学習過程の創造と小集団学習の場面設定

授業を進める教師側にとっても、学習の主体である児童にとっても、一時間の授業の流れがつかめていることが、学習の成立につながる。その為に、大まかではあるが、一時間の学習過程を想定してみた。

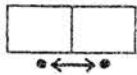
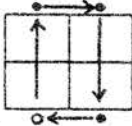
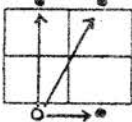
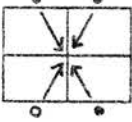
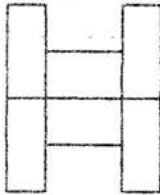
過程	場面	社会	音楽	学級会
つかむ過程	○足場を確認し、本時の学習課題をつかむ場面	見学結果 資料の読取り 前時の確かめ 調べ学習結果	つまずき 比較、問題点 懂れ	問題の姿 願い
さぐ過程	○学習課題解決の場面 多様な考えや対立意見を出す場面	人々の願い 様々な読取り 因果関係 特色	練習 比較 確かめ 交流	願い 目的 具体的方法 分担 製作活動
まとめ過程	○学習内容の確かめと定着を図る場面	まとめ クイズ 新たな課題	発表 批評会 新たな課題	決定事項確認 約束

学習目標と学習の成立を考えて、この過程の中に小集団学習を位置付けることが大切である。しかし、どの過程にも全て小集団学習を位置づけるというのではなく、あくまでも個の高まりを期待して位置づけるのである。小集団学習の形態として、次のように考えている。

○小集団学習の形態

学習過程と小集団学習の場面を想定したが、その場面にどのような学習形態で小集団学習を取り入れるか、について考えてみた。

学年あるいは学級の発達段階をもとにして、学習形態を様々な形で取り入れる。また、学習目標や場面も考慮しながら、学習の成立をねらって小集団学習を位置づけることが大切である。

段階	学習形態と活用		
初低 学 期年	○ペア 	必然性が生まれる 一人一人が生きる 人間関係の基盤になる	・話す 聞く ・活動 確かめ 教える ほめる ・尋ねる 教える
中 学 期年	○4人 輪番法 	情報交換、練習、確認が中心 全員発言（参加）が機械的にできる 緊張感が生まれる 学習方法が身につく	リーダーは進行役的な活躍 ・交流 ・練習
	指名法 	指名法 発言の方向が指向される（ねりあげの初歩） 緊張感が生まれる	リーダーが育つ ・交流、練習 ・話し合い
後 高 学 期年	自由会話法 	自由会話法 主体性が育つ 集団凝集性が生まれる 楽しく充実した雰囲気生まれる 好ましい集団に高まる	・話し合い ・追求、まとめ
後高 学 期年	○6人 輪番法 指名法 自由会話法 	○6人 情報交換、練習、確認 考えなどの多様化 ねりあげ	

この様な形態で学習が進められるようにするために、学習のルールやリーダーの役割を指導する必要がある。

○評価

・児童の評価と同時に教師自身としての評価が必要である。評価を下の表のようにとらえ、理解している。

評価	児童	教師
見届け(評定)	到達したか	成立したか、実態把握
フィードバック	つまずきはどこだ なぜできなかったのか	どこに問題点があるのか 指導のしなおし、徹底指導
励ましと方向づけ	もう一度やってみよう ここに気をつけよう	指導内容・方法の改善 この様にやっごらん

・評価の方法

- ・確かな足場 … 観察(授業における反応、作品、記録など)
(学力) 学習到達度テスト
学力診断テスト
- ・ねりあげ … 観察(授業における反応)
(人間関係) 導き出された結論
学習参加度調査
人間関係(児童同士の関係、児童と教師の関係)の調査

・客観的、数値的に児童の実態をとらえる

「学力がついているのか」と問われたとき、あるいは自分の指導を振り返るとき、どうしても客観的で数値的な実態把握が必要になってくる。主観的な実態把握もある面では必要であるが、主観だけでは曖昧であったり間違っていたりする恐れがある。

授業に対してとても積極的で、挙手発言が多い。ノートを見るときちんとまとめている。家でも一時間は勉強している。だから、学力も身につけているだろう。ととらえていた。ところが、テストを試みたらあまりできていなかった。

忘れ物はよくするし、机の中はごみだらけ。授業中はお客さんに徹している。友だちと話している姿は余り見かけないし、休み時間にはぼうとしていることが多い。これは、学級の中で位置ついていないだろう。ととらえていた。

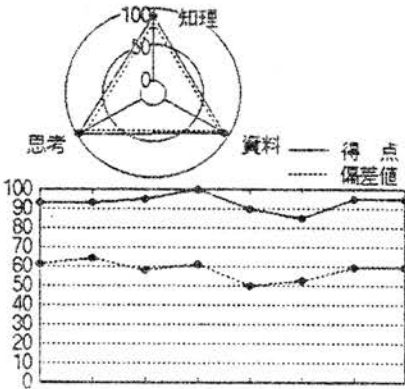
ところが、ソシオで調べてみると、数人の友だちから指名されていた。指名理由も書かせてみたら、「優しく教えてくれる」「一生懸命掃除をする」であった。

こうしたとらえ違いを経験することは、誰しもあることではなかろうか。観察が甘く、浅いと言ってしまうまでもあるが、より正しく児童の実態を把握するためには、客観的で数値的な調査が必要である。実態を正しくとらえ、指導に生かし、その後の変容を見届ける。さらに、次の指導を考える。このサイクルを大切にしたい。実態把握の方法として次のような実践を試みている。

<評価の例1 「学習到達度テスト」>

単元が終了した時点で、市販のテストを利用して到達度を評価する。間違え直しをやらせたり、つまずきの多い問題については授業のやり直しを行ったりして、事後指導にあたる。

また、得点をパソコンにインプットして、児童の学力状況を把握する。学級としての状況をつかむことができるし、一人一人の状況もつかむことができる。下の資料は昨年度6年生のあの児童の、3学期に実施した社会科テストの集計資料である。



テスト名	知理	資料	思考	計	偏差値
1 新しい世の中	43	50	--	93	61.4
2 平和な日本	--	48	45	93	64.4
3 政治の歴史	45	--	50	95	58.1
4 日本国憲法	--	--	100	100	61.2
5 学年のまとめ	40	--	50	90	50.0
6 学年のまとめ	--	85	--	85	52.3
7 学年のまとめ	45	50	--	95	58.2
8 平和な世界	50	--	45	95	59.3
合計	223	233	290	746	58.3
到達度	89.2	93.2	96.7	93.2	

この資料から、
 ・確かな学力が身につけている
 ・やや知識理解面に弱さがある
 ・時間の経過が長いと記憶が薄れる などが分かる

<評価の例2 「学力診断テスト」>

3学期に、「教研式CRT」を実施し、学年・学級・個人の学力状況を把握する。3学期の実施なので、事後指導に欠けるが、次年度の担任が指導の基礎資料として利用する。次の資料は昨年度の6年生の集計表であるが、全国レベルから見てもかなり高いレベルだと言える。

教研式 CRT 学年表 6145 イズニシ 小 学校 6 年 131 名 偏差値 6年用 社会 B 64年 3月

クラス	第1部 知識・理解 満点 24点				第2部 読解・資料活用能力 満点 17点				第3部 社会的思考・判断 満点 17点				総合 満点 58点				全国平均による3段階判定				
	人数	達成状況	AO	AO%	人数	達成状況	AO	AO%	人数	達成状況	AO	AO%	人数	達成状況	AO	AO%	1	2	3	4	5
1年	計 4480.9	21 51	22(50)	21(48)	71.5	31 71	13(30)	28(64)	85.9	1 1	4(14)	30(86)	79.4	1 1	10(23)	33(75)	1	5	15	12	8
2年	計 4477.1	51 111	17(39)	22(50)	72.3	71 141	4(14)	31(70)	82.6	31 71	3(7)	30(86)	77.3	4 1	9(20)	31(70)	4	5	15	14	8
3年	計 4385.3	21 51	11(24)	20(70)	77.3	21 51	8(19)	33(77)	89.9	1 1	1(3)	39(91)	84.2	1 1	7(14)	35(81)	4	12	12	13	15
3クラス	計 13181.1	81 61	50(38)	73(56)	73.2	12(9)	17(23)	92(70)	85.1	4(3)	12(9)	115(88)	80.2	4 1	24(20)	99(74)	4	12	48	37	22
全国の出現率	男72.4	21 1	40	-3.3	65.7	22 2	26	52	74.8	15 1	15	70	71.0	1 1	30	53	100	20	96	96	100
女72.1	21 3	43	3.4	66.0	19 30	51	75.4	11 1	17	72	70.9	1 3	36	51		96	96	96	96	96	

3. 研究を支え、研究を検証する実践

児童は、学校教育全ての場面で統合的に成長する。児童の全人格の統合的な成長を図ると同時に、研究の検証をしたり、発展させたり、あるいは支えにしたりするために、他の領域においても実践の充実を図る。相乗的な学習効果を期待するのである。

①児童理解 … 実態を把握し、指導に生かし、高まりを確かめ、次の指導に生かすために。

・客観的にそして数値的に実態を把握し、指導に生かす

学力診断テスト … 年1回、3学期に実施

ドリルテスト … 単元学習時、学習後に実施

学習到達度テスト … 単元終了時に実施

学習参加度調査 … 単元終了時に実施

仲間との情報交換調査 … 適時実施

ソシオメトリックテスト … 適時実施

体力、運動能力テスト … 年1回、1学期に実施

・活動から実態を読み取り、指導に生かす

作文、読書記録、家庭学習、生活反省カード などいろいろな場面で

②他教科、他領域

・研究の試行、確認、応用、発展

③読書 … 心を耕し、心を深め、心を広める

・全校読書の時間（土曜日に30分、一人読みと教師の読み聞かせ）

・読書頑張り運動（親子読書、紹介郵便、しおり、教師の読み聞かせなど）

④清掃 … ペアとの心の交流、環境美化

・ペア清掃（1年生と6年生、2年生と5年生）

・黙勤清掃（口を閉じ、汗が流れるまで気持ちを込めて、静思の時間）

⑤歌声 … 歌声を響かせ、心を響き合わせる

・歌声の時間（火・水・金曜日に10分ずつ、委員会の児童が担当学級へ出向いて指示）

・やまびこ小集会（音楽集会）学級ごとで学習の成果を披露する

・やまびこ大集会（音楽集会）テーマのもとにナレーションも入れた発表会

・オペラ（6年生の児童と教師が一体となって）

⑥全校運動 … 体力の向上と集団行動

・月曜日から土曜日まで20分間

・体力づくり（持久走、柔軟・調整運動、縄跳び運動）

・集団行動（全校運動の終わりに行進）

以上のような実践活動の中で、自分が生きる場面を持つ子どもが増えてきている。

4. 研究組織と授業研究の計画

テクニク的なことも大切ではあるが、教師としての生き方・考え方を研究を通して高めていきたい。児童の姿で研究を進めていきたいと願い、それを基本に計画を立てた。

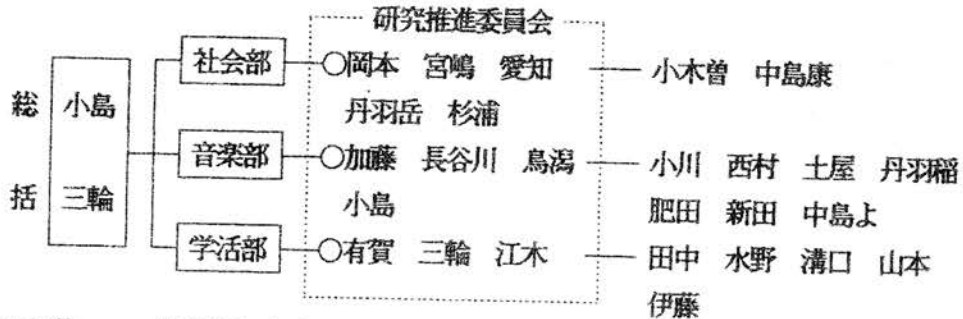
○研究組織 … 研究主任と研究推進委員会を置く

研究推進委員

学校長・教頭・教務主任・生徒指導主事・新採指導担当

研究主任・学年代表(各学年1名)

計12名



○研究の母体 … 隣接学年をブロックとして、ブロックで研究実践を進める

低学年ブロック—1、2年生

中学年ブロック—3、4年生

高学年ブロック—5、6年生、特殊学級

○研究推進委員

- ・研究の母体はブロックであるが、ブロックの中で、社会科も音楽科も学級会についても研究実践をしていかなければならないので、研究推進委員の活躍は非常に重要である。
- ・研究主題追求の要として、研究の方向づけやまとめなど、全校的な立場にたつて、多面的な研究推進を図らなければならない。

○授業研究の計画

- ・授業研究のための授業公開は全員とした。全校研究かブロック研究のどちらかで全員が一回は研究授業を公開するということである。教師の真剣な取り組みと授業実践力の向上、そして、同じ立場に立つてこそ、真の相互理解と相互協力を図りたいと願ったからである。
- ・全校研究会はブロック提案の形を取り、支えるのが研究推進委員会である。年4回。
- ・ブロック研究会は、それぞれで実施していくが、参加は全校的にオープンとする。
- ・指導者は、社会科・音楽科・学級会でそれぞれお願いする。しかも年間を通して、同じ指導者を要請する。
- ・あるブロック研究会で音楽の研究を実施する場合、他のブロックで音楽を研究している教師も来校された指導者に授業を見ていただく。

以上の研究を、社会科・音楽科・学級会の三部で推進していく。

5. 三部の研究内容と実践例

今年度研究の窓口を三部に分けたのは、今までの研究の歩みを引き継ぐと同時に、更に発展させたいという願いからであり、児童をより高い次元で成長させたいと願ったからである。

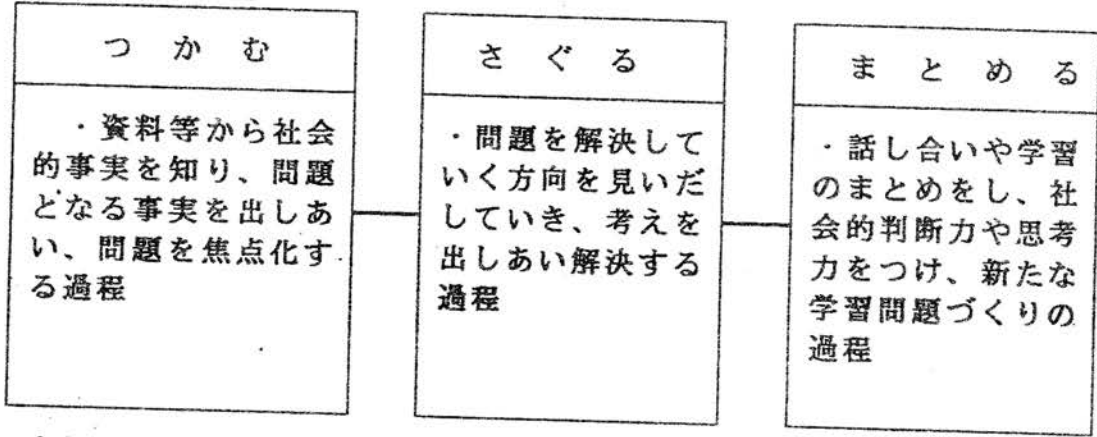
三部とも研究主題の追求が中心になるわけであるが、それぞれに大切な特質があり、その大切な特質からくる力についても高めていきたいと考えている。

高めたい特質を次のようにとらえている。

- ・社会科…資料や先行学習をもとにした論理的な思考や発言
- ・音楽科…和声の響きと心の響き
- ・学級会…暖かい人間関係と自治的实践力

(2) 学習過程

学習過程のそれぞれの段階を以下のように考えた。



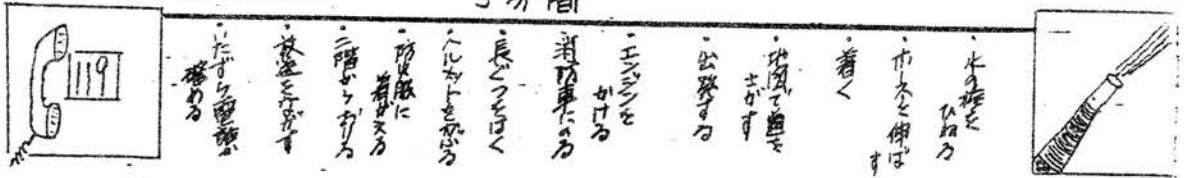
本年度は、三つの過程のなかの「つかむ」「さぐる」の過程を重点に取り組んできた。

① 「つかむ」段階での、課題の選定と資料提示の仕方の実践例

この段階では、課題に至までに問題意識を強く持たせることが大切と考え、驚きや矛盾を感じさせるような資料や資料提示の仕方を工夫した。

例 1 (4年生「火事を防ぐ」)

始めに、火事が起きて発見し、電話をかけてから放水が始まるまでにやることが予想させた。



これだけのことをやっているんだと思い起させておいて、町内であった火事の時、119番～放水がどれだけの時間だったか予想させた。すると、「15分。」「10分。」の声があった。そこで、実際には5分だったことを話すと「うわあ、早い。」という声がたくさん出た。そこで

なぜ、こんなに早くできたのだろう。

という課題ができ学習に入ることができた。

例 2 (4年生「火事を防ぐ」)

家等の密集具合にあわせ、消火栓、防火用水等が計画的に配備されていることを理解させる授業では・・・

子供が校下の防火用水調べをした結果を記した地図に、駅前の防火用水、消火栓の位置図を付け加えて記した。駅前は、周辺地域に比べて家屋の密集具合からずっと設備が多い。この地図をみたとき、子供達は、

駅前には、なぜこんなにも消火栓や防火用水があるのだろう

素直に驚き、学習に入ることができた。

②「さぐる」段階での深める課題(第二課題)

始めの課題から子供達は、自分で調べたり、友達との話し合いで課題を解決していくが、あるところ迄行って行き詰まったり、一方に流されたりして内容が深まらない状態が学習時よくある。

そこで、「さぐる」段階で、ゆさぶりの発問、深める課題(第二課題)が必要であると考えた。

(4年生「暖かい土地の暮らし」(沖縄の暮らし))の事例

この授業のねらいは、「沖縄県の人々が、台風の被害を防ぐために、住まいを工夫していることがわかる。」授業である。

まず、土岐市と沖縄県の家をスライドで見て、違いを調べ

なぜ、沖縄県の人々は、このような家をつくったのだろう。(第一課題)

という課題が成立した。

そこで、子供達は、前時までの学習で、「沖縄県は台風がよくくる・一年中暑く、特に夏暑い・海に囲まれている。」という足場でその理由を考えた。

その後のグループや全体の話し合いでも、沖縄県は台風が多いから、石塀やしっくい屋根や家を守っているという方向で固まってしまった。

しかし、沖縄県の台風のすごさ(風力、回数等)をあまり意識せず、土岐市の台風と同じように考えている様子であった。

そこで

土岐市にも台風は来るのに、沖縄の人々は、なぜこんな家をつくったのだろう。(第二課題)

とゆさぶりの発問をした。

そこから、子供達は、台風の数や風力をもう一度調べ、「なるほど、沖縄の台風はすごい。こんな台風なら家を守る工夫（石塀、しっくい）が必要だ。」と改めて再認識することができた。

(3) 資料の収集と選択

子供達の先行知識や興味とつなげ、しかも、課題と結び付けられるような資料の収集と選択を考えてきた。子供達の先行知識や興味をもたせるには、地域資料を開発していく必要があるし、その内容や提示の仕方など、また、学習過程の各段階においての性質も考えていく必要がある。

その中で、「つかむ」段階での資料（先行知識や興味とつなげ、課題に結びつくような資料）、また、提示の仕方を本年度は大切にしてきた。

この段階における資料は、事実を知ると同時に、疑問をもつなど多様な見方、考え方ができることが必要である。この多様な見方、考え方がバズ学習時の幅広い話し合いの基になるからである。

5年「畑作や畜産にとりくむ人々」の事例

認知目標・・・養豚を取り入れている畑作農家では、収入を安定させるために養豚を取り入れていることがわかる。

態度目標・・・自分の考えをもち、話し合いに参加できる。

本時に至までに「日本の稲作」について学習し、前時は、野菜づくり専業農家（小川さんの家）を学習してきた。そこでは、小川さんが七種類もの野菜を栽培し生活を安定させていたこと、また、野菜づくりは、手間がかかるので、植え付けや収穫が重ならないよう工夫していたことを学習した。

本時は、この小川さんの野菜づくりの学習を基にして、畑作に養豚を取り入れている緑川さんの工夫を考える授業である。

本時では、小川さんと緑川さんの家での働く人、耕地面積、収入支出、作っている野菜の比較、そして、各々の一日の仕事の様子を提示した。

資料 1

小川 (野菜専業農家)		緑川 (野菜と養豚)
4人	働く人	3人
2畝	耕地	2・5畝
800万	収入	500万+750万
300万	支出	180万+630万
・すいか・人参・里芋・牛蒡 ・大根・ジャガ芋・薩摩芋	作っている物	・里芋・ジャガ芋・人参 ・生姜・牛蒡・落花生・麦
	その他	・親豚20頭

資料 2

小川さん、緑川さんの一日

4	5	6	7	8	9	10	11	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	朝食	野菜の出荷	畑の仕事			畑の仕事	昼食	畑の仕事			野菜の取入	出荷の準備	夕食				
4	5	6	7	8	9	10	11	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	豚の世話	朝食	野菜の出荷	畑の仕事			畑の仕事	昼食	畑の仕事		野菜の取入	出荷の準備	豚の世話	夕食	出荷の準備		休息

これらの資料により、児童達は

- C1 : 緑川さんのほうが広い土地です。
 C2 : C1君につけたしで、緑川さんのほうが広い土地だけど、働く人は少ないです。
 C3 : その訳は、緑川さんのほうが機械をたくさん使っていると思います。
 C4 : 緑川さんと小川さんは、作っている野菜の数は同じだけれど種類が違う。
 C5 : 緑川さんは、野菜づくりの他に豚も飼っている。
 C6 : 緑川さんのほうが収入も多いが支出も多い。
 C7 : 緑川さんが野菜の他に豚を飼っているのは、収入を増やすためだと思います。
 C8 : 緑川さんは、朝早くから、夜おそくまで働いている。
 C9 : 野菜づくりだけでもたいへんなのに、緑川さんは、なぜ、豚も飼っているのだろう。

このように2枚の資料（前時の学習資料と本時資料・働く人数や収入と一日の労働の様子）を比較したり、つなげたりする事により、耕地の広さと働く人、野菜の種類、年収、働く様子等幅広く事実を見ることができ、その違いが生じている原因も予測している。また、仕事量では、緑川さんのほうが豚を飼っている分多いことがわかり、「なぜ」という課題につなげることができた。

(4) バズ学習

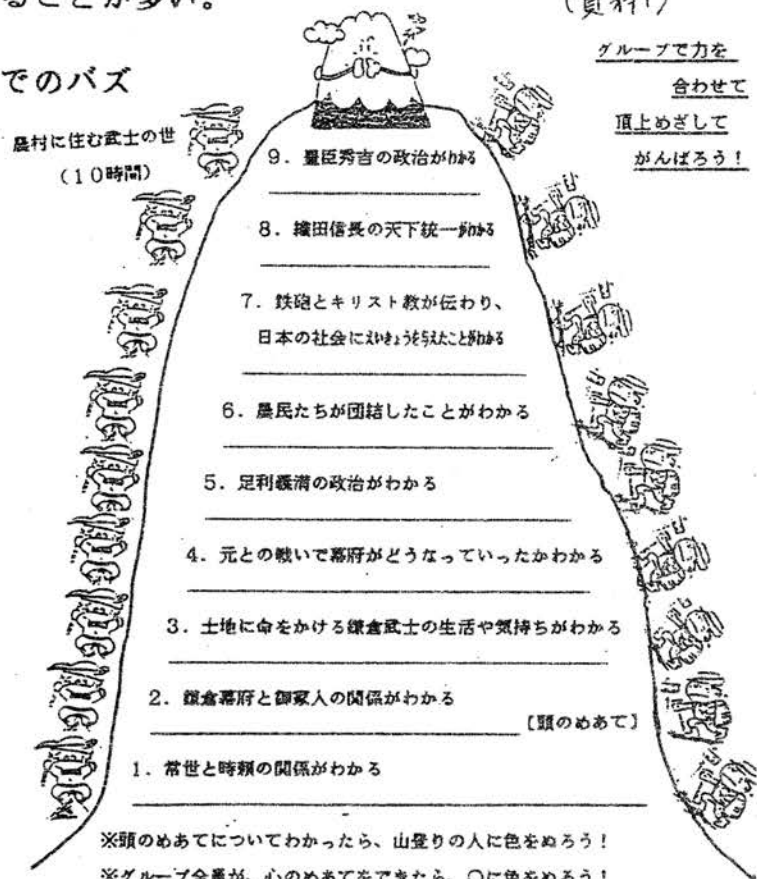
①話し合いの場の位置付け

学習活動や課題に合わせて、話し合いの場を考えていかなければならない。しかし、足場をもった話し合い、ねりあげを考えると、「さぐる」段階に位置付けることが多い。

(資料1)

例1 「つかむ」段階でのバズ

前時までの学習内が本時に大きく関わってくるのがよくある。そこで、前時までの復習と、本時のめあて、「頭のめあて」「心のめあて」（資料1）を、導入時に位置付けた。このめあてをグループで確認することは、前時までの学習内容の定着が低かった児童にとって、本時の学習内容や課題解決に役立つと同時に学習の方向づけができると思った。



【心のめあて】 問題に対して、自分の考えを持って
グループの話し合いに参加しよう!

リーダー：前の時間わかったことを発表してください。

C1：頼朝が平氏をうって、鎌倉に幕府を開いた。

C2：将軍と御家人は御恩と奉公の関係で結ばれ、「いざ鎌倉」のときは、命懸けで戦うことを誓った。

リーダー：2の人形（鎌倉幕府と御家人の関係がわかる。）に色をぬりましょう。

リーダー：今日の頭のめあては、「土地に命をかける鎌倉武士の生活や様子がわかる。」です。心のめあては、「問題にたいして、自分の考えをもって、グループの話し合いに参加しよう。」です。

この「山登り表」を使い、導入時にバズを取り入れることにより、本時の学習は、「土地に命をかける鎌倉武士の生活や気持ち」であることが確認された。さらに、今までの学習は、源頼朝が鎌倉幕府開き、将軍と御家人は、御恩と奉公の関係で結ばれていることが確認できた。この「山登り表」は、学習の方向を知るうえで、また、個人の考えづくりの足場として有効であった。

例2 「さぐる」段階でのバズ

この段階では、課題にたいして自分の考えを持ち、それを集団の中で出し合い、より多様な見方、考え方ができることを大切にしてきた。それには、既習学習を生かす場を意図的に設けることや、集団のなかで認め励まし合うという人間関係を大切にしてきた。

この段階でバズ学習を位置付けたことによって、自分とは違った見方、考え方を知ると同時に、自分と同じような考え方があることに気づき、さらに自分の考えを、より一層深める場になった。また、発表の場でも意欲的に学習に参加する児童が目立った。

5年「畑作や畜産にとりくむ人々」の事例

「なぜ、緑川さんは、野菜づくりの他に養豚もしているのだろう。」という課題にたいして、

自分の考えづくりの段階で、A君は、

(小川さんの学習から)

野菜は、手間がかかるし、値段が不安定。

野菜づくりは、天候に左右されやすいから、緑川さんは豚を飼っていると思う。そして、豚の糞は畑の肥料になるのでは？

と考えバズ学習に臨んだ。

バズ学習では、一人一人が自分の考えを発表する中で、

野菜づくりは、手間がかかる。野菜の値段は不安定、天候に左右されやすい。

などほとんどグループのメンバーと同じ考えであったが、最後の「豚の糞は畑の肥料になる。」という考えは、A君だけであった。

A君が、この考えを発表すると

「水田でも、たい肥で土づくりをしていたから、畑も土づくりが必要だ。

豚の糞は、畑の土づくりに利用できる。」

とグループのみんなに認められ、自信をもって全体の場でも発表でき、今度は、クラスのみんなに認められた。

そして、あるグループでは、「余った野菜を豚の餌にすることができる。」という考えがでた。また、他のグループでは、収入と支出から「小川さんは、500万円もうけて、豚を飼っている緑川さんは540万円で、豚を飼ってもあまりもうからないのはなぜだろう。」という意見が出てきた。

②話し合いの方法

話し合いの方法、人数等いろいろな考え方があがるが、社会科では、

低学年・・・対人法、輪番法

中学年・・・輪番法、指名法

高学年・・・輪番法、指名法、自由会話法

をつかい話し合いを進めてきた。このような方法を用いてきた理由は、

○低学年では、自己主張が強く、話をまとめたり、進めたりすることがたいへん難しい。それで、人数も2～4人で話し合わせてきた。

○中学年では、自分の考えをもって参加することができるので、輪番法や指名法を用いることができる。まず、自分の考えをグループ出し合い、自分と同じ考え、違う考えがあることに気づき話し合いを進めるようにしてきた。人数は4～6人で話し合わせてきた。

○高学年では、自分の考えをもって臨み、考えの違いなどをまとめたり、関わらせて話し合うことを目指してきた。それには、人数は、4～6人が必要である。

しかし、グループ構成、話し合いの方法、役割分担 などいろいろな問題がある。また、高学年でも、いくら個人の考え作りをしても、一人一人が発言するだけで個と個の関わりがうすく、友達の考えと自分の考えを比べる姿がなかなか見られなかった。

そこで、個の考えをグループで話し合わせる時「班長カード」(資料1)を利用して、班長指導をしてきた。

このカードを利用して、グループの話し合いを進めるようにしたら、2～3のグループで、友達同士それぞれの考えを関わらせて話し合いを進めていく姿勢が現われてきた。

6年「農村に住む武士の世」の事例

リーダー：鎌倉武士が戦いの練習に励んだりするのは、どうしてですか。

社会班長カード

- 資料1
1. 前の時間の復習をする。
 - ・グループの子、一人一人に指名して言ってもらおう。
 - わからない子には
「わかりません」とか「わすれました」とはっきり言ってもらってその子の立場をはっきりさせてから教えてあげましょう。
「これがきたえあう仲間です」
 2. 今日の社会の勉強のめあてを確認しあう。
 - ・班長がグループの子に言って、みんなを確認しあう。
「今日の理のめあては「-----」です。
心のめあては「-----」です。
グループみんなが分かるように
かんじによって発音強しましゅう！」
 3. 問題に対してのグループ学習では、
 - ・一人一人の考えを言ってもらおう。
分からない人にも、そのことを言ってもらおう。
(何も言わないで通ぎてしまうことは、その子に力をつけていくことができません。グループもよくなっていきます。)
 - ・班長もふくめて、全員が考えを発表したら、グループの中で自由に話し合ったり、班長が指名したりして、問題に対して考えを深めていく。
 - 友達の考えを聞いてどう思ったか、言っておける。
 - 自分の考えと友達の考えを比べて発表し合う。
 - ・グループ学習後、クラスの中へ発表するようにグループみんなではげましかけていく。
(全員の手が挙がるグループは、しっかりグループ勉強ができていくということです。)

C1：やぶさめのところのように、「いざ鎌倉」のときのために弓矢の練習をしている。

C2：門番のところで敵が土地や田圃を取りにくるかもしれないので守っている。

C3：わたしは、馬の世話のところで、馬は戦いの時や「いざ鎌倉」で駆け付ける時、とても大切なので世話をする人が餌をやって、いつでもいいようにしていると思います。

C2：C1君に付足して、やぶさめは「いざ鎌倉」の時だけでなく、敵が攻めてき

たときに戦えるようにしていると思う。

C1：土地を守ることも・・・

リーダー：C2君の門番のことだけど、源氏の武士は、ガンが飛ぶのを見て、敵が隠れていることを見抜いたことがあったけど、門番の人はそういうことも見ていると思います。

③ 個人の足場と集団が生きる課題の明確化の実践事例

3年生「買物と商店街」の事例

認知目標 商店街の人たちは、売り上げを増やすために、商店会をつくり協力して活動しているだけでなく、さらに楽しく買物ができるように工夫していることがわかる。

態度目標 グループのなかで自分の意見が言え、全体へも広げることができる。

前時において、駅前商店街を見学し、商店街の工夫を見学ノートに整理して子供達は本時にのぞんだ。本時の第一課題は

たくさんのお客さんに来てもらうために、商店街の人たちは、どんな工夫をしているのでしょうか。

であった。この課題について、全体発表の前にバズ学習を取り入れた。それは次の二つの理由からである。

①自分の見付けた工夫とは異なった意見を持つ友達と情報交換することで、自分の考えを広められること。

②自分の見付けた工夫が、商店街の工夫として正しいかどうかを確認させること（このことで低見の子も自信がつく）

このバズ学習の中で、H男は、「新しいものを安くうるようにしている。」と発表したが、グループの子に、「それは、駅前の商店街だけでなく、近所の商店でも考えとったよ。」といわれ、それが、本時において適切でないことを理解した。また、O男は、見学において工夫を見付けることができなかったが友達の話聞いて、ノートに書くことができ、全体の場で発表することができた。そして、ほとんどの子は、自分の見学ノートを足場に気軽に意見が言え、自分が見付けられなかった工夫を書き加えることができた。

さらに、このバズ学習を通し、子供達が自由に話し合うことができたため、全体発表の場においても、普段あまり挙手をしない子も積極的に発表することができた。

3 研究の成果と問題点

・ 単元指導計画

単元指導計画中に、人間関係のめあてやゆさぶりの発問（第二課題）資料等位置付け、より詳しく、具体的な指導計画ができた。しかし、全学年、全単元に及んでいないので、今後引き続き取り組んでいきたい。

・ 学習過程

「つかむ」段階「さぐる」段階に重点をおいてきた。この段階の課題の選定や発問等少し具体的になってきたが、子供の実態や反応を考慮した課題や発問、また、まとめの段階についても考えていく必要がある。

・ 資料の収集と選択

ビデオ等視聴覚教材がたくさん準備できたこと。また、地域教材資料を作成できたこと。本年度使用した資料を蓄積すると共に、来年度に生かすように反省し、新たな資料づくりに励まなければならない。

・ バズ学習

どの時間にもバズ学習を位置付け、少しずつ仲間とのねりあげにより社会事象の意味を追求できるようになってきた。しかし、話し合いのさせ方、役割分担、リーダーの役割、といった方法面、どの段階でどんな形態がよいかなど。また、学力の定着を目指した「まとめ」の段階でのバズについても、今後研究していかなければならない。

音楽科 研究構想と事例

1. 研究構想

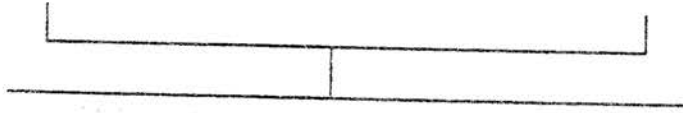
< 研究主題 >
 確かな足場をもって、ねりあげのできる子をめざして

確かな足場
 (個を育てる)

- ・自分で歌える。
- ・自分で演奏できる。
- ・レコードや友だちの表現を聴き感想が言える。
- ・自分のつまずきを知り、到達目標に向かって練習できる。

ねりあげ
 (集団を育てる)

- ・隣り同士で見合ったり、聴き合ったりできる。
- ・より美しい表現にするために、グループ内での各人の役割がわかり、仲良く練習できる。また、課題がわかり、色々な方法で練習できる。


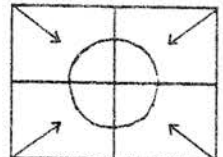
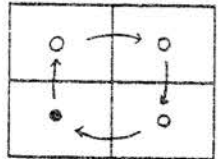



小集団学習を位置づけた学習指導のあり方

< 研究内容 >

- 単元指導計画 ----- 課題を明確にした単元指導計画の修正
- 学習過程 ----- つかむーさぐるーふかめる 学習の見通し
全体学習と小集団学習の位置づけ
- 感性づくり ----- 楽しいリズム、正しい音程、美しい響き合い
- バズ学習の展開 ----- 個が生きる場 (集団の中に埋没させない)
認め、励まし合う人間関係

バス学習の展開

過程	ねらい	バスの方法	取り入れ方・留意点
つかむ	<p>表現上のあこがれや問題点をつかませる。</p> <p>(認識バス)</p>		<p>それぞれの過程、課題に合わせて、効果的なバスの形を取り入れる。</p>
さぐ	<p>本時の目標に到達するため、自分たちのつまずきを明確にして練習させる。</p> <p>(探究バス)</p>	 <p style="text-align: center;">自由会話法</p>	<p>低学年では、主に隣り同士で見合う、聴き合う形を取り入れる。</p> <p>中・高学年では、4～10人位のグループの形をとる。</p>
まとめる	<p>本時の成果を味わわせると共に次時の課題をつかませる。</p> <p>(確認バス)</p>	 <p style="text-align: center;">輪番法</p>	<p>練習の方法や段階を明確にする。</p>
める		 <p>補助楽器</p> <p>リーダー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パート別練習 ・つまずき別練習 	<p>バスの形や練習方法は固定せず、多様化を図る</p>

本校は、昭和58・59年度に音楽の文部省指定校、昭和59・60・61年度には、土岐市地域課題研究推進指定校を受け、その間、音楽学習に焦点をあてて研究を進めてきた。特に、音楽授業充実のために、本校独自の年間指導計画を作成し、地域課題研究の時には、その第1次修正を行った。今回、更に第2次修正を行って授業を進めている。

音楽については、「楽しく、正しく、美しく」を合言葉に、音楽授業はもちろんのこと、朝の歌声の時間や山びこ集会（全校音楽集会）、オペラなどの音楽活動に全校体制で取り組んでいる。

バスに関わることでは、文部省指定校の頃から「心の響き」として、仲間とともに意欲的に課題を解決していく学習過程を大切にしてきた。今回、バス学習の研究をするにあたっては、今まで行ってきたことを更にきめ細かく見直しグループ練習の段階表を作ったりして、「学力と人間関係を同時に高める」ことを考え、実践してきた。以下、その研究事例を挙げる。

研究事例（1）

バス学習（認め励まし合う人間関係・個が生きる場）の事例

2年生 「がっしょうあそび」

教材 「ブン ブン ブン」

本時の目標 （7/8）

- 主旋律に、属音による擬音を重ねて合唱あそびができる。
- グループの中での自分の役割がわかり、協力して練習することができる。

活動の様子

ア 鍵盤ハーモニカのドリル練習

教師がオルガンで弾いた旋律を子どもが階名で歌い、次いで鍵盤ハーモニカで演奏する。これを繰り返して練習する。隣り同士で、一人が演奏している間もう一人は見ており、終わったら、正しくできたかどうかを手で合図する。（まちがえずできたら○、まちがえたら×の合図）その後、交替してやる。

C1 (真剣に演奏している。)

C2 (○の合図) よかったね。

C2. がんばって。

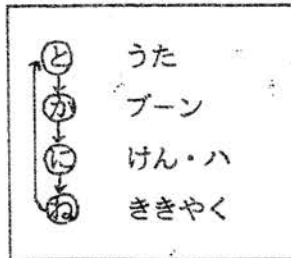
C1 うん。(ニコッと笑う)

C1 まちがえずに演奏し終わる。

T C1 君、今日○だった。よかったね。

イ 主旋律に擬音を重ねた合唱のグループ練習

グループの中で、おとうさん(と)、おかあさん(か)、おにいさん(に)、おねえさん(ね)、が決めてあり、その4人が主旋律、擬音、鍵盤ハーモニカ(属音の支え)、聴き役を順に交替しながら受けもって練習する。



< 成果 >

- ・全体の中では、一生懸命歌わない子も、グループ練習になると真剣に歌うようになった。(自分の役割を果たそうとする。)
- ・全体の中では感想等言わない子も、グループの聴き役になると、一生懸命考えて言うようになった。

研究事例 (2)

感性づくり (楽しく 正しく 美しく) の事例

4年生 「ふしのからみ合い」

教材 「夕焼け雲」 リコーダー演奏

(学習カードの利用)

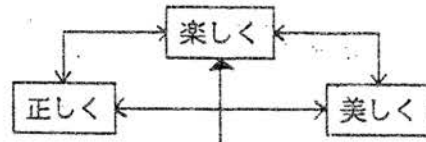
音楽科での感性づくりとしては「楽しく 正しく 美しく」を願っている。これは、相互にからみ合うものであるが、特に中学年の段階では「正しく」という部分に重点がおかれている。一体、「正しく」ということはどういうことなのか、それが「楽しく」「美しく」と、どうかかわっているのかが、学習していく過程にわかっていないと、自分自身、そして仲間と高まっていくということができない。そこで、それらを明確にした学習カードを個人とグループにもたせ、それを一つの手だてとして学習が進められるようにした。

(学習の流れ)

今日の課題に対して

- ① 全体学習
 - ② 個人学習
(まず自分でとりくんでみる)
 - ③ 自分が克服していくべきことを
カードに記入
(正しく 美しくの観点について)
 - ④ グループ練習
 - 1) 自分自身の克服すべき点をみんなの中へ出していく
 - 2) グループカードにみんなの問題点を記入
 - 3) グループの課題を明確にする
 - 4) 練習
- 自分たちの問題点 マーク
克服できたら マーク

(子どもの様子)



- | | | |
|------------------------------|-----------|------------------------------------|
| C 「ここの階名がわからな
いから教え
て」 | 教え合いにより | C 「なんとなく
音がそろっ
てないんじ
ゃない」 |
| C 「レ ラ ラ
だよ」 | より | C 「息が強すぎ
るんじゃないの」 |
| C 「わかった」 | で | C 「2人ずつで
ふいてみよ
う」 |
| C 「ここの指使
いどうやる
の」 | きる喜び | C 「そろってき
たね」 |
| C (指を使って
教えてあげ
る) | ・学習 | C 「〇さんいっ
しょにふい
てみて」 |
| C 「みんなでゆ
っくりやっ
てみよう」 | の中で | C 「みんな同じ
所をみつめ
てふいてみ
よう」 |
| C 「〇さん手拍
子して」 | 感ずる喜
び | C 「あった あ
った」 |
| C 「だいができ
たね」 | | |

< 成果 >

- ・正しく、美しくの観点を明確にしたことにより、克服していくこと、練習していくことが、グループ内でわかり合えるようになった。
- ・自分自分の課題を持ってグループ学習に入るため、各々が目的を持った学習としてとりくめるようになった。
- ・1つ1つできていく喜び、楽しさを、耳から目から感じさせられるようになり、教え合いにより友だちのやさしさを心で感じられるようになった。

研究事例 (3)

学習過程 (学習の見通し) の事例

6年生 「勇気一つを友にして」

グループの練習に入っても課題がはっきりせず、何をしたらいいのかわからなかったため、練習方法の段階表を作り、自分の今の段階をはっきりさせて、どんな練習をしていくと課題解決できるかを子どもたちに示した。

練習方法段階表

1. オルガンの音をたよりに副次的な旋律が歌える。
2. 主旋律に合わせて、副次的な旋律が歌える。
3. 無伴奏で、副次的な旋律が歌える。
4. 友だちと二人で二部合唱ができる。

グループ練習における子どもの様子 L:リーダー

L 今、自分はどこの部分までできているのか教えてください。

C1 -- 1で、オルガンの音があれば一人で歌える。

C2 -- 伴奏なしで、副次的な旋律が歌える。

C5

L 1の段階の人がいるので、グループ練習は、1から始めましょう。

※ 一人ずつ、みんなで1ができるまでやる。

L 1ができたので、次は2を練習しましょう。

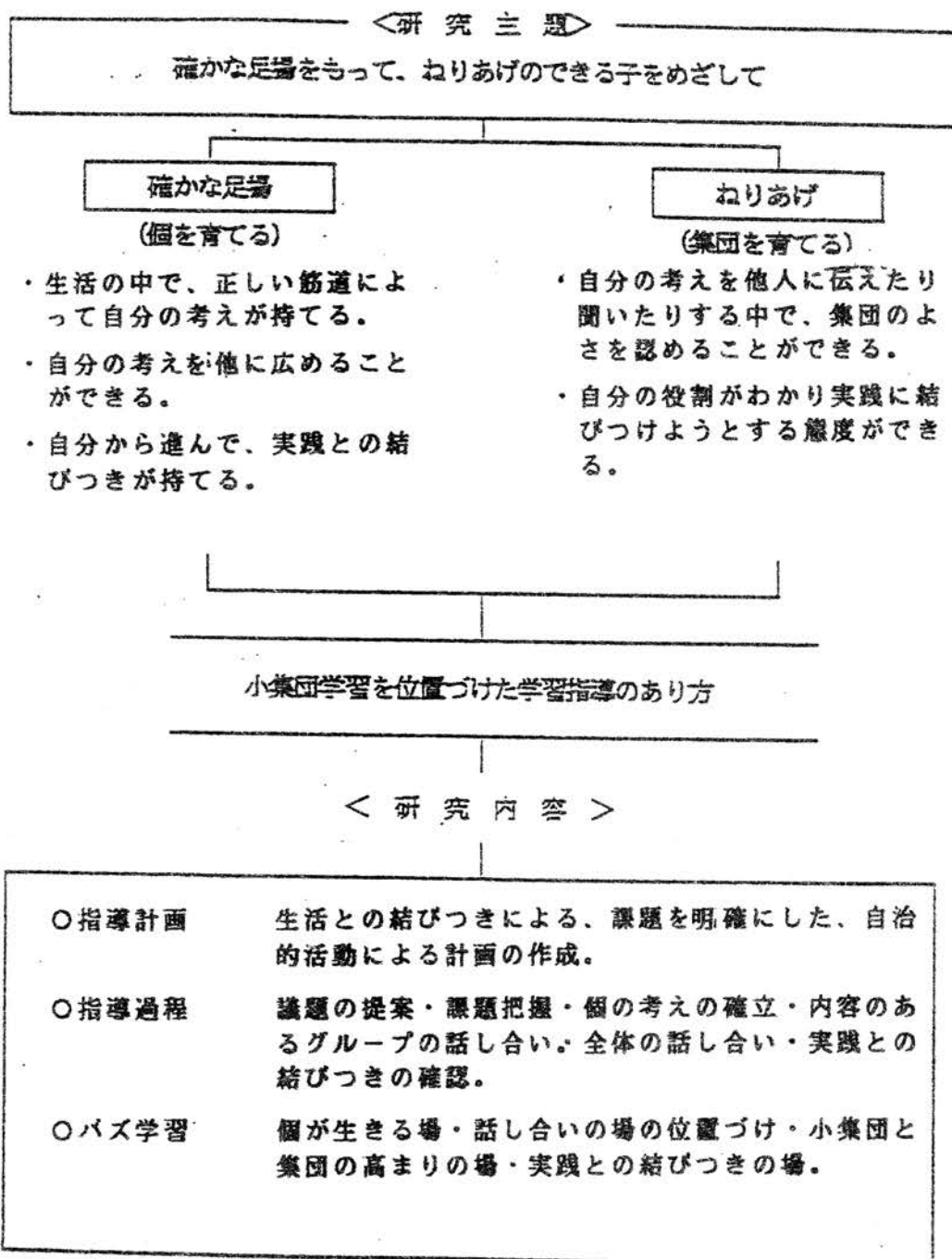
※ 2を同じように練習。2ができない時は、1へフィードバックする。1つ1つの段階で、そのことができたかどうかを話し合う。

< 成果 >

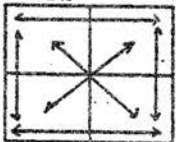
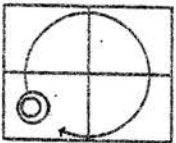
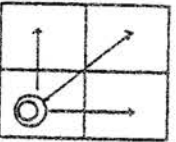
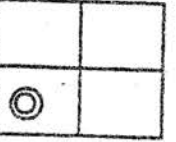
- ・本時の目標を達成するための段階表があるため、どんな練習をしたら目標に到達できるかがわかるようになった。(学習の見通しがもてる。)
- ・グループ内で教え合い、励まし合うために、意欲をもって参加できる子が増えてきた。

学級会活動 研究構想と事例

1. 研究構想



バス学習の展開

過程	ねらい	バスの方法	取り方・留意点
つかむ	<p>○提案議題によって、問題点を理解する場。 (認識バス)</p>	<p>○個人の考えの確立</p> 	<p>○その過程、課題に合わせて効果的なバスの形を取り入れていく。</p>
さぐる	<p>○課題を明確にして、個人の考えを伸ばす中で集団で解決する過程。 (探究バス)</p>	<p>対人法・・・ペアで話し合う</p>  <p>輪番法・・・順番に発言する</p>	<p>○グループやその場によっては効果的なバスの形を取れていく。</p>
まとめる	<p>○話しあいのまとめをし、個の考え方、集団意識をつけ、実践に結びつける過程。 (確認バス)</p>	 <p>指名法・・・リーダーの指名で発言する</p>	<p>○指定客にあったバスの形を取り入れていく。</p>
めぐる		 <p>自由会話法・・・自由に発言する</p>	<p>○低年では、主に対人法と輪番法を用いて、学年、高学年では輪番法、指名法、自由会話法を用いた効果的な話し合いを促していく。</p>

研究事例 (1)

1. 学級会の運営

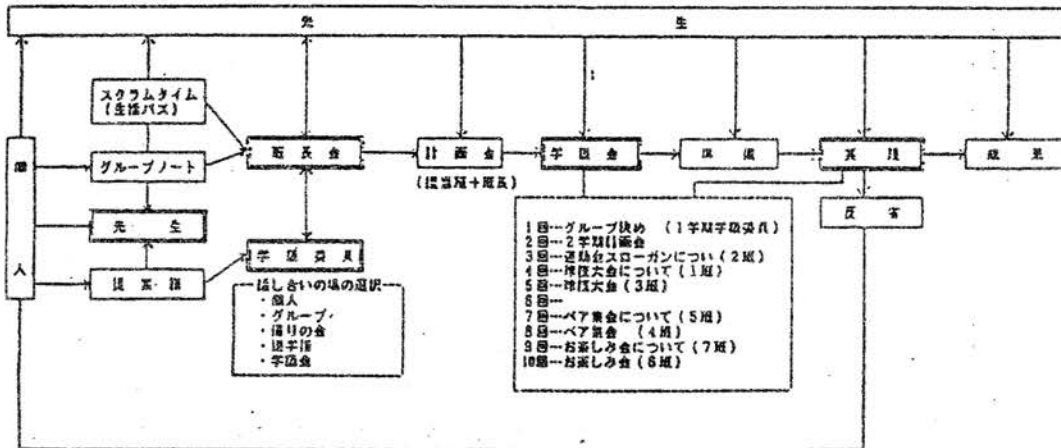
一人一人の願いを生かせる学級会活動をどのように運営していくか。

子供達にとって、学級とは意図的に組まれた生活集団であり、生活母体である。教師によって意図的に組まれた学級ではあるが、一人一人の子供達はその中で、自分を生かしたい、自分を高めたい、みんなと仲良くしたい、楽しい学級にしたいと願っているはずである。

そのような、子供達の願いを実現させ、子供達の心を育て、自治的实践力を高めるためには、学級会の存在はとても重要だと考える。

では、子供達一人一人の願いを生かすためには、どのように学級会を運営していったらよいか。これが私の研究課題である。

〈学級会運営図〉



上記の願いと運営図をもとに、「集会活動」を紹介する。

〈「みんなが楽しめる球技大会」についての実践を通して〉

5年 一人一人の願いを出させるために

① 2学期の第1回学級会で、「2学期の集会活動について計画をしよう。」という議題で話し合いをした。

その時、「1学期に体育で行なったバスケットボールが楽しかったし、みんなで少し協力できたので、今度は学級会として球技大会を取り上げて、もっと協力して全員が楽しめる球技大会にしたい。」という願いが子供から出された。その結果、10月に、球技大会を行なうことになった。

②学級会までの運営

○班長と今回の学級会司会グループで計画会を開く。

・1学期にバスケットをやった時のみんなの気持ちと問題点を知りたいと考え、アンケートをとることを決める。

○アンケートをとると、ほとんどの子は楽しかったと答えたが、5人の子が楽しくなかったと答えた。そこで、楽しかった原因と、楽しくなかった原因をみんなですべてまとめることにした。

○原案作り

・アンケートの結果、楽しかったことには、「協力できたこと、ドリブル、パス、シュートができたこと」と答えたことが多く、楽しくなかったことには、「ボールがまわってこない、2、3人でやっている。」と答えた子が多かった。

そこで、「グループで協力して、楽しい球技大会にしよう。」という目当てが、原案として決定した。

また、「楽しい球技大会にしたい。」という、みんなの願いをかなえるためには、学級会でどんなことを話し合ったらいいか考え、みんなが楽しむための5年3組だけに通用するルールを考えようという意見がまとまった。議題『みんなが楽しめる「5の3」ルールを考えよう。』

③学級会での意見

・みんなにパスが行くように、「グループの全員がパスをしてもらったら3点」というルールがいいと思います。このように全々パスをもらえない子のことを考えたルールが決定した。

④球技大会

・球技大会では、グループの一人一人が協力して、みんなにパスがまわるように声を掛け合ったり、なんとかパスをやろうとする姿が見られた。

・楽しくなかったと答えていた子が、生き生きとした顔で取り組んでいる姿が見られた。また、その子達をさらに励ましてやろうと表彰する司会グループの優しさも見られた。

⑤グループノートの反省より

・「本当に学級会で話し合っただけよかったな。1学期やった時より、パスももらえたと、シュートもうつことができ楽しい球技大会でした。」

実践を通しての反省

以上のように、学級会の場だけでなく、球技大会全体を通しての取り組みの中で、仲間と協力し合い、自分を高め合いながら活動し、一人一人の願いが実現され、学級として高まることができた。

研究事例 (2)

子供の学級生活に結びついた議題の選定の事例

・3年 学級文庫の本を入れ換えよう

・議題の設定理由

現在の学級の読書は、雨の日の読書や配膳読書などで、かなり利用度があるため、このごろ「学級文庫の本は、ほとんど読んだものばかりでつまらなくなった。」という声が聞かれるようになった。それ以前にも「本が少ないので、家からもってきていい。」などと子供の声が出て来ていたので、この自然発生的に出て来たものを大切に指導して来た。

そんな折、学級議題ポストに「学級文庫の本を入れ換えて欲しい。」という意見が出された。リーダー会で話し合った結果、今一番みんなが問題に思っていることで 早く解決したほうが良いということで全員一致で この議題に決定した。

議題が学級生活に結び付いていて、学級全員が問題意識をもっている^と自分の考えが出し易い。

グループバズでの例

- R 学級文庫の本について思っていることを言ってください
- C 殆ど読んでしまっていてつまらない。(賛成)
- C 幼稚な本があってつまらない。
- C 本が破れている。
- C みんなよく読んだから家の本ととりかえてくる。

全体バスでの例

司会 入れかえ方について話し合ってください。

- C 字の細かい厚い本をもって来ると良い。
- C つけたしですが、3年生らしい本がいい。
- C 理科の本が少ないので、虫とか植物の図鑑をもって来る。
- C 男の子、女の子にあう本をもって来る。

《成果》

- ・自分達の生活にかかわった共通の問題だったため多くの子が自分の意見を発表できた
- ・学級会后 図書係から学級文庫とりかえについてお願いをするなど、係活動の広がりが見られた。
- ・子供のもってきた本を見ると、学級会のねらいにあったものが多かった。

《考察》

この実践は、議題が学級に直結するもので、学級全員の共通の問題であったこと、子供の発達段階にあっていて解決方法が見だし易い問題であったこと、子供の自治的活動のできる範囲であったことなど話し合い活動にあっていたと言える。従って、学級会では、適切な議題のもとでこそ活発な話し合いが行われたり、よりよいきまりが作られたり、よりよい人間関係が深められたりという結果が得られるのであって議題の選定は、慎重に行わなければならないと考える。

— < 研究同人 > —

小島 幸彦	江木 洋治	有賀 光雄	長谷川 朔子	中島 瑤子
溝口 正子	田中 利枝	水野 知恵	宮嶋 昌治	岡本 康彦
加藤いづみ	三輪 敏成	土屋美由紀	新田 恵子	愛知 美吉
丹羽 岳人	杉浦 正佳	肥田 絹代	伊藤 策雄	小木曾 徹
鳥潟 弘美	山本 育代	西村 美香	丹羽 稲子	中島 康英
小川満寿子	大宮いづみ	伊藤由美子	松原 佳子	
*指導助言者…三重大大学教授 市川 千秋 先生				

63年度	加藤 昭	鈴木 孝司	木村 聖可	西条 成男
	青木 節子	鈴木由実子		

6. 研究のまとめ

以上、研究推進の内容と実践例を紹介してきたが、今までの成果とこれからの課題をまとめ、研究のまとめとする。

<成果>

○一人一人の存在感、活躍度、学習場面が増え、生き生きとした児童の姿がたくさん見られるようになってきた。

ニコニコして学習に参加している	グループバズが楽しい、よく分かる
尋ねたり教えたりする姿がよく見られる	多様な考え方と発言が出てくる
発言回数が増え、授業に勢いが出ている	理解度、技能度が高い
休み時間に学級で遊んでいる	欠席者などへの思いやりが見られる

○学習の成果が、表に出てきた。

- ・過去2年、学力テストを実施したが、確実に学力は向上しており、全国平均を上回っている。
- ・合唱コンクールにおける受賞
NHK合唱コンクール（岐阜県）では、今年度も含め7年連続受賞している。
- ・土岐市小学生 水泳、陸上記録会での成果
標準記録を突破して、出場できる児童が年々増えてきている。60%強の割合である。また、市町村主催のロードレースなどにも参加し、優秀な成績をおさめている。
- ・科学作品展、発明工夫展、読書感想文、市の文化展などに出品する作品のできばえが良くなってきている。
- ・市民音楽祭やはなの木苑祭（岐阜県厚生事業団主催の祭）への参加、オペラに恵風荘（老人福祉センター）の方々を招待する、など心を広げることができるようになってきた。
- ・学校行事における集団行動がきびきびしてきた。行進や集合整列、話の聞き方など。非難訓練の時などにもそれがよく表れている。
- ・教師側として、各種調査を謙虚な姿勢で受け止め、指導に生かしている。授業に対しても、精一杯の努力を忘れず、児童の指導にあたっている。また、年に一度の職員旅行への参加率が100%であることは、教師側の人間関係の高まりを表している。
- ・社会科、音楽科、学級会だけでなく、いろいろな場面でバズが活用されている。

<今後の課題>

- ・実態把握の効果的な利用。（次の指導にどう生かすか、効果的な事後指導の在り方）
- ・小集団学習が効果をもたらす場面の明確化。（どんな場面で位置づけると効果が出るか）

目次

	ページ
1 研究主題設定の理由	2
(1) 学校教育目標から	
(2) 本校の研究のあゆみから	
(3) 生徒の実態から	
2 願う生徒の姿	5
3 研究の仮説と研究内容	6
(1) 4つの仮説	
(2) 今年度の重点として、めざしている生徒の姿	
(3) 今年度重点とする研究の内容	
(4) 7つのバズ	
4 生バズ	12
5 道徳指導の重点	16
6 研究構想図	18
7 各教科の実践	
国語科	20
社会科	24
数学科	28
理科	32
音楽科	36
美術科	40
技術・家庭科	44
体育科	48
英語科	52
特殊教育	56
8 成果と課題	60

共存の喜びを持たせる集団づくり

—互いに高まり合う学習集団づくり—

1. 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標を達成するために

本校の教育目標である「実力のある、民主的実践人の育成」は一人一人の生徒に、たくましい心身と確かな学力をつけ、豊かな人間性を身につけることを目標としている。

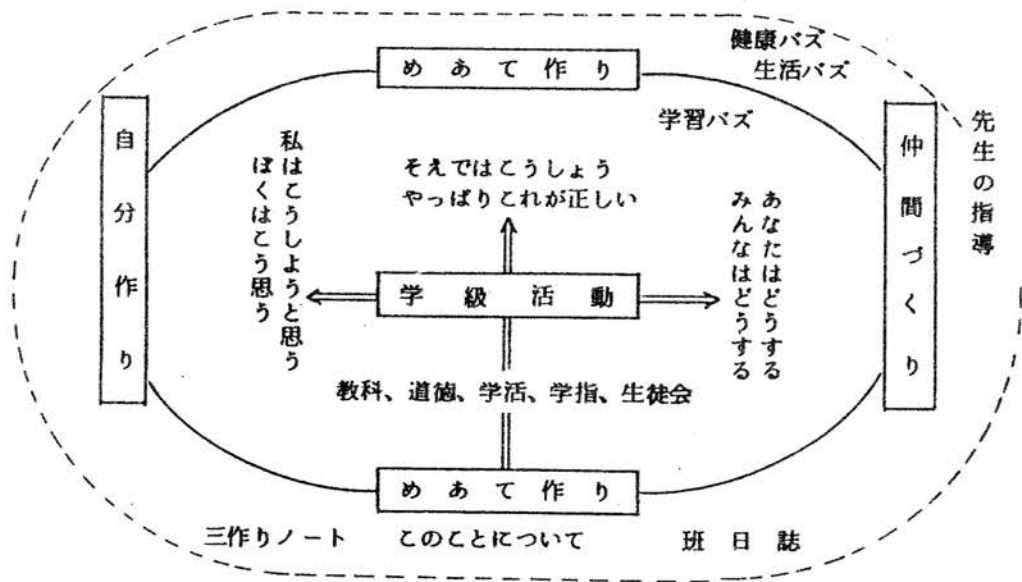
実 力 の あ る	民 主 的 実 践 人	の 育 成
豊 かな 心 たくましい心身 確 かな 学 力	を 身 に つ け る こ と を	協 同 の 目 標 と し て (めあてづくり) 自 分 を 生 か し な が ら (自 分 づ くり) み ん な と 助 け 合 っ て (仲 間 づ くり)
自 分 を 伸 ば し、よ い グ ル ー プ ・ よ い 学 級 よ い 学 校 ・ よ い 社 会 を つ く る。		

本校では、これを「三作り」として

- ① よりよい生き方を作り出していくことについて (めあてづくり)
- ② 自分としての考えを持ち (自分づくり)
- ③ みんなの意見を聞いて高めていく (仲間づくり)

ことを学校生活の場ですすめていくこととし、個を伸ばす集団づくりの基本的な考え方としている。

本年度の研究においては、この「三作り」の立場をもとに、仲間とのかかわりの中で主体的に学習する生徒の姿を求め、個の力を伸ばしていく学習集団はどうあるべきか、また、個を伸ばしていく学習集団をどう育てていくのかを探ろうとするものである。



(2) 本校の研究の歩みから

本校のこれまでの研究の源流をたどってみると、昭和54～55年度にかけて

三作りの中の教科指導 —知的興奮のある授業をめざして—

という主題のもとで

- ・本時の知的興奮の場を、どこに設定するのか。
- ・そのために、どのような発問をしたらよいのか。
- ・どの様な資料を提示するのか。

などを通して研究が進められてきた。56～58年度にかけては主題を

授業における認知的目標と態度的目標の同時達成

- とし、
- ・生徒が生き生きと取り組む学習課題のあり方。
 - ・課題追究課程における個と集団のあり方。

・授業に生かす生徒づかみ。

という観点で研究が行われた。59～60年度にかけては

教科の中で自己充実感を持たせる授業づくり

の主題を

・自己評価活動を通して

研究が進められ、市の地域課題の指定を受けて研究発表会をもった。61～6

2年度は、研究主題を引き継ぎながらも 副主題を

・めあてを持って問い続ける姿をもとめて。

・ひとりひとりの課題を確かにする授業の創造。

として、○いかにめあて（課題）を持たせて、学習に取り組ませるか。

○一人ひとりの追究力を高め、学習効化をあげるにはどうするか。

○学習する自分たちを見つめる学習指導をどのようにするか。

といった課題を研究してきた。

そして、63～平成元年の主題を

共存の喜びを持たせる集団づくり

とし、後に述べる課題を研究しながら今日に至っている。

(3) 生徒の様子から

2～3年前にかけて、残念なことであったが、本校生徒の落ち着きのない言動が目立った。生徒の生活の乱れや、授業における学習姿勢にも問題が出始め、生徒指導上の問題をいくつかかかえるようになった。教師は、その対応に懸命であったが、生徒は、仲間の良くない行動を見かけても注意をする者はほとんどいなかった。問題を持たない一般の生徒の間でも、自分中心的な言動が気になり、共に高まろうとする姿勢にかけていた。生徒同志の人間関係が希薄で、つながりが弱いことを私たちは問題とし、つぎのような実態を課題とした。

- ① 係・日直等の活動は、自分さえよければ、自分の分担さえやればよいという安易な考えをしがちで、仲間と積極的に活動を創り上げたり、仲間と共に高まろうとする姿勢に欠ける。

- ② 教室環境が乱雑になりがちで、清掃活動等を通してお互いの学習環境を守ろうとする意識に欠ける。
- ③ 次時学習準備・発言等、仲間と学ぶ上での学習の約束が守られない。
- ④ 教科の中で、自ら学んでいきたい・わかりたいという意欲に欠け、受け身的である。

2. 願う生徒の姿

生徒たちが学校生活の中で“共に存する”ということは、お互いに知り合い、認め合い、励まし合いながら、一人一人の個性を尊重し伸ばしていくことである。教師と生徒、生徒と生徒の人間関係を基盤とし、学習や生活の面で高まり合っていくことである。

本校生徒の中には、学習になかなか適応できなかつたり、当番等の係活動や掃除等をやらなかつたりして、集団生活の中で自分の果たすべき責任や努力をしようとしなない生徒がいる。さらには、仲間の良くない行動に妥協してしまつたり、同調してしまつたりする生徒さえいる。

私たちは、そのような生徒に対して、生活指導面や学習指導面について、教育相談的見地から個別指導にあたり、学校生活になんとか適応させようと努力をする。それは生徒を指導するにあたり、教師の願いを伝え、生徒が実行してくれることを信じて行うわけであり、実際、有効な手段と成り得る場合もいくつか経験してきている。

しかし、一人一人の生徒に細かく目の届いた指導を行う、あるいは一人一人の学ぶ力や生きていく力を育てるということは、生徒たちを一人一人バラバラに切り離して指導することだけでは不十分であると思う。それは、生活指導上の問題を持った生徒に限ったことではない。一人一人の生徒を社会的、集団的な存在としてとらえ、その中で、生徒の人格や個性を認め生かしていく教師の指導、配慮がなければならない。それは、生徒一人一人の人格や個性が認められ、生かされていく学級集団が育てられていくことであると思う。集団作りは、そういう「個」と「集団」のかかわりを大切に、一人一人を鍛え生かすことにより集団が高まり、集団にてこ入れすることにより、一人一人が高まるものとなる取り組みであるといえるのではないかと思う。「個」と「集団」のかかわりの中で、一人一人を生かし仲間に認められたり、仲間へはたらきかけていく生徒の姿をめざすことが、研究主題「共存の喜びを持たせる集団づくり」の願いである。

どんなに意欲的なリーダーも、どんなに活発な係も、生徒同志の冷ややかな人間関係の中では十分に活動することができない。呼びかければ応えてくれる。自分のがんばりを仲間が支え認めてくれるという関係は、人間的なあたたかさや一人一人が学校が楽しいと感じ合えるところに生れる。「この仲間と勉強できてよかった」「この仲間のおかげで高まることができた」という仲間と共に何かやり遂げる喜び、仲間と触れ合う喜びを持たせたいと思う。

そのような共存の喜びは、うすっぺらな生徒同志のつながりの中や、自分本位で打算的な人間関係の中からでは生まれてこない。教室で物事に無関心でいる生徒やなげやりな生徒には、仲間と活動することの喜び、仲間認められることの喜びに気づいていけるような活動を仕組んでいかなければならない。また他の生徒をいじめたり、すぐかっとなったりする生徒には、相手の気持ちや立場を思いやる指導をしていかなければならない。そしてどの生徒にも、毎日の生活が自分の努力と仲間の力によって支えられているという感情を持たせていきたいと考える。

以上のような立場で、次のような生徒像を期待し、めざしている。

- | |
|--|
| <p>ア. 仲間の活動に目をとめ、仲間のがんばりやよさに目を向けていける生徒</p> <p>イ. 思いやりの気持ちを持って、仲間と活動し協力できる生徒</p> <p>ウ. 仲間とのかかわりの中でめあてを持ち、意見を出し合い、高まり合っ
て行ける生徒</p> |
|--|

3. 研究の仮説と研究内容

研究主題を追及するにあたり、次の4つの仮説を設け、研究を進めていく。

(1) 4つの仮説

①グループ活動を核にした学級活動を位置付けることにより、共存の感情は育つ。

・学級活動、整備・生産活動、係活動等を「学級の宝づくり」として強化・実践し、その指導及び活動について、個を生かし育てる小集団の活用を研究・交流する。

・教師が、指導の重点、内容及び活動を通して育てたい生徒の姿を明

らかにし、生徒に活動のねらいと見通しを持たせるため、「月ごとの活動表」を作成する。

- ②生活環境・学習環境を整備することにより、共存の感情は育つ。
- ・清掃活動の細案作りと、実際の活動、指導の徹底を研究・交流する
 - ・生活環境を整え、学習環境としての掲示物のあり方や動きのある学級掲示を工夫し、学級の係活動として位置づけていく。
 - ・日直活動などの係活動の内容を吟味し、普段の生活や仲間へのはたらきかけ等について、主体的な活動ができるよう指導する。
- ③係活動や学習の約束を作り出し、実行していくことにより、共存の感情はそだつ。
- ・一分前着席・聞く姿勢・発表のしかた等の指導の徹底のために、どんな手をうったらよいかを研究する。
 - ・教科系の役割と活動の場をはっきりさせ、自分たちで学習していくという意識をより高めていく。
 - ・教科の中で育てたい態度は何なのかはっきりさせ、その指導を研究する。
 - ・教科における生徒指導面として、どんなことを大切にしていくか明らかにし、その指導を研究していく。
- ④バズ学習を位置付けることにより、共に学ぶ意識は高まる。
- ・「教科ごとのバズの一覧表」を作成し、単位時間の中に学び合いを生み出し、学習効率を高めるバズを位置付ける。
 - ・話し合わせる課題や方法をはっきりさせ、バズの後の活動も明らかにしてバズを仕組む。
 - ・バズの強化月間を設け、バズの方法・課題の取り組み方・司会のすすめ方・あるいは生バズ等について、学年や全校で重点的に取り組む。特に生バズについては、生徒を参加させた研究会（研バズ）を位置付ける。

63年度の研究においては、研究主題「共存の喜びを持たせる集団づくり」

互いにひびき合う学級集団づくり」として、班活動を中心にした学級づくりに焦点をあて研究してきた。その中で、

- ① 班や学級の仲間にはたらきかけて、仲間の努力を認めたり、仲間を励ましていく姿がいくつも見られ、仲間と個のかかわりをとらえて学級づくりを進めていくことができたこと。
 - ② 生バズにおける班のバズのあり方や、清掃における個の役割・班の活動について検討が加えられ、班を単位とした活動が活発化してきたこと。
- 等、一応の成果をみた。いわば、生バズ・清掃・学指学活等教科の授業周辺の領域における学級づくりを通して、学習効果をあげることをねらってきたともいえる。

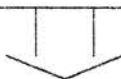
本年度は、教科学習における学級づくり、すなわち学習集団づくりとして、その成果をよりあげていきたいと考え、実践を重ねてきている。学指・学活あるいは道徳等においても学級づくりは進められなければならないが、学校生活の大部分をしめる教科の学習の中でこそ、個と集団のかかわり合いのチャンスを広く持つことができ、仲間と共に高まっていくことがより意図的に行えると考えるからである。

(2) 今年度の重点として、めざしている生徒の姿

毎日の授業の中で、個々の生徒が自分の考えを立てて、班や学級へお互いにその考え方を出し合い、練りあいをする場を確保することにより、「勉強してよかった」「わからなかったことが仲間と勉強してわかるようになった」「仲間に教えてあげることができた」という充実感、つまり、学習における共存の喜びを持たせることが、本年度研究主題の願いである。

研究主題

共存の喜びを持たせる集団づくり
-互いに高まり合う学習集団づくり-



願う生徒の姿

仲間との学習活動の中で、めあてを持ち、意見を出し合い、新たな見方・考え方や技能を身につけ、仲間とともに高まり合って行ける生徒。

(3) 今年度重点とする研究の内容

本年度の研究は、学習集団づくりとして教科の指導を中心にしてきているが、それを支える基盤としての学級づくりや、生徒の指導の側面も大切にしていきたいと考える。教科で求める力をつけるために、

ア. 教科学習では

- ① 学び合いの弱さを明らかにし、願う学び合いの姿を具体的にする。

各教科でみられる生徒の実態に立って、集団としての学習活動における学び合いの問題をとらえ、願う学び合いの姿とはどのような姿なのか明らかにする。また、願う学び合いの姿に迫るためにどのような手だてをうっていくのか研究する。

- ② 教科の基礎・基本やつけたい力をとらえ、学び合いの観点を加えた単元構想図を作成する。

単元や領域でねらう力を明らかにし、仲間と個のかかわりですすめる学習を位置付ける。そしてそこで出てくる学び合いの弱さを、仲間の支えや援助の中で克服していくような指導計画を考えていく。

- ③ バズ学習を、学び合いの姿を生み出す手だての一つとして位置付ける。

各教科において、学び合う姿としてのバズ学習のとらえを明らかにし、教科ごとの「バズの種類の一覧表」にまとめる。授業においては、バズを行うに当たっての課題を明確にし、バズの中でどのような活動をさせるのか生徒に具体的に提示していく。

イ. 学級づくりでは

- ① 学級の仲間とかかわり合う力を育てる場として「生バズ」をとらえ指導していく。

- ② 学級の仲間とかかわり合う力を育てる学指・学活、道徳の指導をすすめる。

(4) 7つのバズ

各教科においてバズのとらえを明らかにする際、次の「7つのバズ」を行動目標として設定し、それにもとづいて各教科の特質に照らしながらまとめていくことにした。実際の実践では、「授業は、生徒が学習する」という立場に立ち、生徒の自己活動、自己教育を促すよう、一人一人を生かし育てるものとなるバズを生み出そうと、研究、実践を繰り返している。(実践例については、P 20からの各教科の実践欄を参照)

- 教え合う —— 相手のわからないことを教える。わからない点が遠慮なくたずねることができる。
- 見つけ合う —— 課題にもとづいて問題を見つける。お互いに補うことができる。
- 確かめ合う —— 個々の学習課題を確かめたり、問題、ワーク等の答え合わせをしたりする。
- 深め合う —— 課題について各自の考えを交流することにより深める。
- 練習し合う —— 覚えること、慣れること等、練習を必要とする学習について、お互いに確認しながら練習する。
- 作り合う —— 技術、家庭、あるいはその他の教科で、制作、表現を必要とする場面で、協力して活動したり、助言できる。
- 発表し合う —— 自分の考えをまとめたものや感想、あるいは練習の成果等を仲間に聞いてもらい、助言を受ける。

次に、英語科のバズの例をあげる。

教材内バズの種類 (英語)

授業の流れ	バズの種類	バズのねらい	バズの方法	留意点
1 予課発表	教授書の音読の発表	イムプレッション、ストリス、ボク算に意を付く音韻的 文型や内容と理解しながら対話形式の発表を 自分の表現文と理の仲間を紹介する	輪番法 一人ひとりの 発表が全員 で確認され いく。	発表に力を入れて、観点を与えながら 寸評を加えてやる
2 導入	対話文、暗唱文の発表	自分の表現文と理の仲間を紹介する	テスト法 質問カード が用意され いく。	班内で解決できなから、たんに ついでに全体をきかす。
3 導入	自己表現文の発表	班内の内容を復習し、確かめる	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
4 導入	「セクシゴ」の学習の確認	類題の作り出し、確認	対人法 ペアと組 んで練習 する	ペア練習やグループ練習が班内 で行われるよう、学習プリント基 み互いの練習とチェックしていく
5 導入	「アドブランクティス」の書き取り	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	リーグ法	生徒だけで表現できなさい点に ついでに、教師側から積極的 に助言してやる。
6 導入	予課、持ち物の確認	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法	学習の発表の場であり、自己評 価活動させながら、班で発表 し合うようにしたい。
7 練習	Oral Introductionの確認	類題の作り出し、確認	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
8 練習	Situationの確認	類題の作り出し、確認	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
9 練習	文型、文法事項の確認	類題の作り出し、確認	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
10 表現	新文型の口頭練習	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
11 表現	文型の交換練習	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
12 表現	教科書の音読練習	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
13 表現	対話文のペア練習	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
14 表現	新出単語の練習	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
15 表現	表現文作りの補助	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
16 表現	表現文のねり合い	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
17 表現	音読、対話のアドバイス	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
18 発表	自己表現文の発表	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
19 発表	音読の発表	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
20 発表	対話文の発表	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。
21 発表	要点まとめの発表	既習を用いて新文型が書けるよう練習する	自由発表法 ゆがゆが 発表自由 にたがひ ある。	B-Aの者五ろにフイでは、日本が short answerも班の中を動か していく。

④ 生バズ

生バズは、「生活・健康バズ」のことである。生徒が一日の学校生活を振り返り、自己を見つめ、また仲間とかかわり合うことを積極的に生み出していく場である。自己を見つめ、仲間とかかわり合うことにより、共存の感情を育て仲間と共に伸びようとする意識を高めていきたいと考えた。

生徒が自分たちの生活に目を向け、仲間への暖かい励ましや、厳しさのある注意をし合えるようなバズを生み出すために、

- (1) 自分自身の生活を見つめる場（黙考）を持つ。
- (2) 仲間と共に生活していることを意識させ、自己と仲間とのかかわりに目を向けていくようなバズのテーマを設定していく。
- (3) 生活の中の具体的な事実で、お互いの行動について追求できるようにする。
- (4) 仲間のよさを認め合い、仲間のよさを通して、自己の新しい目標を持たせる。
- (5) 積極的な係活動を通して、仲間にはたらきかける力を養う。
- (6) 学級や班内の役割分担をはっきりさせ、学級や班を見つめる視点とする。

こと等を意図して取り組んでいる。



生バズが共存の感情を育てる場となるよう、各学年、各クラスの実態を考慮しながら、よりよい生バズの内容と流れを、現在も摸索し続けているが、次のような内容とねらいを取り上げている。

- | | |
|---------|---|
| 1 黙考・黙書 | 一日を振り返って、個々に反省する場。 |
| 2 バズ | 個の反省にもとづき、班で交流、討議、はたらきかけを行う場。 |
| 3 部長の話 | 個々の係から学級や班の姿をとらえ、仲間を認めたり励ましたりしながら、より高い姿を自分たちの力でめざしていく場。 |
| 係からの連絡 | |
| 教科係の話 | |
| 日直の話 | |
| 委員長の話 | |
| 4 先生の話 | 生徒の活動に目を向け、認め励ましていく。担任の願いや学級経営の方向を与える。 |

学年に応じためざしたいバズの姿

	バズで願う生徒の姿	リーダーのはたらきかけ	仲間の反応
1年	<ul style="list-style-type: none"> ・気楽に班の仲間に語りかけができる ・明るく素直に班の仲間と話ができる ・わからなないことがわからなないと言える ・自分の考えを待ってバズに参加しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ○何と話すかのほっさりさせる ・「～のこのことについて話し合いましょう」 ・「わからなないところを話し合ってみよう」 ・「もうほかにはありませんか」 ・「～さんの意見について あなたはどう思いますか」 	<ul style="list-style-type: none"> ○班の全員が気楽に話せる ・「～だと思っけど、どうですか」 ・「～と思います、理由は…だからです」 ・「私も～君と同じで…と思います」 ・「ここまでではわかるけど、ここからがわからなないね」 ・「～さんの…がわからなないな、もう一度言ってく下さい」
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を的確にとらえ、問題にしていく ・意見のちがいに気づき、問題にしていく ・自分の意見を仲間の意見と比べながらバズに参加しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ○班内の発言を整理しながら、意見のちがいを明確にする ・まとめると2つの意見にわがれきました、もう少し考えてみましょう ・あなたの立場はどちらですか、理由をつけて説明してください 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを仲間の考えと対比して話せる ・「～さんは…と言っただけ、私は～と思います」 ・「～さんは…と言っただけ、どうしてそういえるのですか」 ・「ぼくはここが～君とちがうけど、どうですか」 ・「ぼくはここが問題だと思っますがどうですか」
3年	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な見方、考え方ができる ・相手の立場に応じた話ができる ・効果的なバズを追究できる ・さらにより考えはみないかと追究しようとする ・自分たちでバズポイントが作れる 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な考えを出させ、仲間の立場に応じた話をはたらきかけができる ・他にいろいろな考え、見方はありませんか ・このことをもう一度考えてください ・もっとよい考えはありませんか 	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の立場になり、説得力のあるバズができる ・相手にあいづちをうたり、問い返したりなど、反応しながら聞く ・相手の立場に立って話ができる

学級活動 年間の見通し

	4	5	6	7	8	9
学期の重点	グループの活動を核にした学級活動を重点とし、グループの所属感を高め、共存の感情を育てる。				クラスの活動を核にした、行事存の感情を育てる。	
指導の重点	新しい学年、学級で仲間とともに成長していこうとするやる気を引き出し、集団生活における基本的な生活習慣の確立を図る。		グループの活動を活発にさせ、グループ活動の質を高める。		一学期の活動を振り返り、グループやクラスの成果・課題をみつめる。	計画に従い、規律ある生活の中で、自律心を育てる。 生活のリズムをとりもどさせ、体育祭の取り組みから学級意識を高める。
核となる行事	学級びらき 組織作り	遠足	修学旅行(三年)	クラスマッチ	期末テスト 中体連大会 キャンプ(二年)	体育祭
やりきる活動 	一分前着席 清掃 日直	環境美化	バス学習	部活参加	夏の課題 力作	一分前着席 清掃 日直
つくりだす活動 	係活動	学級目標づくり 学級旗(学級歌)づくり 学級活動の計画	クラスマッチの 取り組み	夏休みの計画		2学期の目標
支え合う活動	学級びらき 学級組織作り グループ決め	修学旅行(3年) 自然の家(1年) 学習への励まし	バス強化 月間 ・わからないところを教え合い、励まし合う学習 ・期末テストへの取り組み	キャンプ合宿2年 1学期のまとめ		2学期学級活動の計画 体育祭の取り組み

10	11	12	1	2	3
や学級活動を通して、クラスへの所属感を高め、共			個やグループ、クラスの高まりを認め、そのよさを学び合い、共存の感情を育てる。		
新しい係で、クラスの問題を明らかにし、より活発な係活動をさせる。	文化祭の取り組みを柱とし、学級の団結力をよき高めていく。	二学期の活動を振り返り、グループやクラスの成果や課題をみつめる。	マラソン大会の取り組みを通して、学級の団結力をより高める。	日常活動を見直し、班や係の活動を活発にする。	よさを認め励まし合う中で、一年間の成果と課題意識をもたせる
組織改選 自然の家(一年)	文化祭	期末テスト	カルタ会 マラソン大会	三年を送る会	学級解散式
係活動 文化祭の取り組み 後期学級組織作り グループ決め 学習への励まし	バス学習 学習の充実期 バス強化月間 ・わからないところを教え合い励まし合う学習 ・期末テストへの取り組み	清掃 冬休みの計画 2学期のまとめ グループ	冬の課題 冬トレ参加 新年の抱負 3学期学級活動の計画 冬トレ・マラソン大会への励まし	グループ活動 送る会の取り組み ・期末テストへの取り組み	係や班、クラスで成果と課題を見つめる 学級のまとめ(文集・お別れ会) 3学期のまとめ

④ 思いやりを持ち、相手の立場にたつて物事を考える心を養う。

学年	学年のねらい	期待する生徒の姿		
		ステップ1	ステップ2	ステップ3
1	人の意見をよく聞き、相手を理解する心を養う。	いろいろな立場があることが分かる。	いろいろな立場にたつて物事を考える気持ちがある。	相手の立場を思いやり、行動しようとする気持ちがある。
2	相手に気持ちを理解し、信頼し自他の充実と向上を図るよう努める。	他人の言葉に耳を傾け、反省し、向上しようとする気持ちがある。	自分と異なる考え方を理解し、相手の立場を察しようとする気持ちがある。	相手の立場にたつた考え方ができ、思いやりのある言葉を、心がける気持ちがある。
3	人間の持つ弱さやみにくさに気づき、それを克服し自分を厳しく見つめ、常に相手の立場を考え、行動することを大切にすることを養う。	自分の考えにこだわらず、他人の言葉に耳を傾けようとする謙虚な気持ちがある。	人によってさまざまな見方や考え方があることを理解し、自分の向上に役立てる気持ちがある。	相手の失敗やあやまちを非難することなく、仲間を認め、ともに努力することの大切さが分かる。

⑤ 個性を失うことなく利己心や狭い仲間意識を克服し、協力し合つて集団生活の向上に努める心を養う。

学年	学年のねらい	期待する生徒の姿		
		ステップ1	ステップ2	ステップ3
1	集団の中の自己の立場を理解し仲間意識を高める心を養う。	集団のきまりを理解し、それを守ろうとする気持ちがある。	集団の成員としての役割と責任を果たそうとする気持ちがある。	自分の所属する集団だけでなく全体の向上に努める気持ちがある。
2	自己の属するさまざまな集団の意識を理解し、利己心をすてて集団生活の向上に努める心を養う。	集団の目標を理解し、集団生活に参加しようとする気持ちがある。	利己心を押さえ、集団の中での自己の役割を果たそうとする気持ちがある。	広い視野から進んで集団生活の向上に貢献しようとする気持ちがある。
3	さまざまな集団の中で自己を失うことなく、集団の一員としての役割を果たしともに向上しようとする心を養う。	利己心を克服し、集団の一員としての役割を果たそうとする気持ちがある。	集団の意識を理解し、自分自身を含めた集団の向上に努める気持ちがある。	狭い仲間意識を克服し、広い視野に立ち集団生活の向上に努めようとする気持ちがある。

6 平成元年度 研究構想

学校教育目標

実力のある民主的な実践人の育成

確かな学力を身につける生徒づくり

豊かな人間性を身につける生徒づくり

たくましい心身を身につける生徒づくり

研究主題

共存の喜びを持たせる集団づくり

*** 互いに高め合う学習集団づくり ***

願う生徒像

○仲間とのかかわりの中で、めあてを持ち、意見を出し合い、高め合い合っている生徒

○仲間の活動に目をとめ、励ましや厳しい注意をしながら、仲間と共に高まっている生徒

○仲間との活動を通して、自分を見つめ、自分の力で考え、判断している生徒

研究内容
研究仮説

①グループ活動を核とした学級活動を位置づけることにより、共存の感情は育つ。

②生活環境・学習環境を整備することにより、共存の感情は育つ。

③係活動や学習の約束をつくり出し、実行していくことにより、共存の感情は育つ。

④バズ学習を位置づけることにより、共に学ぶ意識は高まる。

研究の場
研究の観点

教科研 --- 学び合う力をどう育てるか

①教科における学び合いの姿を明らかにする。

②学び合いの観点を加えた単元構想図を作成する。

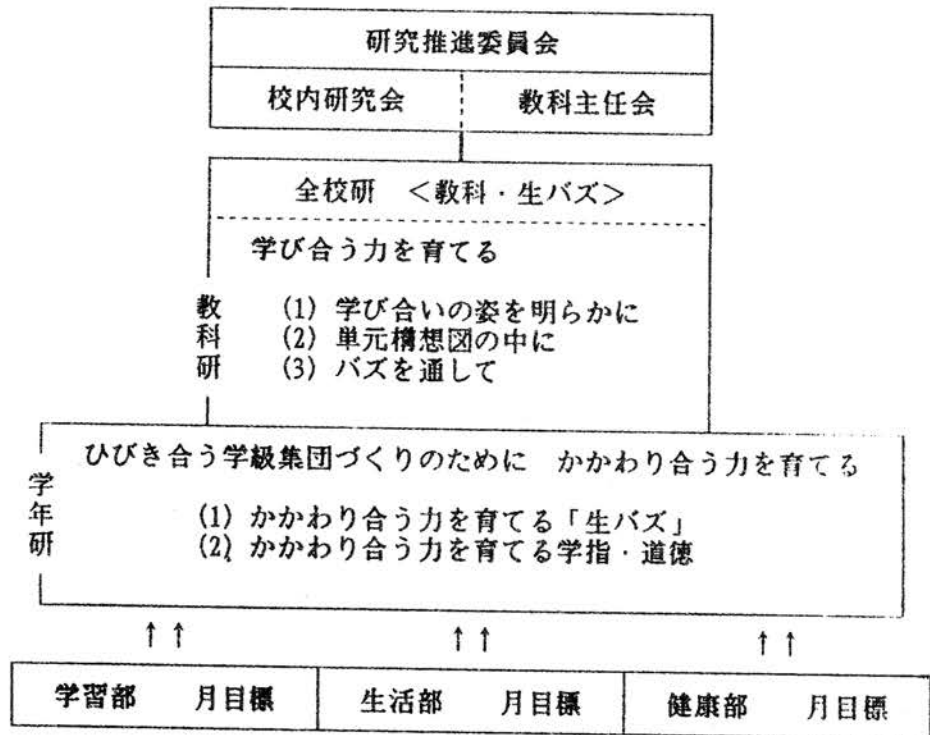
③教科内のバズを位置づける。

学年研 --- かかわり合う力をどう育てるか

・共存の感情を育てる「生バズ」

・ひびき合う集団づくりのための学指・道徳

研究の組織



全校研の持ち方

- 教科の授業発表…………… 教科研、(学年研)の発表
- (学年の生バズ公開…………… 学年研の発表
- 各教科年少なくとも1回教科研を持つ。
- 「学年研」では、「月ごとの活動計画表」をもとに、月の指導重点を確かめ合い、小委員会の提案や資料を土台に、指導内容、方法を研究し、生徒の活動の活性化を図る。

一人一人が自分の世界をひろげる

読みの指導

① 国語科における共存の喜び

- ・互いに意見や考えを交流し合う中で、仲間と共に新しい読みの世界に入ることのできる喜び（相互追求の喜び）
- ・互いに教え合う中で仲間と共に自分の足りない点を補うことのできる喜び（相互補強の喜び）
- ・互いにアドバイスし合う中で、仲間と共に音読（朗読）などの上達が評価できる喜び（相互助言による上達の喜び）

② 国語科でとらえた学び合いの姿と、願う学び合いの姿

① 学び合いの姿

- ・ひとりの意見で終わってしまうことが多く、あとにつながるものが少ない。
- ・自分の考えをもって主張できない。
- ・学力の高い生徒の意見に支配されやすい。
- ・集団学習のもつ意味が十分理解されていない。
- ・挙手して意見を言わなくても理解できればよいという考えをもつ傾向がある。

② 願う学び合いの姿

- ・多様な考え方ができる。
- ・主体的かつ意欲的な取り組みができる。
- ・仲間の意見に耳を傾けながら自分の考えを一層練り上げることができる。
- ・仲間の意見に対して疑問をもったり、賛成や反対の考えを述べるができる。
- ・気軽に話せる雰囲気をお互いに大切にできる。

③ 願う学び合いの姿にせまるために

① 授業の構造化

- ・単元構想図にかかわることを書く。
- ・生徒の意見の中には、本時に直接かかわる中心的なものもあれば、側面的なものもあるが、それぞれの意見が1時間の授業の中のどこかに位置付くような配慮をしていく（板書計画、指導案などで）。
- ・多種多様な意見に対応できる教師の多角的な教材研究を進めていく。
- ・教材指導計画表を作成し、見直しをもって授業案を考えていく。

②指導方法の改善

- ・ 1問1答式から1問多答式へ、発問の工夫をする。
- ・ 授業の中に評価活動を取り入れ、生徒自身が自己評価しながら意欲をもって授業に取り組むようにする。
- ・ 生徒の意見をつなげたり広げたりする役割を教師も積極的に果たしていく。

③小集団の生かし方

- ・ 学級集団の中では遠慮して発言できない子を小集団の中で活躍させる（発表させる）
- ・ 多様な考えを学級で練り合う前に小集団で話し合い、ある程度のレベルまで読みとりの質を高めておく。
- ・ 授業内における相互評価の場として小集団を積極的に活用していく。
- ・ 暗唱や音読（朗読）などの練習の成果を確かめ合う場として活用していく。
- ・ 調べ学習などで協力して補い合う場として活用していく。
- ・ 作品に対する第一次感想（または第二次感想）を交流し合う場として活用していく。

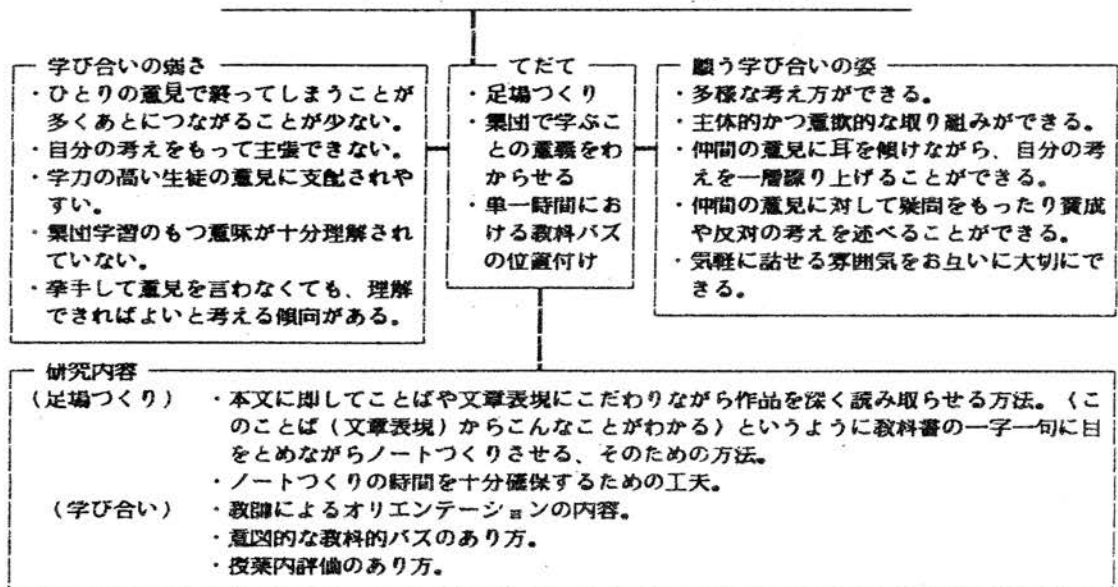
④教材教具の工夫

- ・ 教材を精選し、重点的に扱っていく。
- ・ 生徒のノートから教材資料を発掘する。

国語科 教科経営案

国語科研究テーマ

ひとりひとりが自分の世界をひろげる読みの指導



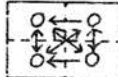

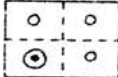
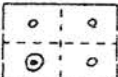
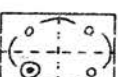

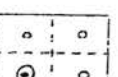
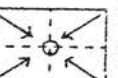
4 単元構想図（教材指導計画表）作成にあたって

（単元名）文学の楽しみ （教材）ひと声

	第 1 時	第 2 時	
指導目標	・アオとランがいつものように掃ってこないことに対する牧場の人達の様子や気持ちを読み取らせる	・アオとランがいつものように掃ってこないことに対する牧場の人達の様子や気持ちを理解させる	←教師がねらう単位時間ごとの教材指導目標
学習内容	・漢字テスト（P.40～P.41） ・音読練習（P.40～P.43 L.5） ・新出漢字練習 ・新出漢字を使った熟語づくり ・ノートづくり（ことばにこだわりながら第1段落の感想を書く）	・漢字テスト（P.42～P.43） ・第1段落の指名音読（2名） ・第1段落の読み取りを交流し合う。（グループ・全体） ・本時にかかわる学習のまとめ	←単位時間ごとの学習項目を授業の流れにそって簡条書きにしたもの
つけた力・評価	（表現）・第1段落の音読がすらすらできる。 ・感情を込めて会話文が音読できる。 ※〈グループ内評価〉 （理解）・会話が進むにしたがってますますアオやランのことが心配になっていく人々の気持ちが読み取れる。 ※〈教師の点検によるノート評価〉 （言語事項）・新出漢字（椋、暮、尾、丈）を使った熟語づくり ※〈挙手発言による評価〉	（表現）・P.42 L.8の「……」が人々の不安な気持ちを表わしている。 ※〈バズによる評価〉 （理解）・P.43 L.4「さがしに行くか」の部分から人々が本当に心配している様子を理解させる。 ※〈教師の発問による評価〉 「対比」「あいつ、のんびりしてるからなあ！ （言語事項）・P.40 L.3「縁がかってくる」は連続して読ませる。 ※〈一斉及び指名による音読評価〉	←（表現）（理解）（言語事項）の3領域について、それぞれ、生徒につけたい力を示したものの
学びの合い姿	・音読練習のとき、相互に正確さを指摘し合える姿 ・熟語づくりの発表を通して互いにことばの世界をひろげ合う姿	・仲間の音読を聞いて、本読みの総復習をし合う姿 ・積極的な発表を通して、牧場の人達の気持ちを分かり合う姿	←本時の学習内容にかかわって教師が願う学び合いの姿

（作成の工夫）「つけた力（評価）」を領域別に具体化したこと。

⑤ 国語科におけるバス学習

バスの種類	バスのねらい	バスの方法	留意点
練習し合う	<ul style="list-style-type: none"> 場面を分担し、朗読練習をさせる（互いに助言し合う） 暗唱（古文、漢文、詩短歌、俳句など）の成果を相互に確かめさせる 漢和辞典、国語辞典に慣れるために、相互に出題し合った語句を引かせる 	 対人法  輪番法  リーダー法	<ul style="list-style-type: none"> 朗読の仕方について互いに長所や欠点を指摘し合う。 正確さをチェックし、あとで相互に指摘し合う。 提示された語句を少しでもはやく引く（班内競争） ※はやく引けた順に評価していく
確かめ合う 発表し合う	<ul style="list-style-type: none"> 漢字の練習成果を相互に評価させる 音読（朗読）練習の成果を相互に評価させる 	 リーダー法  輪番法	<ul style="list-style-type: none"> 正確に漢字が書けているかどうか確かめ合う（正解数を評価していく） 適度な速さで句読点に気を付けながら音読する
教え合う	<ul style="list-style-type: none"> 調べ学習（意味調べなど）の内容を確認しながら互いに不足分を補わせる 	 自由会話法	<ul style="list-style-type: none"> 不足している点を協力して補う 調べ方の方法やコツについて教え合う
練り合う	<ul style="list-style-type: none"> 対立場面を考えさせる 教師からの意図的な課題を解決させる 文章の組み立てに目を向けさせる 	 リーダー法  自由会話法	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の裏にかくされた心情を丁寧に読み取る 根拠をもって自分の考えを主張する

【実践例】 単元名〈文学の楽しみ〉 教材『ひと声』

（バスの課題） K君がたまりかねた気持ちになった理由を考えてみよう

（バスの中でねらいたい学び合いの姿） この場合の理由は1つや2つではなく、いくつも考えられる。グループで話し合うことによって、多角的に理由を考えることの大切さを学び合う。

（方法） リーダー法

生徒が生き生きととりくむ 社会科指導を求めて

——一人一人の見方・考え方を広げ深める指導のあり方——

1 社会科における共存の喜び

仲間との関わりあいにより自分の見方・考え方が広げ深められた時、社会科における共存の喜びが生まれると考える。具体的な姿でいうと、バズや全体での話し合いに積極的に参加するなかでの発言や、授業中・授業後のノートに「〇〇君の発言で、この事件が起こった理由はこんな方向からも考えられることがわかった。」「ぼくも〇〇さんと同じ意見だったが、理由が一つしか見つからなかった。でも、〇〇さんの意見を聞いていて、あのことも、理由に挙げることができることに気がついた。」「バズをしていて、〇〇君と意見が合わなかったけど、事実を挙げて説明したら、ぼくの考えをわかってくれた。」などの表現があらわれてくることである。

2 社会科でとらえた学び合いの弱さと願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

- ・予課発表をしようとする生徒が少なく、他の生徒の予課発表を聞こうとする姿勢が弱い。
- ・一斉学習で、事項の確認などへの挙手は多いが、考えの発表となると消極的である。また、聞く方も、仲間の考えを自分の考えに取り入れて、広げ深めようとする姿勢にとぼしい。
- ・バズ学習でも、素直に自分の考えが発表できない生徒が多い。聞き手の態度も消極的なことが多い。

(2) 願う学び合いの姿

- ・自分なりの事実認識をもとにした積極的な予課発表ができ、自分の考えとくらべて聞くことができる。
- ・一斉学習で自分の考えを積極的に発表し、仲間の発表を真剣に聞き、たがいの考え方のちがいに気づき、見方・考え方を広げ深めることができる。
- ・教科内バズで自分の考えを発表しあい、事実を正しく認識したり見方・考え方を広げ深めたりすることができる。

3 願う学び合いの姿にせまるために

(1) 授業の構造化

基礎・基本事項を明確にし、単元・各単位時間の目標を適切に設定し、各単位時間の関連を明確にした単元構想図を作成し、教科内バズが位置づいた学習過程を工夫する。

(2) 資料の工夫

提示の方法を含め、興味・関心を喚起する資料、見方・考え方を広げ深める資料を工夫する。

(3) 課題の工夫

各単位時間の目標に直結し解決に意欲的にとりくめる課題を工夫する。

(4) 教科内バズの充実

追究に値するバズ課題の工夫をする。

課題に対して自分の足場を持たせる工夫をする。

一人一人が認められるバズの工夫をする。

社会科 教科経営

社会科 研究テーマ

生徒が生き生きととりくむ社会科指導を求めて

一人一人の見方・考え方を広げ深める指導のあり方

学び合いの弱さ

事項の確認などへの挙手は多いが考えの発表となると消極的である。また、聞く方も、仲間の考えを自分の考えにとり入れて、広げ深めようとする姿勢に乏しい。

てだて

1. 授業の構造化
2. 資料の工夫
3. 課題の工夫
4. 教科内バズの充実

願う学び合いの姿

自分なりの事実認識にもとづき、積極的に発表し、仲間の発表を真剣に聞き、たがいの考え方のズレ・ちがいに気づき、見方・考え方を広げ深めることができる。

研究内容

1. 授業の構造化	2. 資料の工夫	3. 課題の工夫	4. 教科内バズ
(1)基礎・基本事項を明確にして、単元・各単位時間の目標を適切に設定	提示方法もふくめ (1)興味・関心を喚起する資料の工夫 (2)見方・考え方を広げ深める資料の工夫	(1)各単位時間のねらいに直結する課題の工夫 (2)解決に意欲的にとりくめる課題の工夫	(1)追究に値するバズ課題の工夫 (2)自分の足場を持たせる工夫 (3)一人一人が認められるバズの工夫
(2)各単位時間の関連を明確にした単元構想図の作成			
(3)教科内バズが位置づいた学習過程の工夫			

4 単元構想図作成にあたって

関東地方

首都圏となり得た地理的条件や歴史的背景のあらましを理解させ、わが国で最大の工業地帯の今日ある姿と共に、移り変わりつつある近郊農業の様子など、特色ある経営と今後の課題の両面から考察させる。

←単元全体の目標

第 1 時

第 5 時

学 習 内 容	《関東地方の位置と自然》 日本列島のほぼ中央に位置し、江戸幕府の成立とともに開発が進み明治以後人口が集中してきた。日本一の関東平野をまわりの山地が囲む。太平洋岸式気候である。	《京葉工業地帯》 京浜工業地帯の伸展は房総半島の君津周辺まで進み、工業専用の千葉港を中心にして京葉工業地帯と呼ばれている。半農半漁の生活はもはや見られず地域の人々の暮らしは大きく変わっている。	
学 ね 習 ら の い	関東地方が近世以来、政治的要地となり首都圏となるまでの経過と恵まれた自然条件を理解させる。	新日鉄君津製鉄所の進出によって大きく変化した君津市を例にして京葉工業地帯の実態を地域の人々の生活の変化から理解させる。	←単元目標にもとづき本時でねらう知識・理解面を中心としたねらい
見 育 方 て ・ た 考 い え 方	国土に占める大きな平野が、江戸時代以降の発展の大きな要因となっている。	工業地帯化によって、地域に住む人々の生活や考え方もそれまでと比べたとき、得たもの失ったもの両面がある。	
中 心 と な 課 題 と 資 料	・都道府県別人口 ・人口分布図 (課) 関東地方に人口が集中している理由について考えよう。 ・歴史年表 ・関東地方の地形図	・新日鉄君津製鉄所写真 ・製鉄所設立前と後の地図 (課) 製鉄所の設立前と後では君津の町はどう変化したか考えよう。 ・君津市の人口、転校生の推移のグラフ ・地域の人々の話(テープ) ・はまぐりの碑の碑文	←課題をうみだす資料 ←課題 ←課題について考えるための資料
願 合 う い 学 の び 姿	関東地方が、日本の他の地方と比べて人口が集中している理由を、歴史で学んだことや地図を駆使して、多面的、総合的に追究していくことができる。	製鉄所の設立前と後の君津の町の変化を、種々の資料から積極的にとらえようとし、人々の生活の変化について考えていくことができる。	←課題についてどういう追究の姿を望むか

(作成の工夫) 単元目標、単元構造、育てたい見方・考え方から、単元の中核となる授業(この単元の場合、全6時間中第5時)を想定し、その授業を必然とする単元構想図を作成した。

基礎・基本を定着させる授業の研究

1 数学科における共存の喜び

- ・ 友達の意見を自分の考えと比較しながら聞くときの喜び
- ・ 自分の意見をバズや全体の中で発表したときの喜び
- ・ 補強バズなどの中で、教え合いや助け合いができたときの喜び
- ・ 仲間と共に、課題解決に達したときの喜び

2 数学科でとらえた学び合いの弱さと、願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

- ・ 課題に対して深く考えようとせず、諦めやすい。
- ・ 自分の考えが持てず、仲間の意見に流されてしまう。
- ・ 教え合ったり、質問し合ったりして仲間同志で高まろうとする姿が弱い。
- ・ 既習事項をいかして、課題解決に取り組めない。
- ・ 一つの考え方が出ると、それで満足してしまう。

(2) 願う学び合いの姿

- ・ 課題に対して、足場をもって粘り強く考えることができる。
- ・ 自分なりの考えを持ち、仲間の意見にも反応できる。
- ・ 仲間同志で教え合ったり、質問したりして学習できる。
- ・ 既習事項をいかして、課題解決に取り組むことができる。
- ・ いろいろな考えを出し合える。

3 願う学び合いの姿にせまるために

(1) 単元構想図

- ・ 毎時間ごとの授業過程を明確にする。
- ・ 単元の第一時・授業の導入部分で、既習事項を明確にする。
- ・ 効果的な予習的課題を設定する。

(2)指導過程の工夫

- ・予習的課題を位置付ける。
- ・ねらいに即した素材選び・課題の工夫をする。
- ・小集団学習を位置付け、基礎基本の確認と相互援助ができるようにする。
- ・本時における理解度をチェックするための、自己評価活動の工夫をする。

(3)小集団の活用

- ・全体の場合では、自信がなかったり遠慮して発言できない生徒を小集団の中で発表させる。
- ・相互評価の場・相互援助の場として小集団を積極的に活用する。
- ・バズのねらい、内容、全体の場合での発表の仕方を明確にする。

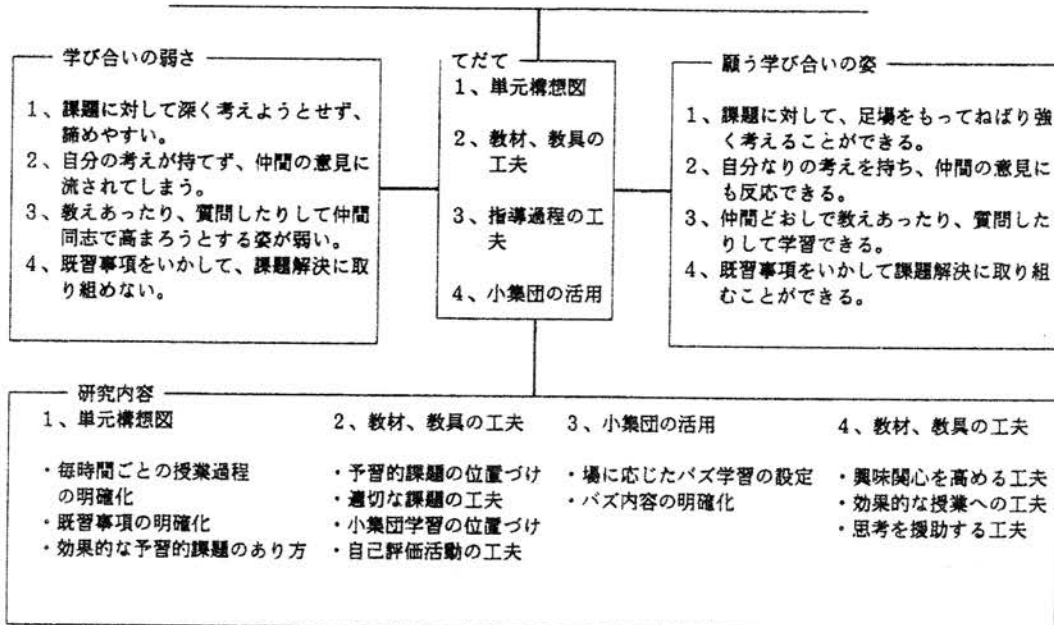
(4)教材教具の工夫

- ・興味関心を高める工夫をする。
- ・効果的な授業への工夫をする。
- ・思考を援助する工夫をする。

数学科教科経営案

数学科研究テーマ

基礎基本を定着させる授業の研究

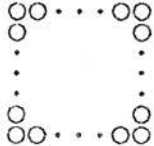
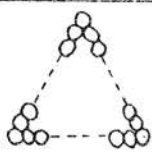


4 単元構想図

単元名 文字の式

単元目標 文字を使った式のもつ働きや、その表し方の規約を理解させるとともに、簡単な場合について計算の原理を明らかにし、必要に応じて、文字を使った式を用いたり、計算したりできるようにする。

- つきたい力
1. 数量や数量の関係が、一般的に、かつ、簡潔に表現できる力
 2. 数量や数量の間の関係が、形式的に処理できる力

項	数量を文字で表すこと		
目標	文字を使って数量を式に表すことができる。	文字を使って式に表すことに慣れ、逆に文字の式がどのような数量を表しているのかがつかめるようにする。	← 本時のねらい
予果	<p>一辺が正方形に並んだ基石の全体の個数を求めよ。</p> <p>一辺が3個のとき、一辺が4個のとき、一辺が5個のとき。</p> <p>一辺が5個のときの全体の個数の求め方を書く。</p>	<p>32という数は</p> $\square \times 3 + 2$ <p>である。</p> <p>524という数は</p> $\square \times 5 + \square \times 2 + 4$ <p>である。</p>	← 本時の学習内容に関わる既習事項
題材	<p>下の図のように正方形に基石を並べたとき、全体の個数を求める式はどのようになるか。</p> 	<p>十の位の数をa、1の位の数をbとすると、2けたの整数は$10a + b$で表せる。</p> <p>1個a円のなし3個と1個b円のもも5個がある。このとき、次の式は何を表しているか</p> $a \times 3, b \times 5, a \times 3 + b \times 5$	← 本時のねらいに迫るための課題
自己評価	<p>① 基石を右の図のように正三角形に並べる。</p>  <p>一辺の基石の個数をaとして、基石全体の個数をaを使った式で表せ。</p> <p>② 1匹500円の金魚をn匹買って5000円の金魚ばちに入れてもらった。いくら払ったらしいかnを使って表せ。</p>	<p>① 兄の身長がa cm、弟がbcmのとき、その差を表す式を求めよ。</p> <p>② a円のかごに、30円のりんごをb個つめてもらった。いくらになるか。</p> <p>③ あるクラスで、男子m人、女子n人います $m + n$は何を表しているか。</p>	← 本時の目標が達成できたのかを評価するための練習問題
願う学び合いの姿	<p>全体の個数が求められなかったり、言葉で式が表せないで、予課にもどって考えたり、一辺の個数という言葉を使って式化ができる</p>	<p>文字を使った式が作れないので、言葉の式を作らせたり、どこが変わっているのかを見つけ、考えることができる。</p>	← 本時の学習内容に関わって教師が願う学び合いの姿

作成について工夫・配慮したこと

予課で既習の基礎・基本事項が洗いだされることと、本時に習得されなければならない基礎・基本を題材にどう関連づけるか考え、作成した。

バズの種類	バズのねらい	バズの方法	留意点
確かめ合う (確認バズ)	予課・持ち物の確認、既習事項・復習的課題の答え合わせや確かめをし、課題への共通な足場をつくる。	リーダー法 対人法 	既習事項のうち、本時にかかわるものを特に確認させる。
見つけ合う (発見バズ)	予課の内容について、疑問な点を交流し、課題をつくる。	リーダー法 自由会話法 	時間をかけ過ぎないようにする。
深め合う (探求バズ)	課題に対して、個人で考えたことを交流し合い、考えを修正したり、深めたりする。	輪番法 自由会話法 	自分の考えを、全員発表する。
練習し合う (練習バズ)	リーダーを中心に、問題を出しながら学習内容の知識・理解を促進する。	対人法 テスト法 	ペア練習も取り入れるようにする。
教え合う (補強バズ)	わからない点を出し合い、教え合うことによって理解する。終末の自己評価問題で、不明な点を教え合う。	リーダー法 自由会話法 	「わからない」と言えるグループの人間関係をつくりたい。

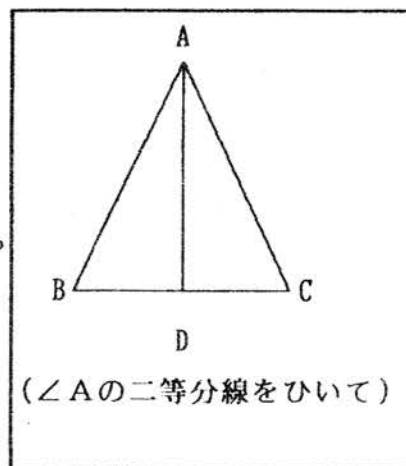
実践例

2年生 「2角が等しい三角形は、二等辺三角形であること」の証明

バズの課題 (1) 教科書の証明ができるようになったか確認する。わからない人がいたら、教え合う。

バズの方法 リーダー法から自由会話法へうつる。

バズの内容 グループ全員ができるようになったのか確認する。できない人がいたら、証明の進め方を中心に教える。



バズの課題 (2) 「他の方法で証明できないだろうか」考えた後に、自分の考えを交流し、証明できるかどうか探求する。

バズの方法 輪番法から自由会話法へうつる。

バズの内容 (ア) 点Aから、BCに垂線をおろす。
 (イ) 点Aから、BCへ二等分線をひく。
 (ウ) 与えられた図のみで考える。(△ABCと△ACBの合同を考える。)の3つの考えを出し合い証明可能かどうか探求する。

根拠を持って考え、生活に生かす授業づくり

① 理科における共存の喜び

自然の事物・事象を解き明かしたとき、その生徒にとって自己充実感が持て、さらに理科学習にたいする興味や関心も増大してくる。しかしながら授業過程において、自分自身で課題を見つけ、追求し、事物・事象の規則性を見いだすには、困難な面がみられるのが現状である。当然のことながらそれらの認知的側面を支えるためには、様々な既習事項や生活体験におけるいくつかの情報収集が必要になってくる。その手だてと成りうるものが仲間である。共に見つけ、共に探り、共に見出した時、自分自身の自然を見抜く力が養われ、充実感へとつながっていく。このことが理科における喜びであると考えられる。

② 理科でとらえた学び合いの弱さと願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

- ・ 自然に対する興味関心はあるのだが、断片的知識を求めるとどまり、根拠を持って追求する姿勢は弱い。
- ・ 結論を早く知りたがり、追求の過程を大事にする姿勢に欠ける。
- ・ 受け身の授業という様子で、与えられた定型的な課題はよくやるが、追求的課題では話が進まない。
- ・ 人の話を聞くなかで、自分の意見と照らし合わせながら練り合わせる力が弱い。

(2) 願う学び合いの姿

- ・ 自然の事象を的確にとらえ、「なぜそうなるのか」ということを、事実から、自分なりに根拠を持って考え、予想をたてることができる。
- ・ 考え、予想を出し合い、仲間の中で相互に検討し、自分の考えをより深めることができる。
- ・ 実験や観察をみんなで分担し、一人一人が役割を持ち、相互に協力して、正しくやり遂げることができる。
- ・ 結論だけでなく、実験や観察、話し合いの過程を大切にすることができる。

③ 願う学び合いの姿に迫るために

(1) 展望と目標のある学習

- ・単元の初めに、この単元で「何を、どの様に」学習するのかを、生徒にも明らかにし、学習の展望と目標を持たせるようにする。
(教師→単元構想図の作成と検討)

(2) 課題と学習方法の明確化

- ・事象提示の工夫、予課の工夫などで、課題を生徒自身が明確につかめるようにする。
- ・課題の設定と同時に、生徒自身が「何を考え、何を深めるのか」をより具体化して、話し合い活動を充実させる。
- ・身近な素材を用いた、実験・観察の工夫をする。

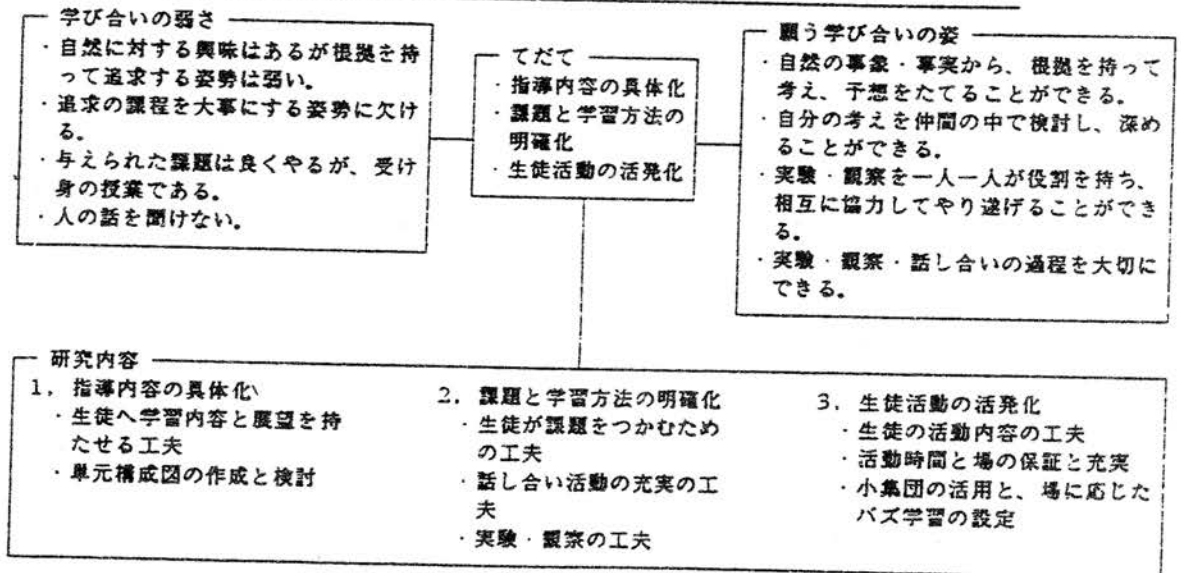
(3) 生徒の活動の活発化

- ・授業の中で、より多くの生徒の活動を取り入れ、特に共通に行う実験・観察(内容の工夫も含め)から、考えを練り、話し合いのできるような場と時間を保証するように配慮する。
- ・小集団の活用と、場に応じたバズ学習の設定をする。

理科教科経営案

— 理科研究テーマ —

根拠を持って考え生活に生かす授業づくり



④ 単元構想図の作成にあたって

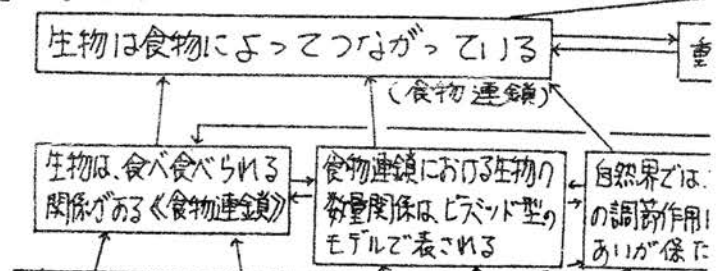
単元の学習内容の相互関連を図示し単元全体の学習の展望を持てる様にする。

本時のめあてに迫る素材。

生徒自身の学習する課題。

本時で扱う実験観察や学習内容。

授業の中でどの様に学び合い、何を追求するか。


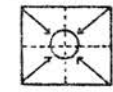

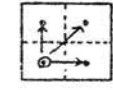

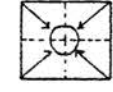



時	1	2	3	4	5	
重要事項	生物にはすべて食べ食べられる関係がある	食物連鎖はそれぞれの場には異なる特徴がある	生物量のピラミッド	特定の生物の急激な増減は自然の調節作用による	緑色植物は自ら成長に必要な有機物を造る	植物は成長を促す
予習的課題	草食動物と肉食動物の食べ食べられる関係を区別する	水中、地上、陸上の食物連鎖のそれぞれの特徴を何か	ワシやハヤブサはなぜ増加しているのか	植物が自然界でどのように増えるのか	植物は自ら成長に必要な有機物を造るのか	動物はどのような準備をするのか
本時の課題	食物連鎖とはどのようなことか	生物の食物連鎖の仕組みは何か	食物連鎖の量的関係はどのようにして決まっているのか	食物連鎖の中で自然の調節作用はどのように働いているのか	光合成とはどのような仕組みなのか	光合成はどのようにして行われているのか
学習内容	陸上、水中の食物連鎖	具体的な例から食物連鎖の仕組み	食物連鎖の量的関係	自然の調節作用	植物は自ら有機物を造る	動物はどのような準備をするのか
学び合いの工夫	具体的な食物連鎖の事例について自分の知識と授業の中で広げたい人があればそれに合わせて知識を共有させる	生物のつくり合いの事例として、生物が自ら調節し合うこと、またつくり合いが崩れた時の変化などの中で予想させる	光合成の事例として、今の学習の中で、その中で出し合えるめられた	実験と話し合い	実験と話し合い	実験と話し合い

- ◎ 作成に際しての工夫や配慮したこと
- (1) 個々の授業時間での展開と同時に単元全体でのねらい、授業の構成、単元の構成が簡明に解るようにして、教師と生徒が学習の展望が持てるように考えた。
 - (2) 課題意識が連続できるように、予習的課題と本時の課題がつながるように考えた。
 - (3) 学習意欲を高めるために、身近な素材を多く取り入れるように配慮した。
 - (4) 生徒の認知的側面を支える学び合いを工夫した。

5 理科におけるバズ学習

○理科部における教科内バズのとらえ

バズの種類	バズのねらい	バズの方法	留意点
深め合う (課題追求バズ)	・課題に対し、個々で考えをノートに記述した事柄を交流することにより、個人の考えを修正したり、深めたりする。	<輪番法>  <自由会話法> 	最初の段階は学習リーダーの司会で輪番法で進めるが、班の高まりが見られたら、自由会話法に移行していく。
練習し合う (練習バズ)	・知識を効果的に覚えるために、励まし合いや教え合いを行い、知識理解を促進する。	<対人法>  <テスト法> 	学習リーダーの司会や指示に従って、1対1やペア学習で行っていく。一般的にはテスト法で行うのが効果的である。
見つけ合う 確め合う (実験・観察バズ)	・深められた課題を確かなものにしたり、見つけ出し、考察場面につなぐ。 ・器具などを分担する。	<リーダー法>  <自由会話法> 	実験準備や片付けは、リーダー法によって協力分担して行う。実験・観察の中では自由会話法で気づいたこと・予想との対比を行う。
確め合う (考察・まとめバズ)	・実験・観察の結果から、まとめを練り上げ、得た結論を他の事象に適用させ、自然の現象や事象を見抜く	<リーダー法> 	学習リーダーの司会で結果から考察とまとめを行う。その中で理解しにくい部分を出させ、班で教え合っていく。

◎実践例 (深め合うバズ)

・本時の目標：酸化鉛は炭素と加熱することにより、酸素がうばい取られ、鉛になる事象を通して還元の様子を理解させる。

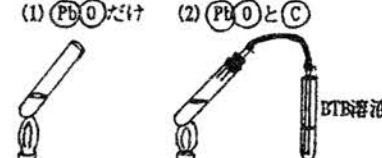
○授業におけるバズの位置づけとねらい

導入

- 事象提示
酸化鉛 (黄色粉末) と金属鉛 (銀色) を班ごとに配布し、本時の課題を見つけさせる。
- 課題提示
酸化された鉛を金属の鉛にするにはどうしたらいいか。

展開

- 課題追求
個で考えさせ、足場をつくり、班ごとにバズに入る
- 解決の構想
モデルを使って PbO を Pb にする構想をつくる。
- 検証実験
(1) PbO だけ (2) PbO と C



・課題指示後 “深め合うバズ” を位置づけたねらい

課題に対し個の足場を確立させた後、その考えを班内で交流させることにより、既習事項を確認させたり、仲間の考えをもとに自分の考えを修正、または深めさせ、より個の課題意識を明確にする。

- ①入口：“酸素をうばえば、という考え方だね。”
- ②中味：仲間の考えと自分の考えを比べよう。モデルを使ってさらに深めてみよう。
- ③出口：どうしたら酸素をうばえるかを発表しよう。

・本時におけるバズの効果

考える視点がはっきりとし、個の足場がより深まったことにより、強い課題意識を持ち、実験や考察に意識を持ち取り組ませることができた。

自ら音楽の美しさを追求する学習のあり方を求めて

① 音楽科における共存の喜び

私たち音楽科では、音楽の美しさに感動し、自ら音楽美を追求し、生き生きと表現活動できる生徒を願って実践を続けてきた。音楽の美しさ・豊かさは、ただ単に、音楽を聞いて音楽を聞いて美しいと思うものだけではない。ややもすると、私たちの身の回りには、テレビ・ラジオ・オーディオの普及が進み、多種多様の音楽に接することができるようになってきている中、生徒達は音楽のうべだけをとらえ、狭い感じ方・見方で音楽を楽しんでいるように思われる。

・私は、合唱が大好きです。みんなで歌っていると気持ちがいいです。得に、みんなの声がひとつになって、きれいな合唱になったときに、よかったなあと思います。(1年女子)

・リコーダー学習で、全然うまく吹けずに、困っていたらグループの子が教えてくれました。(中略)自分がまちがえて吹いたとき、グループの子がカバーしてくれたのでうれしかったです。(1年男子)

これは、1年生男女の音楽の授業についての作文の1部である。このようにクラス合唱の中できれいに響いたハーモニー、アンサンブルの中で息のあった演奏など仲間と共に創りあげたものや、その過程におけるグループの中での教え合い・励まし合いなど、生徒たちは「仲間の良さ」を見出だしている。

私たちは、合唱・合奏・アンサンブルなど自分一人では味わうことのできないクラスやグループの仲間全員での共有の感動体験を多くさせていくような授業を展開しなければならないと考えている。

② 音楽科でとらえた学び合いの弱さと願う学び合いの姿

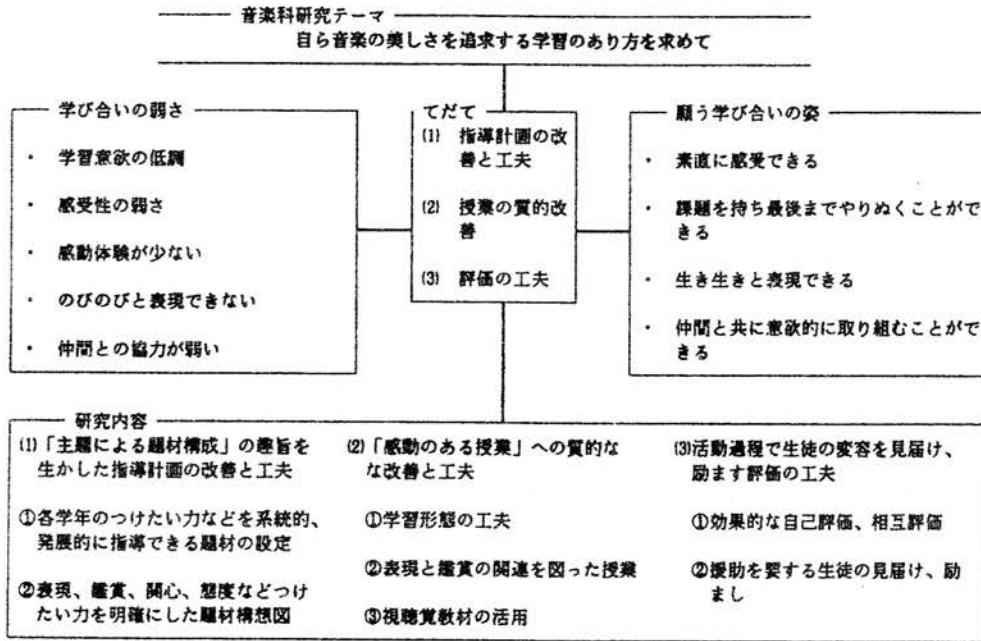
(1) 学び合いの弱さ

- ・ 学習意欲が比較的弱く、ねばり強く最後までやりぬくことができない。
- ・ 仲間のなかでのびのびと表現できない。
- ・ 音楽を「好き」「嫌い」「明るい」「暗い」といった表面的な嗜好でとらえ、音楽の持つ曲趣を素直に感受する力が弱い。
- ・ 仲間の中で、歌ったり楽器を演奏することはできるが、楽曲の表現の工夫・高まりにまでは至らず、そのような感動体験が少ない。
- ・ 仲間と共に一つの楽曲に創り上げていこうとする姿勢が弱い。

(2) 願う学び合いの姿

- ・ 生徒一人一人が音楽の美しさを素直に受け入れることができる。
- ・ 音楽の美しさに素直に感動でき、自ら課題を持ち最後までやりぬくことができる。
- ・ 自ら進んで生き生きと表現できる。
- ・ 仲間と共に意欲的に学習に取り組むことができる。
- ・ 仲間の中へ自分の表現を素直に出すことができる。

—— 音楽科 教科経営案 ——



③ 願う学び合いの姿にせまるために

願う学び合いの姿にせまるために、音楽科では次の3つの柱〔(1)～(3)〕を中心に研究・実践してきた。

- (1) 「主題による題材構成」の趣旨をいかした指導計画の改善と工夫
 - ① 各学年の目標やつけたい力が系統的・発展的に指導できる題材の設定と配列
 - ② 表現・鑑賞能力、興味・関心などつけたい力を明確にした一題材ごとの題材構想図の作成
- (2) 「感動のある授業」への質的な改善と工夫

— 一人一人の生徒に音楽学習に対する興味・関心や意欲を持たせる工夫 —

- ① 学習形態の工夫
- ② 表現と鑑賞の関連を図った指導
- ③ 視聴覚教材の活用
- (3) 活動過程で、生徒の変容を見届け・励ます評価の工夫
 - ① 学習意欲を持たせ、ねらいを効果的に達成するための自己評価、相互評価の工夫
 - ② 援助を要する生徒への見届けと励まし

④ 題材構成図作成にあたって

題材	フレーズを生かした表現	指導目標	・ 情緒を味わい、フレーズごとに全曲のまとまりを考慮して表現させる。 ・ 歌詞のフレーズとメロディのつながりを理解し、リズム感を身に付けさせる。	配当時間	6
具 体 目 標	第1次 歌詞のまとまりやフレーズの続く感じ、終わる感じが生かしてフレーズを工夫させる。	第2次 曲の構成やメロディの変化を知り、その変化を表現して表現を工夫させる。	第3次 曲の構成やメロディの変化を知り、その変化を表現して表現を工夫させる。	第4次 曲の構成やメロディの変化を知り、その変化を表現して表現を工夫させる。	第5次 曲の構成やメロディの変化を知り、その変化を表現して表現を工夫させる。
教 材 詳 細	山を思ひ出せう (混声三部合唱)		原 原 に 生 々 々 (混声三部合唱)		
指 導 の 能 力	自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	各フレーズの特色を捉えて、和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	休符に注意して、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	他のパートを聴きながら自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)
重 点 的 な 能 力	曲全体の特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	3フレーズを捉えて、和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	休符のつなぎ目を捉えて、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	他のパートを聴きながら自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)
能 力 評 価	自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	各フレーズの特色を捉えて、和音の響きを感じ取り、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ア)	休符に注意して、自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)	他のパートを聴きながら自分のパートの特色を捉えて歌うことのできる。(→ウ)
学 習 意 欲	小集団①(ア)(ウ)	小集団②(ア)(ウ)	小集団③(ア)(ウ)	小集団④(ア)(ウ)	小集団⑤(ア)(ウ)

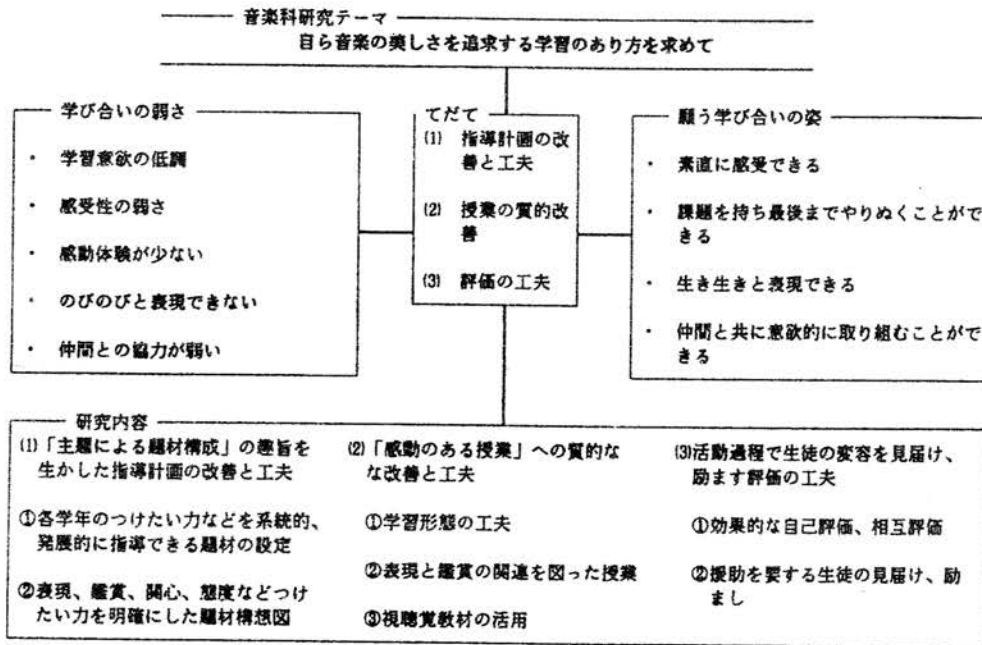
(1) 作成にあたって工夫・配慮したこと

- ① 主題による題材を設定し、つけたい力を効果的に高められるようにした。
- ② 指導目標を細分化し、具体的な目標を設定した。
- ③ 一単位時間ごとに、指導の重点として「表現の能力」・「鑑賞の能力」・「関心・態度」の3点を考え、指導する内容を明確にした。
- ④ 指導内容に対して、適した小集団の学習形態を明記した。

(2) 願う学び合いの姿

- ・ 生徒一人一人が音楽の美しさを素直に受け入れることができる。
- ・ 音楽の美しさに素直に感動でき、自ら課題を持ち最後までやりぬくことができる。
- ・ 自ら進んで生き生きと表現できる。
- ・ 仲間と共に意欲的に学習に取り組むことができる。
- ・ 仲間の中へ自分の表現を素直に出すことができる。

—— 音楽科 教科経営案 ——



③ 願う学び合いの姿にせまるために

願う学び合いの姿にせまるために、音楽科では次の3つの柱〔(1)～(3)〕を中心に研究・実践してきた。

(1) 「主題による題材構成」の趣旨をいかした指導計画の改善と工夫

① 各学年の目標やつきたい力が系統的・発展的に指導できる題材の設定と配列

② 表現・鑑賞能力、興味・関心などつきたい力を明確にした一題材ごとの題材構想図の作成

(2) 「感動のある授業」への質的な改善と工夫

— 一人一人の生徒に音楽学習に対する興味・関心や意欲を持たせる工夫 —

- ① 学習形態の工夫
- ② 表現と鑑賞の関連を図った指導
- ③ 視聴覚教材の活用
- (3) 活動過程で、生徒の変容を見届け・励ます評価の工夫
 - ① 学習意欲を持たせ、ねらいを効果的に達成するための自己評価、相互評価の工夫
 - ② 援助を要する生徒への見届けと励まし

④ 題材構造図作成にあたって

題材	フレーズを生かした表現	指導目標	評価目標	配当時間	
具 体 目 標	第1次 歌詞の音とまりやフレーズの続く感じ、終わる感じを生かしてフレーズを工夫させる。	第2次 曲の構成や見の立ち回りを示している音楽を理解して表現を工夫させる。		6	
教 材 解	鳥の山を思い出せう (混声三部合唱)		原 原 に 生 活 する (混声三部合唱)		
指 導 の 能 力	自分のパートの特色を正しく歌うことができる。(→ウ)	和音の響きを感じ取り、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	各フレーズの最後や重なりで工夫して歌うことのできる。(→ウ)	休符に注意して、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。(→ウ)	他のパートを聴きながら主役を生かして歌うことのできる。
重 点 点 心	曲全体の趣向を理解できる。(アウタクト、テンポ、リズムの響き、取組む)	和音の響きを感じ取り、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	各フレーズの趣向を生かして歌うことのできる。	主役の趣向を生かして歌うことのできる。	曲の特色やフレーズの趣向を生かして歌うことのできる。
評 価 の 方 法	自分のパートの特色を正しく歌うことのできる。	和音の響きを感じ取り、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	各フレーズの趣向を生かして歌うことのできる。	休符に注意して、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	他のパートを聴きながら主役を生かして歌うことのできる。
評 価 の 内 容	曲の趣向を生かして歌うことのできる。	和音の響きを感じ取り、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	各フレーズの趣向を生かして歌うことのできる。	休符に注意して、自分のパートの趣向を生かして歌うことのできる。	他のパートを聴きながら主役を生かして歌うことのできる。
学 習 形 態	小集団①バズ(ウ)	小集団①バズ(ウ)	小集団①バズ(ウ)	小集団①バズ(ウ)	小集団①バズ(ウ)

(1) 作成にあたって工夫・配慮したこと

- ① 主題による題材を設定し、つけたい力を効果的に高められるようにした。
- ② 指導目標を細分化し、具体的な目標を設定した。
- ③ 一単位時間ごとに、指導の重点として「表現の能力」・「鑑賞の能力」・「関心・態度」の3点を考え、指導する内容を明確にした。
- ④ 指導内容に対して、適した小集団の学習形態を明記した。

⑤ 音楽科におけるバス

領域・・・歌唱、器楽（リコーダー）、鑑賞の3つ

種類	領域	ねらい	方法	留意点
ペア [確め合う 深め合う]	歌唱	<ul style="list-style-type: none"> 互いの旋律をきき合いながら表現させる。(声く) 相手の表現をきき、助音合う。 		<ul style="list-style-type: none"> ペアの組み方
小集団①バス (4~5名男女混合) [教え合う、細め合う、深め合う]	器楽 (リコーダー) 鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> わからない運指やリズムなどを教え合う。 吹ける音が正確に合う。 正しく吹けるまで練習し合う。 表現を深め合う。課題の交流。 		<ul style="list-style-type: none"> 不慣れな生能の指導 生活班を母体とする。
小集団②バス (8~10名男女混合) [深め合う]	歌唱	<ul style="list-style-type: none"> 表現を深め合う。 個性を鍛える。(1人1パートの役割) 互いにきき合い、美しい響きを出し合う。 		<ul style="list-style-type: none"> 編成の仕方。 リーダー育成。 3つのパートを小集団の形にする。
小集団③バス (8~10名男女別) [確め合う、深め合う]	歌唱	<ul style="list-style-type: none"> 自分のパートを正しく歌えようとする。 表現を深め合う。 正しく歌える音が、確め合う。 		<ul style="list-style-type: none"> 各パート(声種)別に分かれる。
中集団(10~20名) バス [確め合う、深め合う]	歌唱	<ul style="list-style-type: none"> 表現を確め、深め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 一斉学習(合唱)を半分ほどし、歌劇、3人制に分ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 各パートの視点を焦点とし、評価し合う。

〈実践例〉 フレーズを生かした表現 (教材；あの山を思い出そう)

つらい こと に あい うち ひ し が れ た と き
あつらい こと に あい うち ひ し が れ た と き

あ の や ま し き おも い だ さ う

第2時間目、「詩の内容、曲の盛り上がり考えた表現をさせる。」

⇒ 小集団(Ⅱ)バス

各グループに分かれ、音の増減(⑦~⑧)、音の強弱(⑨~⑩)などを工夫し、発表し合う。仲間の演奏を聴き、この曲に一番適した表現を考える。

“表現する喜び”を感じとることができる授業づくり

①、美術科における共存の喜び

美術科における最も純粋な“共存の喜び”とは、言葉のない活動の中で、友達や教師の存在を空気の中に感じながら、互いに高まり合うことができるとき、初めて感じ得るものとする。

つまり、この場合、限定された言語による交流を通し得られる学習活動を中心に考えていない、ということである。

美術科では“共存の喜び”とは、“皆と同じ”ことに同属的快感を得ることではなく、むしろ“皆と違う”ことに価値観を見いだすことだ、と考えたい。これが「個性」を育てることにつながると信じている。

しかし、そういった状況をつくり出す過程において、小集団による学習効果を見逃すことはできない。したがって、互いを深め合う係わりを考えることが大切である。

②、美術科でとらえた学び合いの弱さと願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

・ “自分の作品を見られたくない。”という気持ちが強い。

→ 自らの「個性」を打ち出すことができていない証である。

他を意識しすぎ、その中に自己を埋没させてしまっている。

互いに高め合う集団でありたいが、“積極的な働きかけ”が見られにくい。

・ “うまい子、へたな子。”という決めつけがある。

→ 作品そのものよりもむしろ「誰が制作したか？」が大きく意識の中にあり、互いの作品の中身をつかみあうことができにくい。

小集団で作品そのものを意識し合うことを望みたい。

(2) 願う学び合いの姿

・ 基礎、基本に係わることがらは、互いに注意し合い、全員が同じ出発点に立つことができる。

・ 互いの制作姿勢、作品の良さを素直に認め合うことができる。

・ 互いに言葉を交わすことはなくても、その場の雰囲気の中から制作する気力、意志がつかみ合える。

③、願う学び合いの姿にせまるために

(1) 題材の再検討

- ・地域に密着した、身近な題材を考える。
- ・“手ごたえ。”があり、しかも制作の見通しが立てやすい題材設定を心がける。
- ・既成のものにたよらず、“手づくり。”の題材を開発する。

(2) 指導の体系化

- ・各題材が1年～3年まで発展していくようにする。
- ・技術的高まり、精神的高まりを発達段階に応じて考え、指導のポイントをはっきりさせる。

(3) 課題の明確化

- ・単位時間内における課題を明確にし、何を、どのように制作したらいいか、はっきりつかませるために、題材指導計画を作成する。

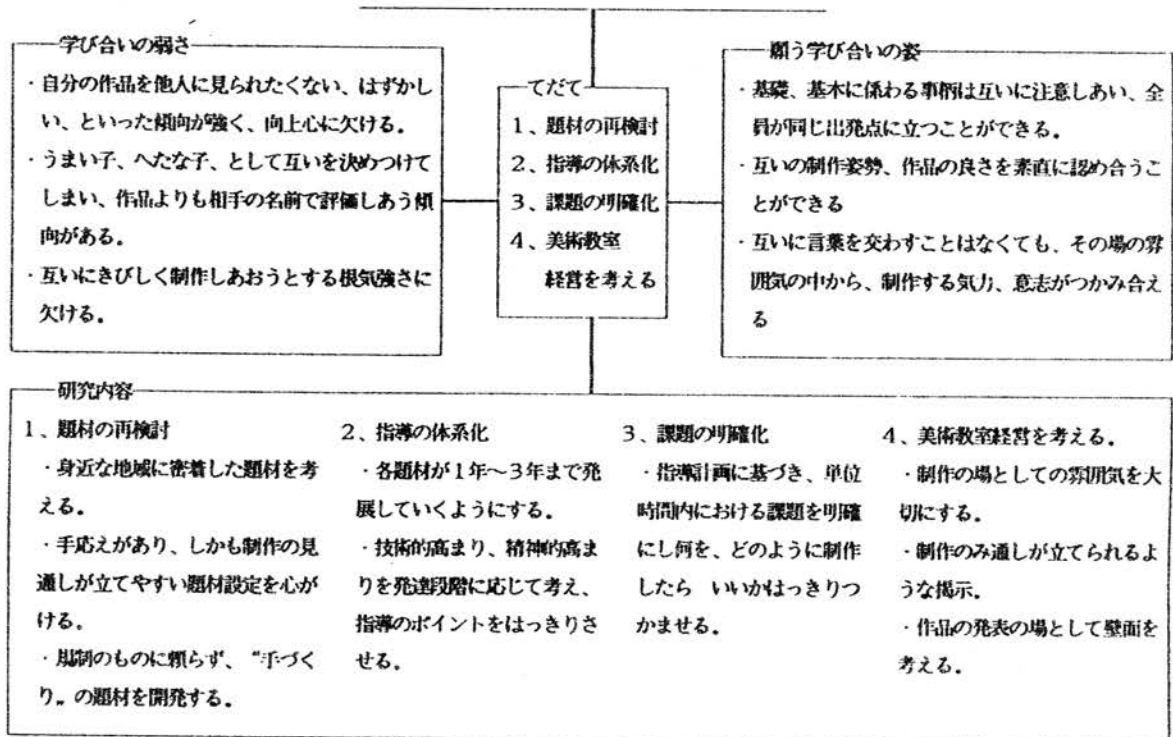
(4) 美術教室経営を考える

- ・制作の場としての雰囲気大切に作る。
- ・制作の見通しが立てられるような掲示をする。
- ・作品の発表の場として、壁面を考える。

美術科 教科経営案

美術科 研究テーマ

“表現する喜び。”を感じることができる授業づくり





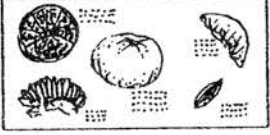


4. 単元構想図(題材指導計画)作成にあたって

1年 自然物、人工物を基にした構成 全16h

<題材のねらい>

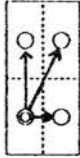
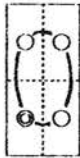
植物、器物などから美しい形や色を見つけ、その特徴を生かして、自分のかたちを平面構成することができる。

流れ	導入・自由画制作→かたちみつけ 色の性質→彩色練習	自然物、人工物をよく観察して描く	
	4	2	
指導目標	・既成の形にとらわれない、自分の見つけたかたちを表現することができる。 ・色の性質についてしり、基礎基本に乗った表現ができる。	・モチーフをよく観察し、忠実にエンピツデッサンすることができる。	← 節目ごとの指導目標
作品の進度	自由画  8h/2 課 ま(かたちみつけ)ま(練習)   	・スケッチブック 	← 作品の進度を具体的に図示したもの
指導内容	・かたちにとらわれない自由画を描かせる。 ・自由画作品からつかんだイメージを用紙に描かせる。 ・上記用紙裏に○△を書かせ、ポスターカラーの使用を練習させる。 ・かたちみつけの作品を彩色させる。	・五感を使い、体感的に感じさせる。 ・全体の姿を中央に、実物大でエンピツデッサンさせる。 ・部分的に虫眼鏡で拡大、カッターで切る、割るなどしてスケッチし、彩色を施す。 ・気付いたことをメモさせる	← 節目ごとの指導目標を考慮した内容
持ち物	・水彩えのぐセット ・ポスターカラー、筆セット	・2B~4Bエンピツ ・モチーフ ・カッター ・虫眼鏡	← 生徒が用意するもの
準備	・参考作品(かたちみつけ、自由画)	・参考作品(スケッチブックへの入れ方がわかるもの)	← 教師が用意するもの
評価の観点	・「自由画」→自由に表現しているか。(自分の欲求に忠実な表現ができていないか。) (かたちみつけ、自由画)作品提出	・モチーフをよく観察してエンピツデッサンしているか。 ・モチーフに対する自分のイメージをつかんでいるか。(スケッチ)提出	← 節目ごとの評価の観点
留意点	・「自由画」→具体物は描かない	・スケッチは特に入念にさせること	← 技術的、精神的な留意事項
その他	・彩色時には表現のための基礎基本をグループで確認し合う。	・集中できる雰囲気づくり	

◎作成にあたって工夫、配慮したこと

- ・題材のねらいをはっきりさせる。
- ・時間配分を考え、作品づくりの流れを明確にする。
- ・題材の節目ごとに指導目標を決め、それを基に学習内容を考慮する。
- ・作品を具体的に、どのように制作していったらよいか、どんな状態まで進んだらよいかをはっきりさせるため、節目ごとに作品の進度を図示する。
- ・作品の節目ごとに評価の観点を決め、題材全体を通した評価を心がける。

5、美術科におけるバス学習

バスの種類	バスのねらい	バスの方法	留意点
<p>・確かめ合う (表現・鑑賞)</p>	<p>・前時の内容を復習し、確かめる。 班で本時の課題、制作の具体的な方法など、基礎・基本に係わる事柄を確認する。</p>	<p><例></p> <p>テスト法</p> <p>「どうやって描いたのか、 やってみよう。」</p>  <p>(学習士の司会)</p>	<p>・基礎・基本に係わる具体的な質問をしながら、守らなければならないこと、やらなければならないことを、全員がつかめるようにする。</p>
<p>・発表し合う (鑑賞)</p>	<p>・自分の考えを相手に伝える。 作品から受けたイメージ、感想は相手に伝え、からませることで自分のもの(個性)となる。</p>	<p>輪番法</p> <p>・1人1人が自分の意見を発表していく</p> 	<p>・相手の気持ちを尊重し合い、正解は無い、ということをしっかり伝えさせておく必要がある。 けなしたり、バカにしたりすることは絶対に許されない。</p>

<実践例>

1年 自然物、人工物を基にした構成

◎技術的な押さえ(確かめ合う)

(学L司会)

・前時、制作した作品(習作2)を見ながら

☆3本の直線で白い紙(平面)を区切る(分割する)と、どうなりましたか。

☆ポスターカラー使用上の注意事項を3つ言ってください。

それをきちんと守って塗ることができましたか。



「今日の技術上の課題」

一人一人の良さが生かされる授業づくり

① 技術・家庭科における共存の喜び

技術・家庭科では、作業を伴う学習が多い。一つの作品を製作したり、実験や調理実習等をする時、生徒一人一人が考えた事について各々が違った側面から意見を出し合う中で、自分自身にとって「仲間と勉強して良かったな」といえるような教え合いの姿がある。また、友達の作品や用具の使い方を見て「勉強になったな」という姿がある。そして、役割分担を受け持ち分担作業を全員でやり遂げるといふ姿がある。つまり、共に作業を通して仲間の良さを見つけこれを認めながら技能を高めていくことを、技術・家庭科では共存の喜びと考える。

② 技術・家庭科でとらえた学び合いの弱さと、願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

① 個にかかわること

- ・自ら学ぼうとする力が弱い。
- ・自分の分だけでできれば良いという考え方を持っている生徒が多い。

② 仲間にかかわること

- ・根気よく仲間と共に作る力が弱い。
- ・班学習での役割が果たせない。

(2) 願う学び合いの姿

私たちは、次の3点を願う学び合いの姿と考えた。

- ① 自ら進んで集団にかかわり、進んで自分の考えを出そうとする姿。
- ② 仲間の発言にうなづく姿や感動できる姿。
- ③ 技能差にかかわりなく、集団で学習する値打ちに目を留め、共にかかわり合って一つの作品を生み出していく姿。

③ 願う学び合いの姿にせまるために

(1) 指導内容の整理と授業の構造化・系統化

- ・指導内容を整理し、1単位時間毎の課題、願う学び合いの姿、生徒が

生き生きと活動する場を設定し、生徒の意識を大切にしながら単元授業の構造化・系統をはかる。

(2) 効果的なバズ学習の工夫

- ・ 班内での一人一人の役割の工夫をする。
- ・ 一人一人の良さを生かし、自ら学ぶ力を獲得し、共に高まる学習を工夫する。

(3) 良さを生かす指導方法

- ・ カルテを使いながら良さを見つけ励ます。
- ・ 技術的活動力の視点から見つめた一人一人の個性的な取り組みを大切にしていく。
- ・ 生徒が生き生きと活動する場を設定する。

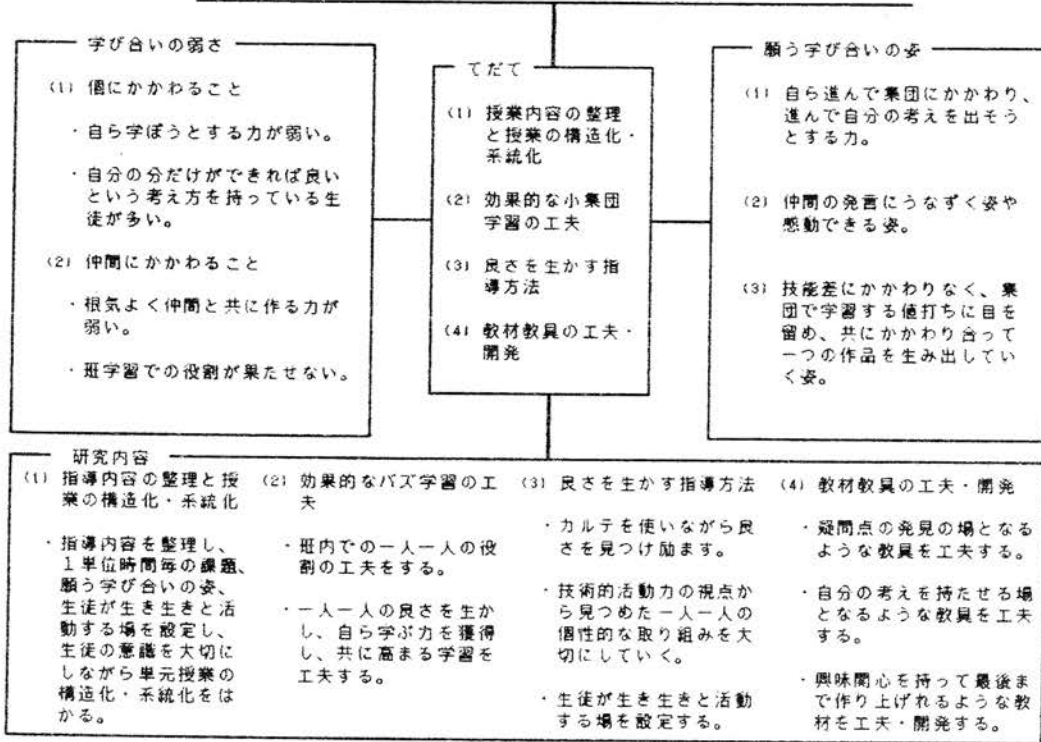
(4) 教材教具の工夫・開発

- ・ 疑問点の発見の場となるような教具を工夫する。
- ・ 自分の考えを持たせる場となるような教具を工夫する。
- ・ 興味関心を持って最後まで作り上げられるような教材を工夫・開発する。

技術・家庭科教科経営案

技術・家庭科研究テーマ

一人一人の良さが生かされる授業づくり



④ 単元構想図作成にあたって

単元構想図 第1ユニット 生育と環境 [全5時間]

①植物の利用について考え、生活との関係を理解させる。 ②植物の生長のしくみを理解させる。 ③植物の生育と、水、温度、光、養分との関係を理解させる。 ④植物の生育に必要な土のはたらきと、生育に適した土について理解させる。 ⑤草花・野菜の名称を知り、分類ができるようにさせると共に、その特徴を理解させる。
--









<貫く課題>植物の生育にはどのような環境を整えればよいのか。

学習前の意識 ・手が汚れるからいやだ。 ・世話がたいへんそうだ。 ・種をまいておけば、植物は生長するのではないか ・色々な土が、店に売ってあるけど、何に使うのかな	時数	1	2、3
	項目	植物と私達の生活	生育と環境
	本ね時らしい	植物の利用について考え、生活との関係がわかる。	植物の生育と水、温度、光、養分との関係がわかる。
	課題	植物はどうやって生長しているのか。	生育の仕方は環境とどうかわっているのか。
	主な学習活動	・今までの栽培の経験を出す ・植物が私達の生活にどのように役立っているか。 ・私達の生活に役立っている植物はどうやって生長しているのか。 ・植物の各作用、器官について知る。	・アサガオが大きくなるのになぜ土が減らないのか ・水の役割 ・空気の役割 ・光の役割 ・養分について
	願う学びの姿	植物の栽培の経験は、生徒一人一人違う。仲間の発言に耳を傾けると共に、今までの体験を思い出すことができる	仲間の発言から、今までの体験を思い出したり、資料の中から、多くのことに気づける。
	生き生きと動く場	1. 今までの栽培の経験を語る場 栽培経験のあるものに多く語らせたい。	1. 写真、資料、体験などから環境条件と生育の違いを見つける場 資料から体験談を思い出したものを生かして、実生活へ広げたい。
生徒意識	・植物私達の生活に役立っている。 ・植物は不思議だ。	・色々な環境条件が揃わないといけない ・植物には適した環境がある	

<作成について工夫・配慮したこと>

- 教科テーマ「一人一人の良さが生かされる授業づくり」にせまるために、授業のなかで、生徒が生き生きと活動する場、 に、生かしたい生徒の良さなどを位置付けた。
- 生徒の学習前、1時間ごと、学習後の生徒の意識の流れを大切にした。
- 願う学び合いの姿では、授業のどの場面で、どんなことを学ばせるのかをはっきりさせた。

⑤技術・家庭科におけるバズ

	バズの種類	バズのねらい	バズの方法	留意点
課題・問題追求	見つけ合う 深め合う 発表し合う	○課題を見つける ○課題(問題)の追求及び解決 ・課題(問題)に対して、個人の考えを交流することにより、個人の考えの修正、深化を図り、課題(問題)を解決しようとする。	 扇形法  自由会話法  リーダー法 ・一人一人に意見を出させ、共通点、対立点を明確にする。 ・具体物を通して、様々な方法を試す。	・ノートに自分の考えを書かせ、足場作りをさせる。 ・話し合いの観点を明確に指示 ・発表者は固定させない。
実験・観察	見つけ合う 発表し合う 深め合う	○実験・観察の効率化及び多様な見方・考え方を出させる ・実験や観察を班の仲間の働きかけにより、効率的に進める。 ・実験や観察の中で多様な見方・考え方を話し合う	 自由会話法  リーダー法 ・分組・役割をはっきりさせ、班長が中心となり実験・観察を円滑に進め、その中で気づいたことを交流し合い、探めていく。	・全員参加できるように、分組、役割をはっきりさせる。
実習・作業	見つけ合う 教え合う 確かめ合う	○作業における基礎・基本の定着及び作業の効率化 ・正しく作業が進められているかを確認し、基礎・基本について相互評価する。 ・わからないことを聞きながら、または教えながら、作業を効率的に進める。	 対人法  自由会話法  リーダー法 ・ペア又は班で明示された基礎、基本をおさえ、正しく作業が進められているかを確認し、次の作業へ進む。 ・わからないところを気軽にペア、班員に聞きながら、また、教え合いながら協力して作業する。	・作業にかかわる基礎、基本を明確にしておく。 ・作業到達目標を決めさせ、励まし合いながら、作業が進められるようにする
評価・点検	発表し合う 確かめ合う	○学習に関する評価、点検 ○片付けを徹底し、安全な教室環境を保つ。 ・到達度評価及び個人、ペア、班の取り組みを評価する。 ・片付けがしっかりできたか点検する。	 自由会話法  リーダー法  扇形法 ・個人、ペア、班で到達目標及び取り組みについて、お互いに意見を出し合い反省をする。 ・片付け、掃除がしっかりできたか点検する	・反省の中から、次時の課題をはっきりさせる。 ・片付け、掃除はそれぞれの係が中心となり、すみやかに終わらせる。

家庭系列における実践例<被服3 休養着(パジャマ)の製作 3年生女子>

生徒たちは、パジャマのデザインには興味をしめすが、適した布地の種類や名前については知らないで身につけている。また、自分の思いが先行し、休養着にふさわしい色、柄、形などを適切に選ぶことができない。
そこで、パジャマにふさわしい布地を知るとともに自分の布の選択に役立てるために、次のようなバズを設定した。

バズのねらい パジャマにふさわしい布地を知るとともに、自分の布の選択に役立てる。

	バズの種類	バズの方法	バズのねらい
1	見つけ合う	自由会話法	ブロード、ギンガム、ネル、サッカーの4種類の布をもとに、その布の特徴を見つけて合う。
2	発表し合う 深め合う	自由会話法	一人一人の作りあげたいパジャマのイメージを出し合い、自分の形、色、布地について具体的に話す。

<バズ1から> 実物と布の特徴を書いた資料をもとに、自分の見つけたことを活発に出し合っていた。バズを用いたことにより、多様な見方ができ、布地の種類と名前が定着できた。

<バズ2から> 多種類の柄の布を用意し、自分のパジャマのイメージを自由にさせた。仲間の考えを聞くことで、自分の考えもより確かなものになり、製作への意欲を示していた。

運動習熟のメカニズムの究明

----- ひとりひとりを生かす学習集団のあり方 -----

1 体育科における共存の喜び

体育の本質は、運動経験をより多く積ませることによって、その技能を上達させることである。しかし、残念なことに自分の運動している姿は、直接見ることができないから、その上達をとらえることがむずかしい。そこで、技能をより向上させていくためには、仲間のアドバイスが必要となってくる。つまり、仲間が声を出して教えたり、励ましたり、助け合ったり、また、自分も声を出して、活発に動き働きかけていくことが、お互いの技能向上につながっていくのである。その結果、できないことができるようになったり、あるいは、よりうまくできるようになった時、体育授業の中での共存の喜びが生まれてくると考える。また、チームゲームでは、仲間といっしょになってがんばり、教え合ったからこそ勝てたんだという思いが、共存の喜びにつながるものと考えられる。体育科では、以上のような立場で、共存の喜びをとらえ、授業を進めていきたいと考える。

2 体育科でとらえた学び合いの弱さと、願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

- ・「できるようになりたい」「うまくなりしたい」「ゲームに勝ちたい」といった願いを個々にはもっているが、仲間と共に力を合わせて実現しようとする意識が弱い。
- ・仲間の失敗を責めたり、ひやかしたりすることがある。
- ・真剣に話し合ったり、練習し合ったりすることがなかなかできない。
- ・勝敗やできるできないには敏感であるが、課題を追求したり、つまづきを克服したりする過程での粘り強さに欠ける。

(2) 願う学び合いの姿

- ・仲間と共に課題を達成するために、教え合ったり、助け合ったり、励まし合ったりして学習できる。
- ・技能のレベルの低い子やミスの多い子に対しても、重いやりの気持ちで助言や励ましや補助等ができる。
- ・自分のめあてはもちろんのこと、仲間のめあても意識して、ペアやグループ学習ができる。
- ・計画会、練習、作戦、反省会等では、真剣な態度で積極的に参加できる役割を自覚した発言ができる。

3 願う学び合いの姿にせまるために

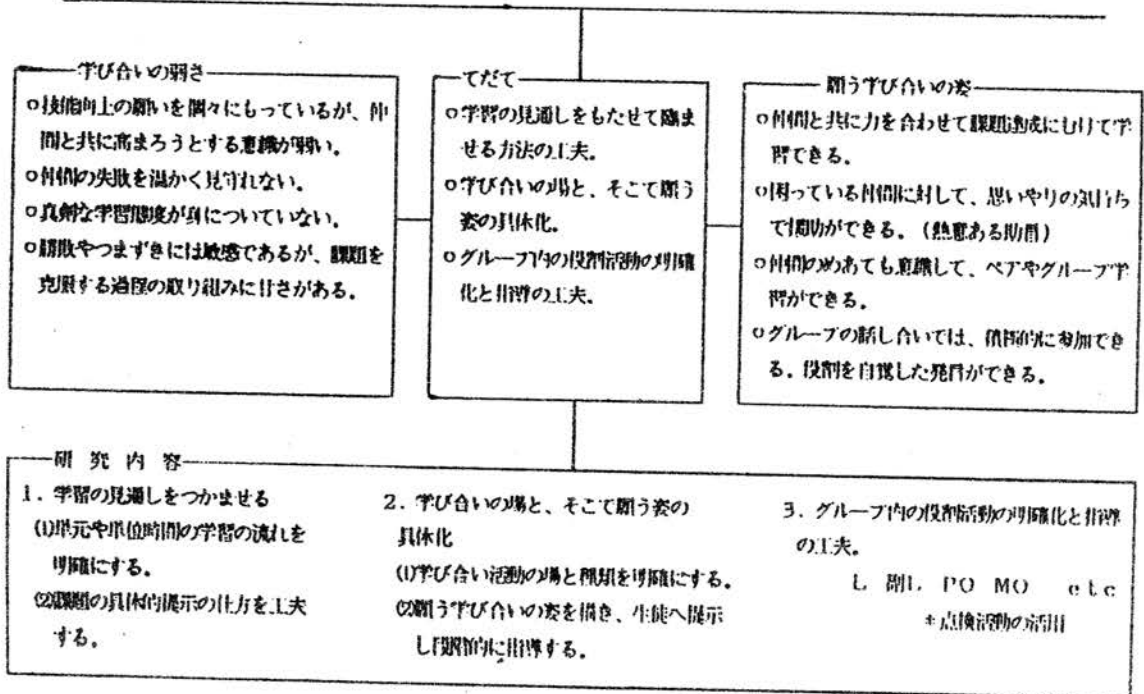
- (1) 学習の見通しをもたせて臨ませる方法の工夫
 - ・単元の指導計画や単位時間の展開（一時間の流れ）を明らかにし、学習カードを作成して利用させる。
 - ・一人一人の生徒が意識しやすく、だれにでもできそうな課題の提示の仕方を工夫し、意欲をもって学習に立ちむかえるようにする。
 - ・学習過程における学び合い活動の場を明確に位置づける。
- (2) 学び合いの場と、そこで願う姿の具体化
 - ・学び合い活動の場と種類を明確にし、その必要性を理解させることで、主体的に活動できるようにする。
 - ・願う学び合いの姿を描き、生徒には学習ノート等で提示し、点検活動を進めながら段階的に指導する。
 - ・活発な練習量、前向きな取り組み姿勢を大事にさせる。
- (3) グループ内の役割活動の明確化と指導の工夫
 - ・L（リーダー）PO（技能観察係）MO（態度観察係）等の係は、グループのまとまりを保つためだけでなく、それぞれの役割の必要性を十分に理解させたうえで活動させる。
 - ・係別に集めてのリーダー指導を推進する。

体育科 教科課程案

体育科研究テーマ

運動学習のメカニズムの多面性

一人一人を生かす学習集団のあり方



条件 過程	運動に関するねらい		集団に関するねらい		生徒の運動面の活動を示す
	学習 運動	内容 （学び合いの姿）	学習 運動	活動	
計画 展 開	1	◎ 計画会 相手の構えのすきをとらえたりすきを作ったりして、積極的に踏み込んで打突することができる	礼儀正しく、みんなそろってきびきびと活動できる仲間をめざす	◎ 学習課題を知り単元全体の見通しを持つ ◎ グループを作る ・ 役割の分担・きまり決め	左下へ
	2	◎ 基本動作 ・ 防具のつけ方、しまい方がすばやくできる ・ 座礼、立礼、そんきょ、足さばきができる ・ 竹刀さばきができる	・ 先生やリーダーの指示に従い礼儀正しく、そろって素早く活動できる	◎ 基本動作（全体・班練習） ・ 礼法 ・ 構え ・ 足さばき ・ 体さばき ・ 素振り ・ 竹刀打ち ・ 防具の着脱	
	3				
	4				
	5				
	6	◎ 基本打ち ・ 面打ちができる	・ リーダーの指示に従いお互いに指摘し合いてきばきと活動できる	◎ 基本打ち ・ その場でゆっくり正確に ・ 一歩踏み込んで打つ ・ 気剣体を一致させて打つ ・ 残心を考えて打つ ・ 鋭く早く打つ	
	7	・ 小手打ちができる			
	8	・ 胴打ちができる			
	9				

技能面に関する教師の指導の立場

生徒の役割活動を示す	教師の指導の立場	
	学習活動 集団	教師の指導 集団
右 上 よ り	◎ 剣道の特性を説明し、課題達成の手だてをつかませる ◎ 授業の進め方を説明する	◎ グループ内での教え合い、はげまし合いの大切さ、きまりの必要性を話し、グループ内での意志統一をさせる
	◎ 全体指導を中心に行う ◎ うまくできない生徒には、個別に指導する ◎ 基本動作は、師範をもって説明する ◎ うまくできない生徒には、その場で動作をしながら指導する ◎ ゆっくり大きな動作からはじめ、次第に早くしていくよう指示する ◎ 有効打は気剣体の一致と残心であることを理解させる	◎ リーダーに指示の仕方を指導する ◎ 指示に従えない生徒に対しては仲間とそろって活動することの大切さを説明する ◎ 全体に動きの良いグループをはめる ◎ 班活動がうまくできない生徒については、仲間とのかかわりの中で、自分の行動を反省させる ◎ うまくできないからといって、学習意欲が欠如しないようにグループの援助を強化させる

* 作成についての工夫・配慮

① 学習内容、学習活動、教師の指導をそれぞれ運動の側面、集団の側面の両面からとらえて書くようにしている。

② 「教師の指導」のところでは、授業をイメージして、具体的に書くようにしていること

5 体育科におけるバス

NO	バスの種類	バスのねらいと内容	バスの方法	留意点
1	「確め合会」	<ul style="list-style-type: none"> グループの課題を確認する。 自分や仲間の課題を確認する。 練習の方法を検討する。 PO・MO等の係から要望や指摘をする。 	<ul style="list-style-type: none"> リーダーがグループ課題を提案し、PO・MOがそれぞれ技能・態度面について補足する。そして、検討しあい、グループの課題を決め、個人課題も発表しあう。評議会では、当時の成果や問題点を示す資料をできるだけ用意し提示する(PO・MO)。 	<ul style="list-style-type: none"> 役割 <ul style="list-style-type: none"> シ……司会の仕方、リードの仕方 グループ課題 PO……資料づくりと成果と問題点のを見つけ方 MO……きまりの設定の仕方、点検の仕方 バスする場所の固定化
2	「練習し合会」 (動きながら) (観望) (指示)	<ul style="list-style-type: none"> 個や集団が一つの目標(勝利、技術の向上)をめざして、言葉や身体の動きで助言・練習・激勵をする。——活動の途中にバスをする—— 仲間どうして必要に応じて教え合いや作戦会をする。(ゲーム中失敗が重なったリムードが厚くなった時、練習にゆきづまった時) 課題追求のゆきづまりやトラブルが発生した時に教師がバスを指示し、指導助言を与える中で問題の解決に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 短時間に要領よくやる。「ファイト・オー」などの声を終わりにかけたりしてムードを盛りあげようとする。 顔をかいて説明しあったりする。 やる気を低くしてしまった子のいる班、全体のムードが沈滞してしまった班、つまずきの特に大きい子のいる班が行う。 司会は教師またはリーダー 	<ul style="list-style-type: none"> 声の種類 ①技能達成 ②仲間づくり 必要性 非難や軽蔑におうらいらない リーダー指導(必要性 対象 方法) 成果を広める バスをとる場面の指導(シ指導) バスの要望の仕方 (作戦板) 問題点を指摘する。そして、解決の糸口を見つけさせる。(特訓、態度の是正) 次時に見聞け、事後指導する。成果と問題点
3	「決め合会」	<ul style="list-style-type: none"> 前半の練習やゲームの様子をよりかえり、問題点や課題達成度を明確にし、それをもとに後半のめあてや作戦を決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> リーダーやPO、MOが中心になって、グループ課題や個人課題について、一人一人に確め、問題点を明確にして後半練習のポイントを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 最低一人一発言ができるように約束する。
4	「確め合会」 (よりかえる)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の課題達成度をよりかえり、問題点や解決方法を深る中で次時の課題を明確にする。 本時の学習で、技術的に伸びた仲間や努力した仲間や態度の良かった仲間等を出しあってほめ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習ノート(シ PO・MO)で、本時の学習よりよりかえり点検しあう。 拍手をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のことはもうんのこと、仲間のことについても指摘ができる。

*体育科でめざす、より高いバスの姿は、バス形態をとうなくとも、生徒目らが班やチーム内で、目的的・自主的に助言、練習、激励等ができることである

【実践例】

(单元名) バスケットボール(1年女子)

(本時のねらい) 『相手のボールになったら、いそいでゴール下に戻ってゾーンディフェンスを組んでシュートを防ごう』

(バスの課題) 『今日の課題に対して、前半ゲームの様子についてグループで話し合いなさい』

(バスの様子)

シ 「作戦(課題)についてどうでしたか」

班員A 「ボールについてしまう子がいたので、作戦どうりいきませんでした」

班員B 「声をかけた時は、なんとか速く戻ってゾーンを組めたよ」

班員C 「そして、ゾーンを組む時は、もっときちっと組むといいよ」

シ 「今度の後半のゲームでは、みんなが意識して言われなくても速く戻ってきちっとゾーンを組むぞ」

英語に興味を持たせ、進んで言語活動に取り組ませる授業づくり

① 英語科における共存の喜び

英語は、言葉である。言葉は、情報を相手に伝えるという役割を果たす。英語は、相手に自分の意志を伝えたり、あるいは相手の言っていることが理解できたりして、情報が伝わったときにその機能を果たすことができる。したがって、英語科における共存の喜びは、英語を使って、自分の身の回りのことや考えたことを相手に伝えたり、相手の言っていることを理解したときまたはその学習過程において生れるものである。

一人ではできなかつたことも、仲間のなかで練習したり教えたりしてできるようになった、ということがある。生徒個々がそれぞれの特性を発揮するなかで、相互に励まし合い、認め合いながら学習することを通して、英語学習への態度、関心を高め、英語の表現力を高めていくことができると考える。一人一人を生かし、学ぶ喜びを持たせていくために、以上のようなコミュニケーション活動を大切にして、仲間と共に学ぶ喜びを持たせたいと考える。

② 英語科でとらえた学び合いの弱さと、願う学び合いの姿

(1) 学び合いの弱さ

- ・自分の表現（話す、読む、書く）を、相手に伝えようとする意欲、態度が弱い。
- ・相手が伝えようとするに対して受けとめが弱く反応も少ない。
- ・学習に対してねばり強く、繰り返して練習することが苦手であり、お互いに高まり合う姿があまり見られない。
- ・「仲間にこんなことを伝えたい」「仲間とこんな活動ができるようになりたい」といった学習に向かう願いや意欲に欠ける。

(2) 願う学び合いの姿

- ・自分の表現（話す、読む、書く）を、相手に積極的、意欲的に伝えようとし、英語を使う楽しさが体験できる。
- ・相手が伝えようとするに対して、積極的、意欲的に受けとめ反応できる。
- ・ねばり強く反復練習して、表現方法を身につけようとお互いに協力できる。
- ・学習に向かう願いやめあてを持ち、自己の向上や仲間の向上のために努力できる。

③ 願う学び合いの姿にせまるために

(1) 授業の構造化

- ・単元の目標、各単位時間の目標を題材、言語材料、言語活動の面から分析する。
- ・単元構想図を作成し、単元や単位時間の構造化をはかる。
- ・コミュニケーション活動が位置づくよう、学習過程を見なおす。

(2) 指導方法の改善

- ・反復練習のさせ方を工夫し、表現方法をより効果的に身につけさせる。
- ・コミュニケーションのさせ方を工夫し、英語を使う楽しさを体験させる。
- ・評価方法の工夫を行う。

(3) 小集団の生かし方

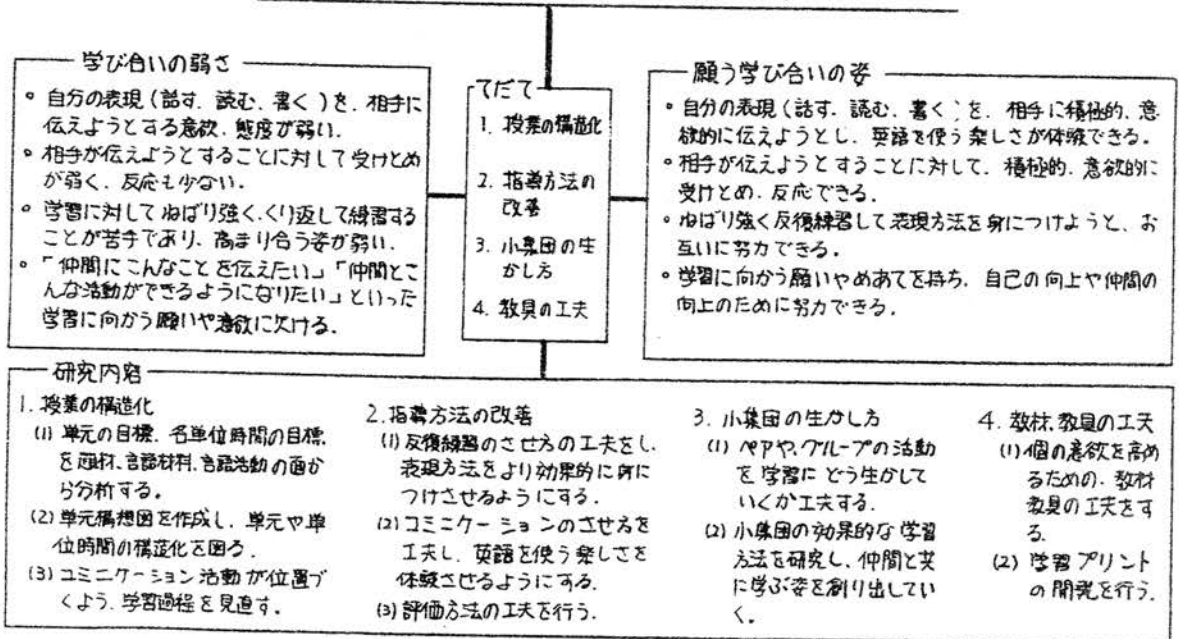
- ・ペアやグループの活動を学習にどう生かしていくか工夫する。
- ・小集団の効果的な学習方法を研究し、仲間と共に学ぶ姿を創り出す。

(4) 教材、教具の工夫

- ・生徒の意欲を高めるための、教材、教具の工夫をする。
- ・学習プリントの開発を行う。

英語科 教科経営案

— 英語科 研究テーマ —
 英語に興味を持たせ、進んで言語活動に取り組みさせる授業づくり
 — 小集団を生かしたコミュニケーションづくり —



4 単元構想図作成にあたって

Sunshine 1

単元構想図

Lesson 12 「私の日課と同じかな？」

単元目標 “What time ~ ?” “How many ~ ?” “When do you do ~ ?” の用法と、その答え方がわかり、これらの文型を用いて、友達(ペア)や自分の日課について対話することができる

← 単元全体の目標

つきたい力 1. 友達の日課について、示された言語材料を用いてたずねる力
自分の日課について、問われたことに答える力
2. 友達の日課あるいは自分の日課について、まとまりをもって話す力

← 題材、言語材料を英語科の特質からみて、重点としてつきたい力

	第 1 時	第 2 時
つきたい力	朝の日課(起床時間)について、示された言語材料を用いて対話する力。	学校での日課(授業)について、示された言語材料を用いて対話する力。
本時のねらい	時間をたずねる“What time ~ ?”と、時刻を表す前置詞 at の用法が理解でき、朝起きる時間について友達と対話表現できる。	数をたずねる“How many ~ ?”の用法が理解でき、それを用いて学校での授業について友達と対話表現できる。
題材・言語材料	・ 本文 § 1 ・ What time ~ ? It ~ . ~ at ...	・ 本文 § 2 ・ How many ~ ? I (We) have ~ .
言語活動	A: What time do you <input type="text"/> every day? B: I <input type="text"/> . A: <input type="text"/> ? B: <input type="text"/> .	A: How many <input type="text"/> do you have? B: We have <input type="text"/> . A: <input type="text"/> ? B: <input type="text"/> .
振り返り	朝の日課に関する対話の内容について、グループやペアの仲間に、語いや文型を援助する。	学校での日課に関する対話の内容について、グループやペアの仲間に語いや文型を援助する。

← 単元でねらうつきたい力にもとづいて、単位時間にならうつきたい力

← 「つきたい力」をつけさせるために願う本時のねらい

← その指導をするためにとりあげる題材、言語材料








← どんな言語活動をさせるのか

← 本時のねらいに照らし合わせて願う学び合いの姿

作成について、工夫、配慮したこと

- (1) 単元構想図は、何を取り上げて、生徒にどのような力をつけていくかを明らかにし、どう指導していくかを構造的に示した指導計画である。英語科では、単元の目標を、題材、言語材料および、言語活動の面から分析した。
- (2) さらに言語活動は、コミュニケーション活動として位置づくよう、学習の出口としてめざす活動としてとらえた。
- (3) 願う学び合いの姿については、授業のなかで相互に励まし合い、認め合いながら、学習できる場面を意図的にとらえて作成した。

⑤ 英語科におけるバズ学習

バズの種類	バズのゆらい	バズの方法	留意点	
練習し合う	総集を用いて新文型が言えるよう練習や疑問文等のパターンワークスを練習する。教科書本文を正しく音声化できるよう練習の場面を理解しながら対話練習を行う。新出単語を読み書きできるように練習する。	対人法 ペア練習 	リーダー法 	ペア練習や、グループ練習が確実に行われるよう。練習後の発表や学習プリント等でも互いの練習を促していく。
確かめ合う	前時の内容を復習し、確かめる。班で問題を出しながら、単語等確認する。予課の確かめ、持ち物の点検を行う。新文型、文法事項についてポイントを理解する。課題にもとづいて本文内容を確認する。	ラスト法 グループワーク 	輪番法 	グループ内で解決できなかった点については班集体をもち、学年全体で確認する。
作り合う	表現できない点を工夫したり、教員が表現しようとする内容を交差し、工夫する。表現をさらに高めるよう助言する。	自由会話法 表現方法を自由にできる会話 		生徒だけでは表現できない点については、教師側から積極的に助言してやる。
発表し合う	自分の表現文を班の仲間を紹介する。文型や内容を理解して、対話の発表を行う。文型や内容を理解して、音読の発表を行う。要約文や作品を発表する。	輪番法 一人ひとりの発表を全員が確認していく。 		学習の発表の場として、グループで発表し合うようにし、仲間の発表に対して寸評を加えるようにしたい。
教え合う	基本文、本文内容等についてわからない点を出し、教え合うことにより理解する。発音問題について、教え合い理解する。	自由会話法 わからない点を自由に教える。 		わからない点を自由にたずね合うようにする。

実践例（「練習し合うバズ、発表し合うバズ」の例）

単元: Sunshine 3 [A Camp on the High Praire]

本時のゆらい: 開拓時代のアメリカ合衆国の厳しい自然なかで、旅をするLaura一家の物語を読み、話の概要をとらえさせ、その要点をまとめて話せるようにする。

授業におけるバズの位置づけ:

バズの課題: 1. 物語のあら筋をまとめた文が音読 —— 暗唱できるようにしよう。

(グループのなかまの援助、応援により、発音、アクセント、ポーズ、抑揚などについて留意しながら、言えるよう練習する。)

2. どのくらい言えるようになったか発表してみよう。



①	②	③

合計 ○

- ・ ①の場面を口頭導入し、話の大まかな内容をつかませる。
- ・ 聞かせた内容について、Q-A に答えさせることにより確かめさせる。
- ・ Laura の一家はどんな様子で川を渡っているのか、監を参考にしながらまとめさせる。
The river was (deep) and (fast).
Father (stayed with horses).
Mother (held the reins).
They knew (what they should do).
- まとめた文が音読できるようにする。
一人練習 → 個人練習 → チェックの順で行う。
- 監を見て、要点をまとめた文がいくつ言えるかバズでチェックさせる。

バズの方法: 対人法 (グループ内でペアを組む)

テスト法 (学習リーダーの司会)

・ 監を指差しながらあら筋が言える。———— 3点

・ 空らんプリントを参考にしてあら筋が言える。———— 2点

・ まとめた文を見ながらあら筋が言える。———— 1点

平成元年度 特殊学級教育計画

特殊学級の教育

ひとりひとりを尊重する民主的な明るくのびのびとした雰囲気と、三つくりする中で、互いに助け合い、はげましあうという本校の教育活動の中にあつて、障害の程度、心理的特性等に応じた教育をする。

- ・社会的自立し得る人間への育成
- ・健常児との交流により好ましい人間関係の育成
- ・治療・訓練を加えて、基礎的・基本的能力の育成

学校教育目標

民主的実践人の育成

特殊学級の生徒

特殊学級の生徒は、軽度精神遅弱児（IQ約50～75程度文部省判別基準による）を中心にして、泉地区に生活する生徒6名である。

1年	Iさん		
	Sさん	3名
	Tさん		
2年	K君		
	T君	2名
3年	K君		
	Sさん	2名
			計7名

特殊学級の指導の力点

- ① 心身の発達に応じた生徒の生活体験をできる限り豊かにする。
- ② より確かな身辺自立をさせ、自分でやりぬく力を養う。
- ③ 感覚・運動機能の改善や体力の増進をはかる。
- ④ 学校行事、生徒会活動、学年行事などの集団活動にすすんで参加し、互いにもっているねうちをわからせる。
- ⑤ 栽培の時間などを通して、協働の精神を生かし、将来の職業人としての素質を培う。

本年度の研究

共存の喜びを持たせる集団作り

—— 互いに高まり合う学習集団づくり ——

特殊学級 研究テーマ

ひとりひとりを伸ばす生活・学習指導のあり方

(指導過程の改善と教科教具の開発, 学習評価の研究)

学級指導の重点

	Iさん, Sさん, Tさん	Kさん, T君	K君, S君
教科 学習 の面	<ul style="list-style-type: none"> ◎学習のルールを確立する ・先生や友達の話をきく ・すすんで発表する ・わすれものをしない 	<ul style="list-style-type: none"> ◎学習を最後までやりぬく ・ノートづくりができる ・わからないことをしらべる 	<ul style="list-style-type: none"> ◎学習に自分からすすんで取り組む ・計画にそって学習ができる ・自分なりの課題をもって学習ができる
学級 会 の面	<ul style="list-style-type: none"> ◎友達となかよくし, 楽しい学級づくりをする ・きまりを守る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎係活動などすすんで取り組み自分の責任を果たす 	<ul style="list-style-type: none"> ◎充実した学校生活にする ・自分の持ちあじを十分に発揮できる ・集団の向上につくす
生徒 会 への 参加 の面	<ul style="list-style-type: none"> ◎生徒会活動に参加できる ・生徒会からの報告がわかり, きまりを守る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎リーダー, 係の指示がわかり活動する ・報告, 伝達が正しくできる 	<ul style="list-style-type: none"> ◎生徒会で決まったことを忠実に実行する ・T君, Kさん, S君, K君のよきリーダーとなって面倒をみる。

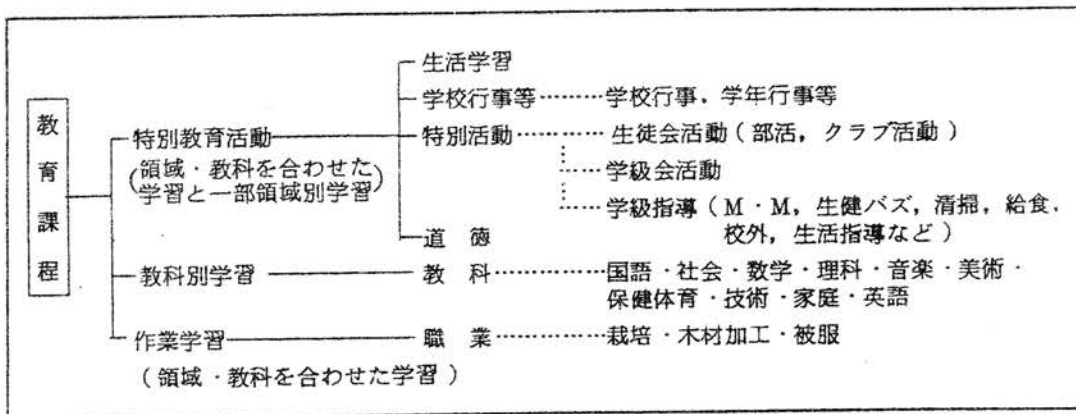
教育課程

○ 生徒の実態と教育のねらい

泉中の特殊学級（精薄児学級）は、いわゆる軽（中）度の精薄児である。もちろん、多少の能力差、障害差があるのは当然であるが、普通学級の併設であるが故に、学校行事等の生活面では、助けあい、はげまし合いながら参加できる生徒であることを標準と考えている。

教育のねらいとしては、基本的には、「社会的自立」である。これは単に知的な伸びだけを期待したり他人に迷惑をかけないだけの消極的なひとりだちではなく、人間としての豊かな育ちを期待したい。ひとりひとりの努力や伸びにも、ともによろこび、みんなが力をだし合い、認め合い、助けあって一つのものを生み出していく集団としての伸びにも、ともによろこびあえるような人間関係の中で、可能性のある全面発達を考えた。

○ 教育課程のしくみ



- ▶ 特別教育活動では、具体的な経験をとおして、みんなで協働し、生活に関することを学ぶことによって、みんなで考える態度や行動力を身につけ、生きて働く力を育てる。
- ▶ 教科別学習では、普通学級でいう教科に当たるものであるが、ひとりひとりの能力等の実態、興味、関心、系統性、反復性を考慮し、感覚や諸機能を高め、思考力や表現する能力を育てる。
- ▶ 作業学習では、将来職業人として働けるために、社会集団に適応し、自分の生活を自立させるような人間にすることである。そのためには、ただ集団活動や職業的技術を指導するのではなく、生徒の主体性を中核に据えながら、生徒自身の要求を汲みだし、作業活動を高めていく力にして、ひとりひとりの生徒の労働への志向性を育てる。

国語	社会	数学	理科	音楽	美術	技・家	保体	道徳	学指	クラブ	合計
8	2	5	2	2	2	2	3	1	1	1	29

進路指導について

- ① 卒業後の進路は〈表1〉のごとく多様な処遇があるが、本人の能力を最も適切な方向づけが重要であることは言うまでもない。

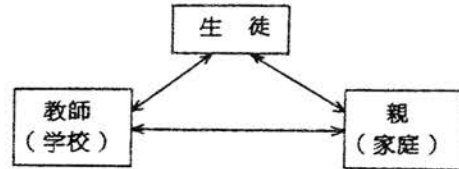
しかし、ややもすると保護者の過大評価や過少評価に振り回され、軽卒に本人無視の処遇を行う場合もある。

したがって、学習能力をはじめ

作業能力や日常生活能力を的確にとらえ、どの生活の場が適切であるかを客観的に考察することが前提である。それは就職可能な者でも、どのような職場でも適応すると限らないし、各社の施設にもそれぞれ目的や対象者のちがいがあからである。進学に至っては、安易な入学によって予期しない問題が生じてくる場合もある。したがって、これら諸機関の役割や内容などの調査・研究を十分に深めることが非常に大切だと考える。

- ② 当然の事であるけど、進路指導は3年卒業直前に行うものでも、3年になってから始めるものでもない。特に特殊学級では、日常生活の指導から、いわゆる読み、書きの指導まですべて進路指導の土台になっている事は言うまでもない。

それだけに親（家庭）——教師（学校）との指導の関連を密にしておくことが重要である。



特殊学級における道徳指導の基本的な柱

- ① 単なる知的な理解というのではなく、常に実際の行いをとおして、道徳性を培う。つまり、知識に先立つ行いとしての道徳が生徒の道徳性を高める。
- ② このような道徳性は、まわりの環境によってかたち作られて行くという。環境への批判と指導とによって、生徒は、道徳の内容を理解し、望ましい行いをするようになる。

8. 成果と課題

(1) 成果

- ① 学び合いの弱さをとらえ、願う学び合いの姿を授業の中で具体的にしてきたことにより、教師だけでなく生徒も“学び合う”ことを意識的にとらえるようになった。学習の中で仲間のよさを見つけ、認め、自分の学習に生かそうとしたり、学級や班の話し合いに進んで参加したり、あるいは、仲間のなかで学習課題を共に考え解決しようとする姿がいくつか見られるようになってきた。
- ② 教科の基礎、基本やつきたい力をとらえ、生徒の学習意欲を喚起し、学び合いの姿を生み出す単元構想図を作成してきたことにより、単元を通しての課題が明らかになり、それにかかわる単位時間の課題や指導内容、そして学び合いの姿を意図的により多く生み出すことができた。
- ③ 各教科の中で、学び合いの姿を生み出すバズ学習のとらえを明らかにし、授業のなかで位置づけてきたことにより、生徒同士人間関係が高まると同時に、学習参加度を高めることができた一斉学習では発言できないような消極的な生徒でも、バズの中では自分の考えを発表することができ、一人一人の生徒がやる気で参加し、学習意欲を高めている。

また、バズで学習することで、自分たちで課題をとらえ、解決方法を考え、自分たちで解決していく力がつき、学習方法が身についてきた。

さらに、バズ学習を取り入れることにより、覚える、練習するといった学習では一度に何人かの生徒を学習させることができ、学習効率を高めることができた。

(2) 課題

- ① “学び合い”の願うところは、仲間との学習の中でめあてを持ち、意見をだし合い、新たな見方、考え方や、技能を身につけ仲間と共に高まり合っていけることである。そのために、生徒同士の触れ合い、意志の疎通、気持ちの交流がなくてはならない。失敗したり、まちがえたり、照れたり、笑ったり、時にはおこったり、悔しがったり、あるいは、ちょっと得意になったり、そういう生徒同士の感情の交流を円滑にし、人間関係をあ

たたかいものにしていく土壌づくりを、もっと多面的に、継続的に考えていかななくてはならない。

- ② 生徒の学習意欲を喚起するような単元構想図を作成してきたが各単位時間の学び合いの姿は、まだ教師の期待する姿まで及んでいない場合が多い。一人一人が足場をしっかりと持ち、積極的に仲間とかかわっていく学習を生み出すよう、実践を通して単元構想図を見直しながら、さらに授業の改善を図っていかなくてはならない。
- ③ 各教科ごとにバズの種類をわけ、ねらいに応じてどんなバズをするのか明らかにしてきたが、学習をより確かなものにするために、学習過程のどこに位置づけるとより効果があがるのかをさらに考えていかなければならない。また、バズを通して個を大切に、育てていく面を一層研究していかなければならないと感じている。
- ④ 仲間とかかわり合う姿では、生バズ等の中で、気楽に班の仲間に語りかけができるようになってきているが、自分の意見を言いつつなすが、仲間の意見や考えに対して自分はこう思うというつながりが、まだ継続していかない。

また、班、学級の仲間に対して短所はよく目につき、注意もできるようになってきたが、仲間の長所やがんばりには目が向きにくく、仲間を認め励ます姿をさらに求めていかなければならない。

研究同人

岡田 脩
加納 建爾
水野せつ子
古山 正治
三宅 博雄
渡辺 宏彦
坂野 直樹
田中 一実
糸魚川貴敏
大東まち子

柘植 洋
市川 雅美
浜田 信明
本多 弘尚
井上 雅夫
澤田 博昭
若園 進
小瀬木英幸

中野 克義
深萱 榊江
松原 正人
板橋 晋司
岩井 利美
加藤 明覚
星野 健
水野 道子

鬼島良太郎
塚田 太郎
加藤 泰幸
可知 達也
林 康治郎
本藤 和孝
小松千鶴子
伊藤 祥子

田中 寿
田中 恭子
石垣 正明
桜井 良吉
田口 利一
後藤 泰隆
藤田 和恵
福岡 春子

昭和63年度

小池 昭司
千種 浩二

三浦 邦男
大平 浪代

原科佐登己
森川美智代

加藤 朝巳
渡辺 美恵

小木曾寛美
小木曾欣巳

お わ り に

泉西小学校のPTA会長さんは中学時代に学んだバズ学習のことを、良く覚えておられ、子どもに話して下さいます。本校にも中学時代、バズ学習を体験した先生がおられます。バズ学習2世が泉の町に次々と育っていることを、嬉しく思います。27年の歴史がバズ学習の評価をしてきています。泉の町に暖かい人間味溢れた人の輪が広がっていることを実感出来ます。

第24回バズ学習研究大会は泉中学校にとっては2回目ですが、私共泉西小学校にとっては記念すべき年になりました。今回の研究大会は、バズ学習研究では27年もの実績のある泉中学校と共同で開催をさせていただき、大変名誉なことだと感謝しています。中学校3年間のバズ学習から、小中一貫して9年間に発展したことは、小中の歴史の1ページにもなります。

泉西小学校はバズ学習研究を始めたばかりで、何も実績がありません。先輩である泉中学校から学びながら実践してきました。

この研究大会を機会に小中のパイプが、更に太くなっていくことを願って止みません。こうして小中合同で研究紀要を作り、お互いに学び合うことの意味を大切に、ずっと暖めていきたいものです。

バズ学習が誕生して30年程になりますが、その経緯をたどってみると、紆余曲折があったものの、これだけ長く続いてきたのは、それだけの教育理論と教育方法を持ち、かつ多くの教師や研究者を引きつける魅力があるからです。『バズ学習』は人間関係を中心にすえた学習と指導の理論であり、学力と人間性の同時達成をめざすものです。人間関係が希薄になったといわれ

る教育現場で『バズ学習』は永遠不滅のテーマであります。

この研究大会は大学の先生方と小中高の現場の先生が一体となって、研究実践をおこなっているものです。しかも、まったく自主的に会に参加し、自ら進んで研究を行うというところに大きな意義があります。研究指定というように、義務研究でないところが私共の誇りとしているところです。

さらに、学校現場の側で言えば、これだけ豪華で、しかも多くの大学の先生から指導を受けられる研究会は希であり、またとないチャンスです。私共はこうしたことを肝に命じて、頑張っていきたいものです。

今回の研究大会をきっかけに、小中とも専任の指導者をお迎えすることになりました。泉中学校は中京大学の杉江先生、泉西小学校は三重大大学の市川先生に理論的な背景から具体的な授業の在り方まで、きめ細かく指導して戴いております。紙面を借りて、今までのご指導に対して感謝の気持ちを表し、今後も末長くご指導下さいますようお願いいたします。

昭和61年8月に塩田先生が、泉中の前校長である清水先生と私を名古屋へ呼ばれて、泉中で研究大会を開催するよう話されました。全国バズにかけると先生の情熱をひしひしと感じました。まったく残念なことに、昭和63年7月7日急逝されてしまいました。この大会を一番喜んで下さるのは塩田先生ではないかと思えます。

ここに謹んで塩田先生のご冥福をお祈り致します。

平成元年11月10日

岐阜県土岐市立泉西小学校長 小 島 幸 彦